



# 2021年度 IRコンソーシアム 学生調査結果報告

2023年3月  
藤女子大学IR専門部会

本学では、2018年から国公立62大学が加盟する大学IRコンソーシアムの会員となり、学生に対し、学修行動や学習時間、能力に関する自己評価、満足度を中心としたIRコンソーシアム共通の調査項目で学生調査を実施しております。

本報告では、2021年度に実施した上級生調査結果をまとめ、2018～2020年度との経年比較を行いながら、2020年度に引き続きコロナ禍における本学の現状も含めて分析いたしました。各学科、事務部局等においてこの学生調査結果を参考にいただき、学生サービスの充実・強化を図るための取り組みについて立案・実施にお役立ていただき、さらに見直し・改善をいただく機会となれば幸いです。

最後になりますが、本調査にあたりご協力をいただきました学生の皆さまと教職員各位に心よりお礼を申し上げます。

藤女子大学IR専門部会

## I. 学生アンケート回答率内訳

## II. 学生アンケートの両学部の間年比較結果

### 1. 授業での経験

### 2. 学修に関する経験

### 3. 時間の使い方

### 4. 能力の変化

### 5. 教育への満足度

### 6. 設備・制度への満足度

# 学生アンケート回答率内訳（2021年度）

## 2021年度 IRコンソーシアム 学生アンケート回答者

学年	英語文化学科			日本語・日本文学科			文化総合学科			文学部計		
	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率
1年	60	82	73.2%	64	90	71.1%	68	90	83.7%	192	262	73.3%
2年	74	96	77.1%	85	115	73.9%	66	91	87.9%	225	302	74.5%
3年	48	98	49.0%	69	100	69.0%	75	98	73.3%	192	296	64.9%
4年	33	100	33.0%	41	90	45.6%	53	113	57.4%	127	303	41.9%
学科計	215	376	57.2%	259	395	65.6%	262	392	66.8%	736	1,163	63.3%

学年	人間生活学科			食物栄養学科			保育／子ども教育学科			人間生活学部計		
	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率
1年	30	39	76.9%	51	72	70.8%	56	81	69.1%	137	192	71.4%
2年	37	73	50.7%	47	76	61.8%	53	85	62.4%	137	234	58.5%
3年	20	56	35.7%	55	80	68.8%	26	65	40.0%	101	201	50.2%
4年	23	55	41.8%	70	84	83.3%	35	77	45.5%	128	216	59.3%
学科計	110	223	49.3%	223	312	71.5%	170	308	55.2%	503	843	59.7%

※学生アンケート実施期間 2021年12月15日～2022年2月1日

大 学 計			
学年	回答者数	対象者数	回答率
1年	392	454	72.5%
2年	362	536	67.5%
3年	293	497	59.0%
4年	255	519	49.1%
全学年	1,239	2,006	61.8%

# 学生アンケート回答率内訳（2020年度）

## 2020年度 IRコンソーシアム 学生アンケート回答者

学年	英語文化学科			日本語・日本文学科			文化総合学科			文学部計		
	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率
1年	76	94	80.9%	105	119	88.2%	77	92	83.7%	258	305	84.6%
2年	70	100	70.0%	82	101	81.2%	87	99	87.9%	239	300	79.7%
3年	59	92	64.1%	63	82	76.8%	74	101	73.3%	196	275	71.3%
4年	76	110	69.1%	64	99	64.6%	58	101	57.4%	198	310	63.9%
学科計	281	396	71.0%	314	401	78.3%	296	393	75.3%	891	1,190	74.9%

学年	人間生活学科			食物栄養学科			保育／子ども教育学科			人間生活学部計		
	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率
1年	51	72	70.8%	62	76	81.6%	70	85	82.4%	183	233	78.5%
2年	39	58	67.2%	66	80	82.5%	50	65	76.9%	155	203	76.4%
3年	36	54	66.7%	62	85	72.9%	61	76	80.3%	159	215	74.0%
4年	35	55	63.6%	73	95	76.8%	63	83	75.9%	171	233	73.4%
学科計	161	239	67.4%	263	336	78.3%	244	309	79.0%	668	884	75.6%

※学生アンケート実施期間 2020年12月7日～12月21日

文学部 : 2020年12月1日現在在学中の学生

人間生活学部 : 2020年12月1日現在在学中の学生

(休学者及び海外及び国内協定校留学中の学生を除く。)

大 学 計			
学年	回答者数	対象者数	回答率
1年	441	538	82.0%
2年	394	503	78.3%
3年	355	490	72.4%
4年	369	543	68.0%
全学年	1,559	2,074	75.2%

# 学生アンケート回答率内訳（2019年度）

## 2019年度 IRコンソーシアム 学生アンケート回答者

学科 学年	英語文化学科			日本語・日本文学科			文化総合学科			文学部計		
	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率
1年	89	96	92.7%	91	99	91.9%	88	97	90.7%	268	292	91.8%
2年	60	83	72.3%	61	85	71.8%	71	101	70.3%	192	269	71.4%
3年	86	100	86.0%	74	93	79.6%	62	87	71.3%	222	280	79.3%
4年	69	87	79.3%	59	104	56.7%	59	92	64.1%	187	283	66.1%
学科計	304	366	83.1%	286	381	74.3%	280	377	74.3%	869	1,124	77.3%

学科 学年	人間生活学科			食物栄養学科			保育／子ども教育学科			人間生活学部計		
	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率
1年	39	59	66.1%	76	81	93.8%	61	65	93.8%	176	205	85.9%
2年	47	54	87.0%	82	84	97.6%	73	75	97.3%	202	213	94.8%
3年	42	54	77.8%	88	98	89.8%	76	83	91.6%	206	235	87.7%
4年	50	63	79.4%	75	79	94.9%	79	89	88.8%	204	231	88.3%
学科計	178	230	77.4%	321	342	93.9%	289	312	92.6%	788	884	89.1%

※学生アンケート実施期間 2019年9月～11月

文学部 : 2019年9月25日現在在学中の学生

人間生活学部 : 2019年10月30日現在在学中の学生

(休学者及び海外及び国内協定校留学中の学生を除く。)

大 学 計			
学年	回答者数	対象者数	回答率
1年	444	497	89.3%
2年	394	482	81.7%
3年	428	515	83.1%
4年	391	514	76.1%
全学年	1,657	2,008	82.5%

# 学生アンケート回答率内訳（2018年度）

## 2018年度 IRコンソーシアム 学生アンケート回答者

学年	英語文化学科			日本語・日本文学科			文化総合学科			文学部計		
	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率
1年	85	93	91.4%	80	83	96.4%	67	107	62.6%	232	283	82.0%
2年	69	87	79.3%	85	102	83.3%	47	88	53.4%	201	277	72.6%
3年	74	80	92.5%	69	98	70.4%	55	91	60.4%	198	269	73.6%
4年	54	83	65.1%	36	85	42.4%	41	94	43.6%	131	262	50.0%
学科計	282	343	82.2%	270	368	73.4%	210	380	55.3%	762	1,091	69.8%

学年	人間生活学科			食物栄養学科			保育学科			人間生活学部計		
	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率
1年	49	56	87.5%	80	88	90.9%	66	75	88.0%	195	219	89.0%
2年	50	55	90.9%	84	96	87.5%	78	84	92.9%	212	235	90.2%
3年	50	62	80.6%	77	81	95.1%	74	87	85.1%	201	230	87.4%
4年	51	84	60.7%	76	84	90.5%	62	78	79.5%	189	246	76.8%
学科計	200	257	77.8%	317	349	90.8%	280	324	86.4%	797	930	85.7%

※学生アンケート実施期間 2018年11月～12月

2018年10月31日現在在学中の学生（休学者及び海外及び国内協定校留学中の学生を除く。）

大学計			
学年	回答者数	対象者数	回答率
1年	427	502	85.1%
2年	413	512	80.7%
3年	399	499	80.0%
4年	320	508	63.0%
全学年	1,559	2,021	77.1%

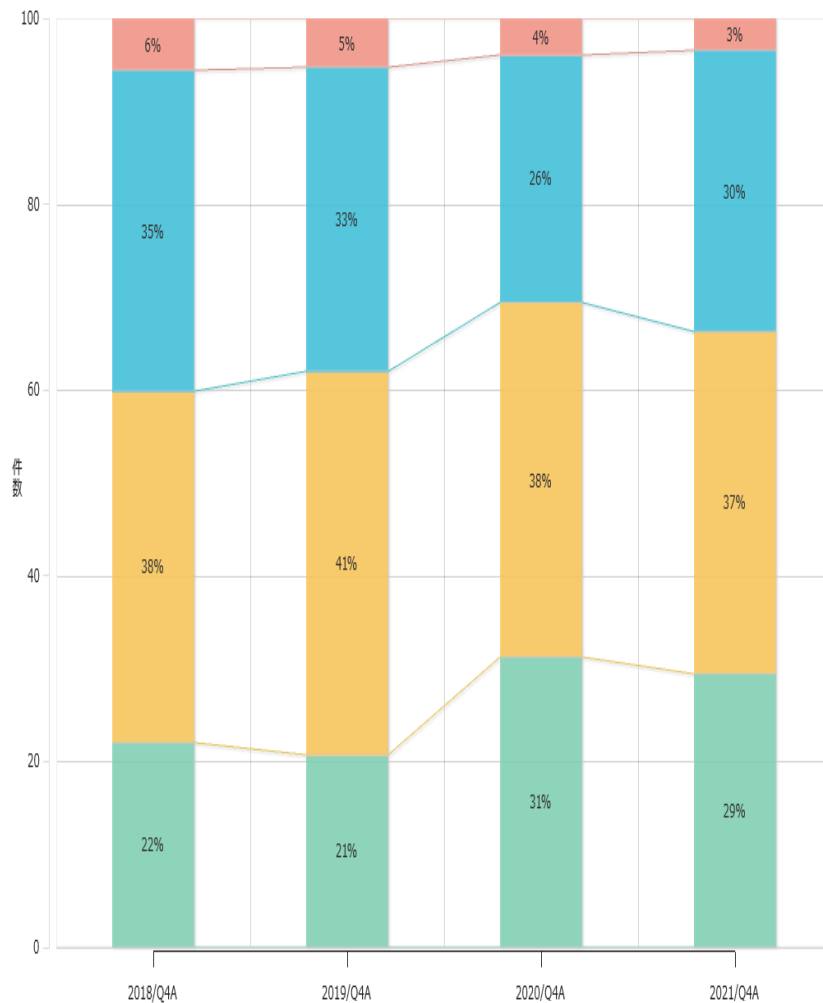
# 1. 授業での経験

**Q. あなたが受講した大学の授業で、次のようなことを経験する機会はどのくらいありましたか。**

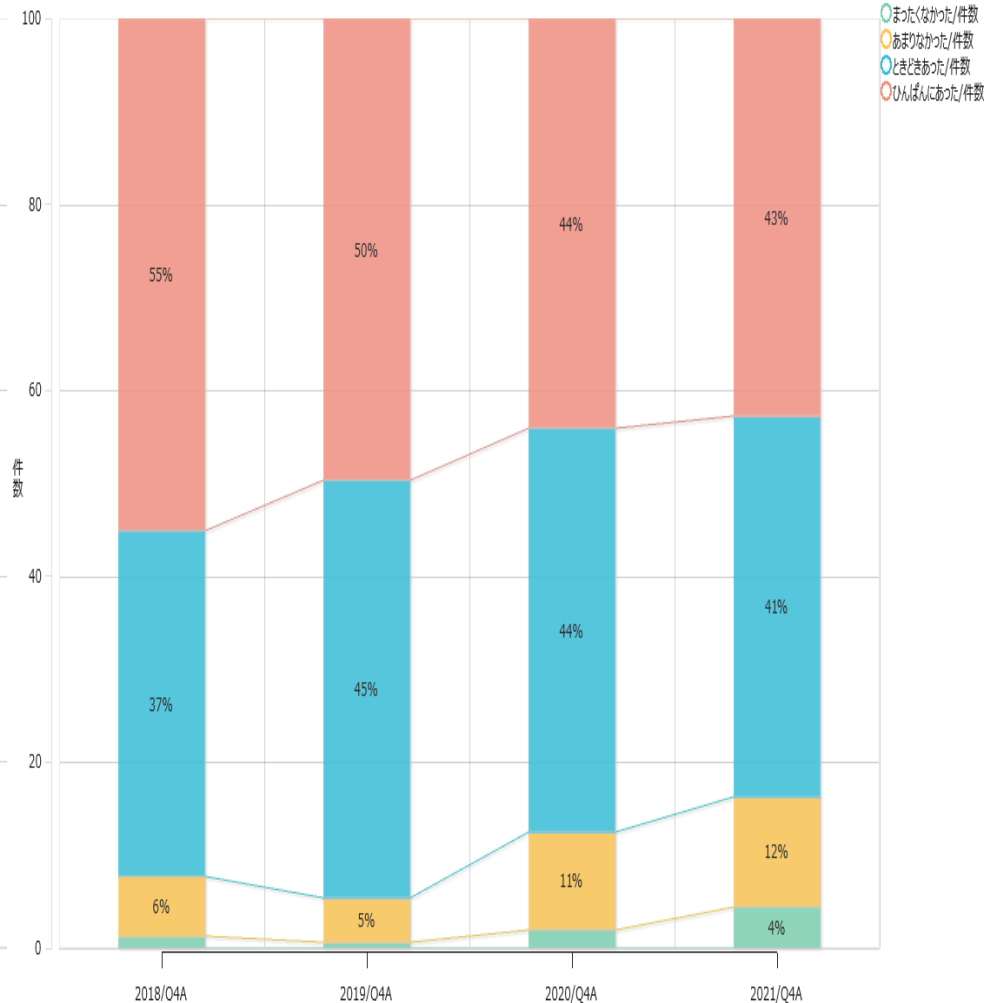
- 1-1. 実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ
- 1-2. 仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ
- 1-3. 授業内容と社会や日常生活のかかわりについて、教員が説明する
- 1-4. 授業の一環でボランティア活動をする
- 1-5. 学生自身が文献や資料を調べる
- 1-6. 定期的に小テストやレポートが課される
- 1-7. 教員が提出物に添削やコメントをつけて返却する
- 1-8. 学生が自分の考えや研究を発表する
- 1-9. 授業中に学生同士が議論をする
- 1-10. 授業で検討するテーマを学生が設定する
- 1-11. 授業の進め方に学生の意見が取り入れられる
- 1-12. 取りたい授業を履修登録できなかった
- 1-13. 出席することが重視される
- 1-14. TAやSAなどの授業補助者から補助を受ける



# 1-1. 実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ



文学部



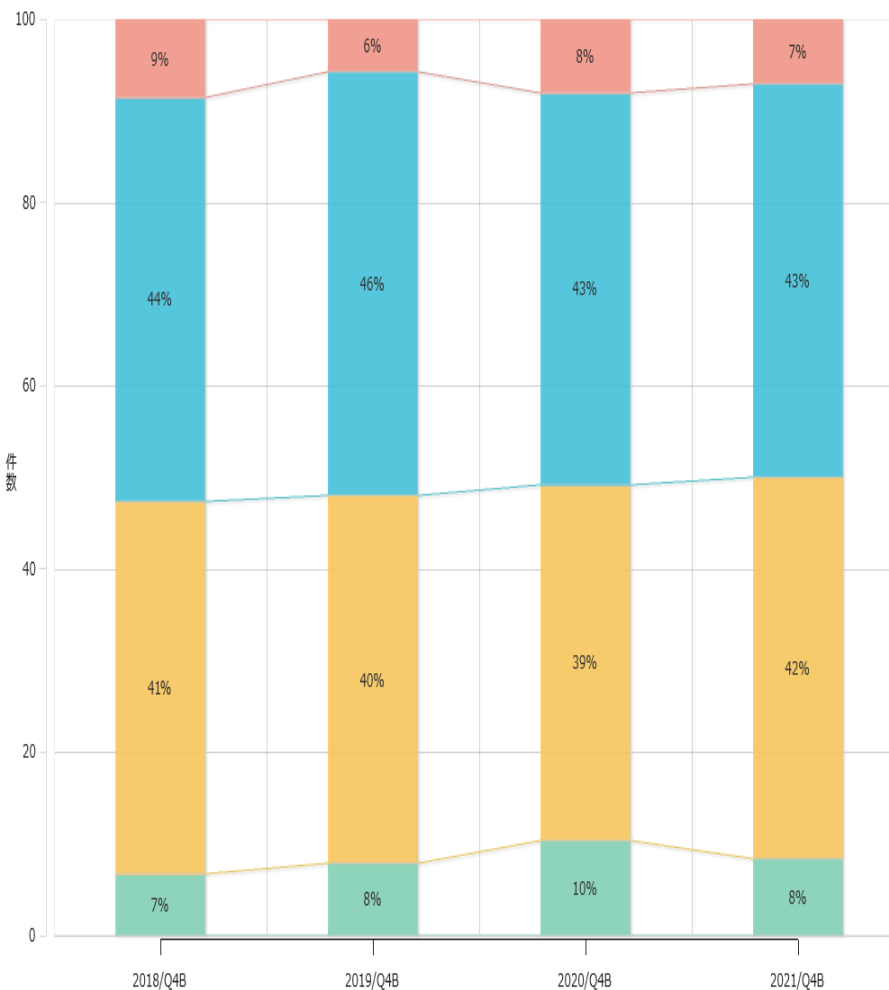
人間生活学部

【コメント】

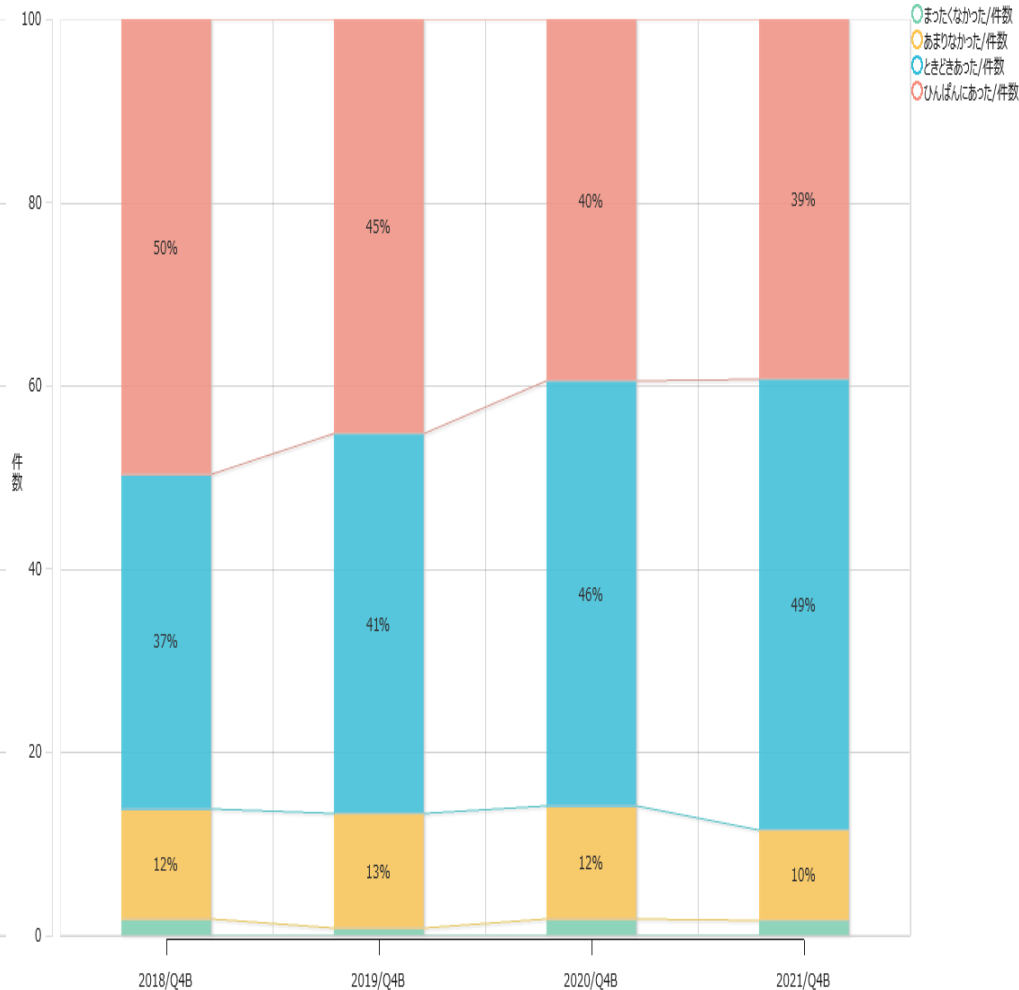
学部間での差が見られ、人間生活学部の方が「ひんぱんにあった」と回答した学生が多く、「ときどきあった」も含めると「あった」とする回答が8割～9割に上った。他方の文学部ではひんぱん・ときどき合わせて「あった」の回答が3～4割程度であった。これは、両学部のカリキュラム上の違いが反映されていると考えられる。年度ごとの変遷については、'20年度以降のコロナ禍による授業の非対面化・感染対策等が影響したのか両学部とも体験学習の機会がやや低くなっている。

# 1-2. 仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ

[Q4-B]



文学部



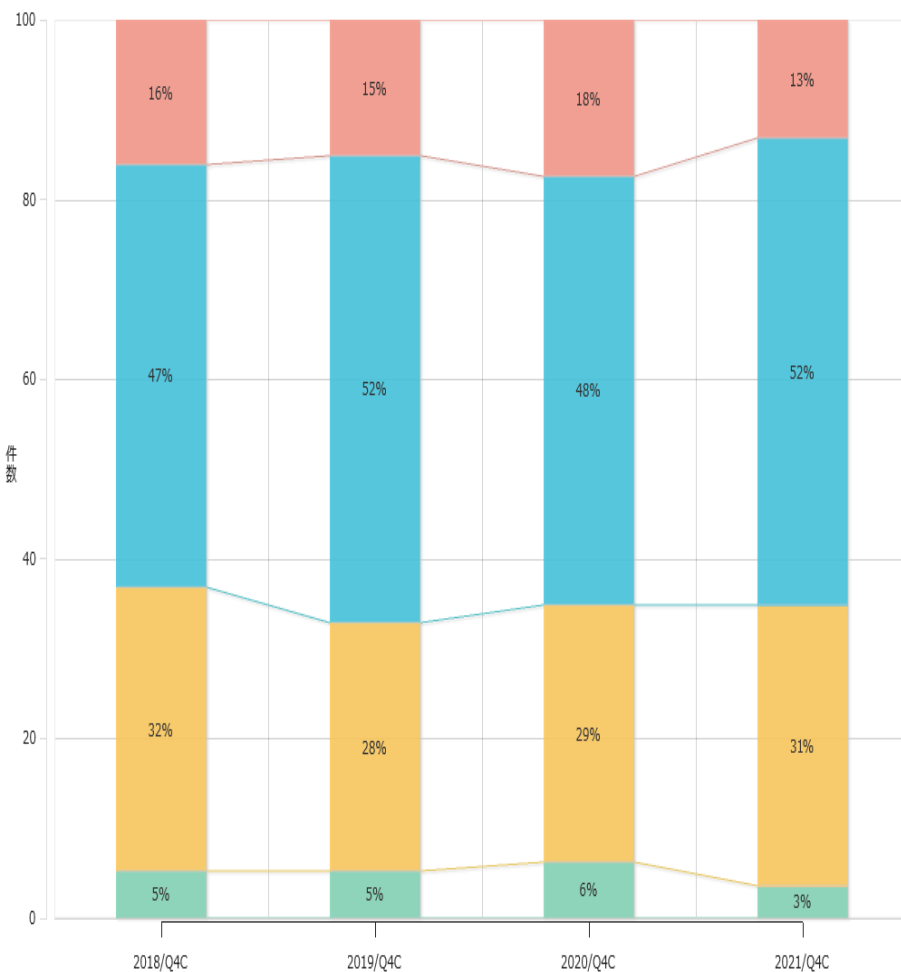
人間生活学部

**[コメント]**

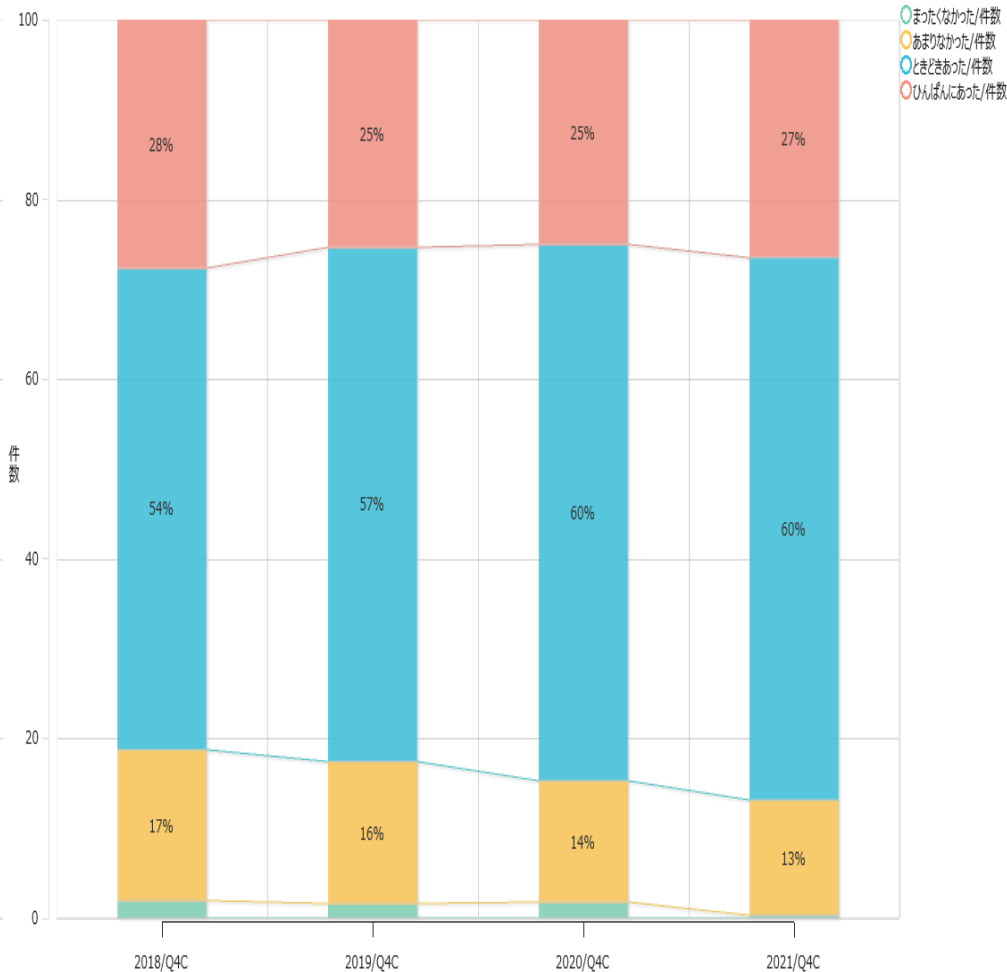
学部間での差がみられ、1-1での実験、実習、フィールドワークに関する項目への回答と同様に人間生活部の方が「あった」の割合が高かった。これも、カリキュラム上の違いが反映されているだろう。ただし、文学部においても半数程度の学生が「あった(ひんぱん・ときどきあったの合計)」としており、1-1の回答と合わせて解釈すると、実習等はあまりなかったと回答した一方で、仕事に役立つ知識やスキルに関しては学ぶ機会があったと感じている学生がいることがうかがえる。

# 1-3. 授業内容と社会や日常生活のかかわりについて教員が説明する

【Q4-C】



文学部

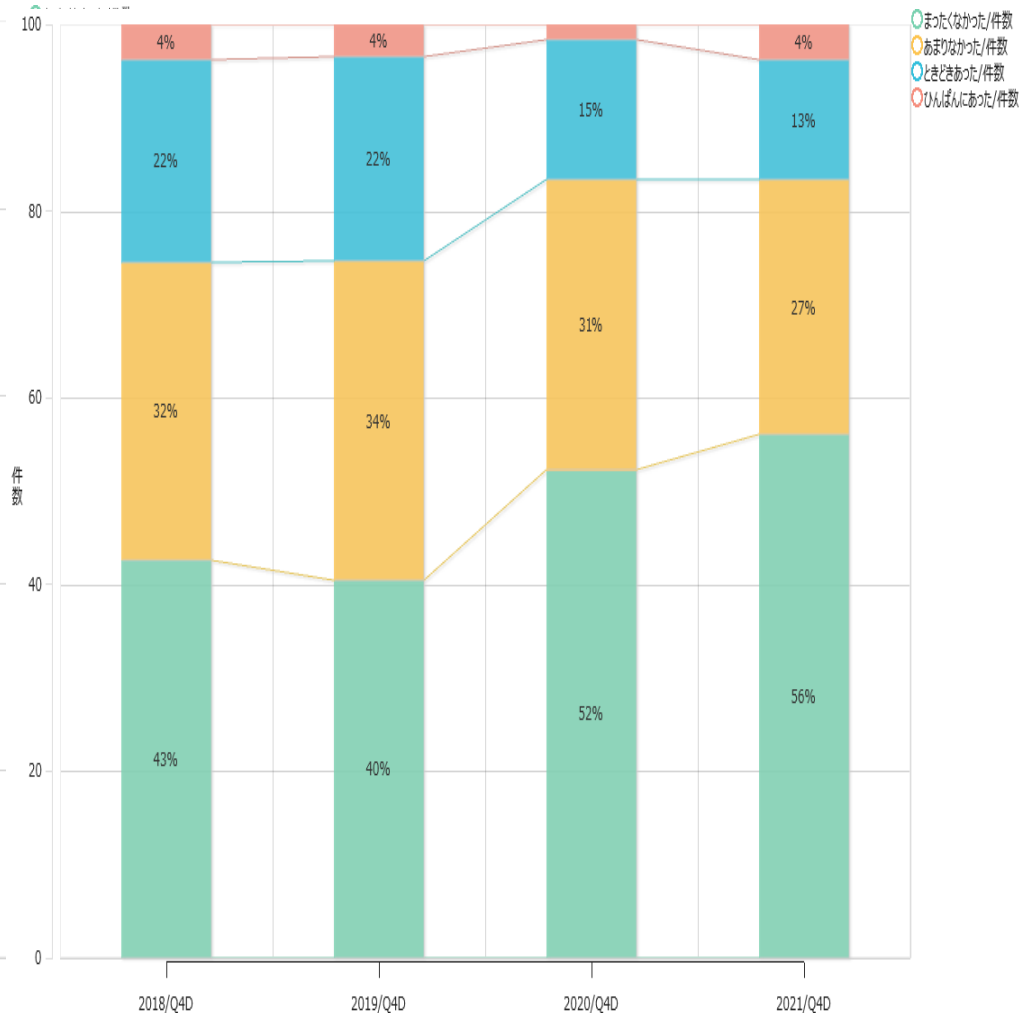
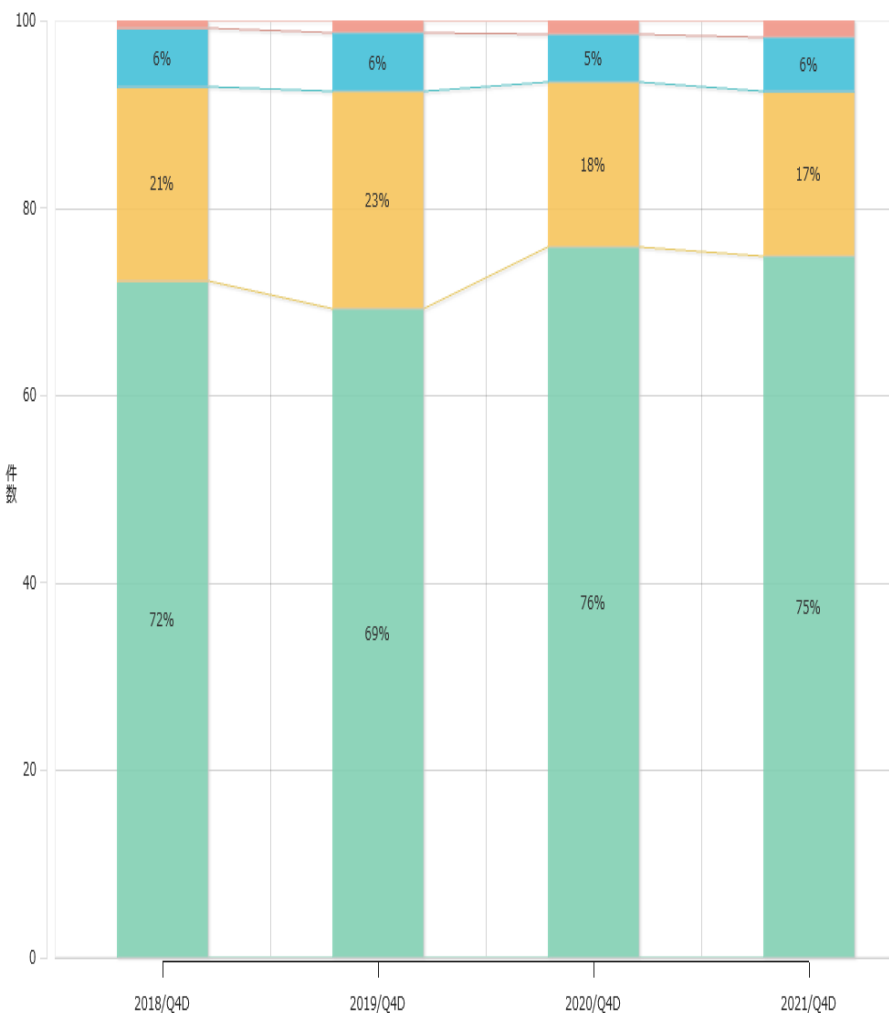


人間生活学部

【コメント】

1-1, 1-2と同様の学部間差が見て取れ、人間生活学部の学生の方が「(ひんぱんに・ときどき)あった」と回答した割合が高かった。これは、各学部で開講されている授業内容の性質上生じる違いと解釈できる。ただし、1-1, 1-2と比べると学部間の差は比較的小さく、人間生活学部の「あった」が8割強なのに対して文学部学生での「あった」の回答率は6割強であった。社会や日常生活に直接関連した内容の授業は多くなくても、授業内容と現実場面との繋がりについて説明を試みている授業があるのかもしれない。

# 1-4. 授業の一環でボランティア活動をする 【Q4-D】



## 【コメント】

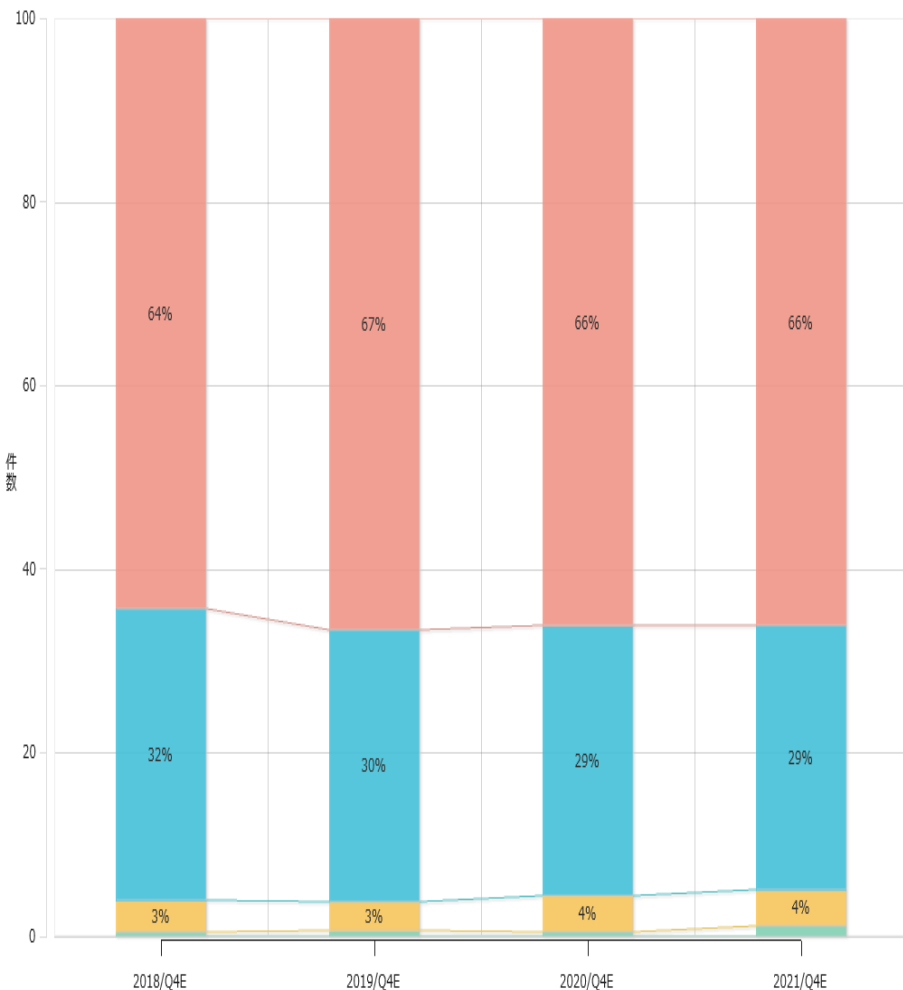
## 文学部

## 人間生活学部

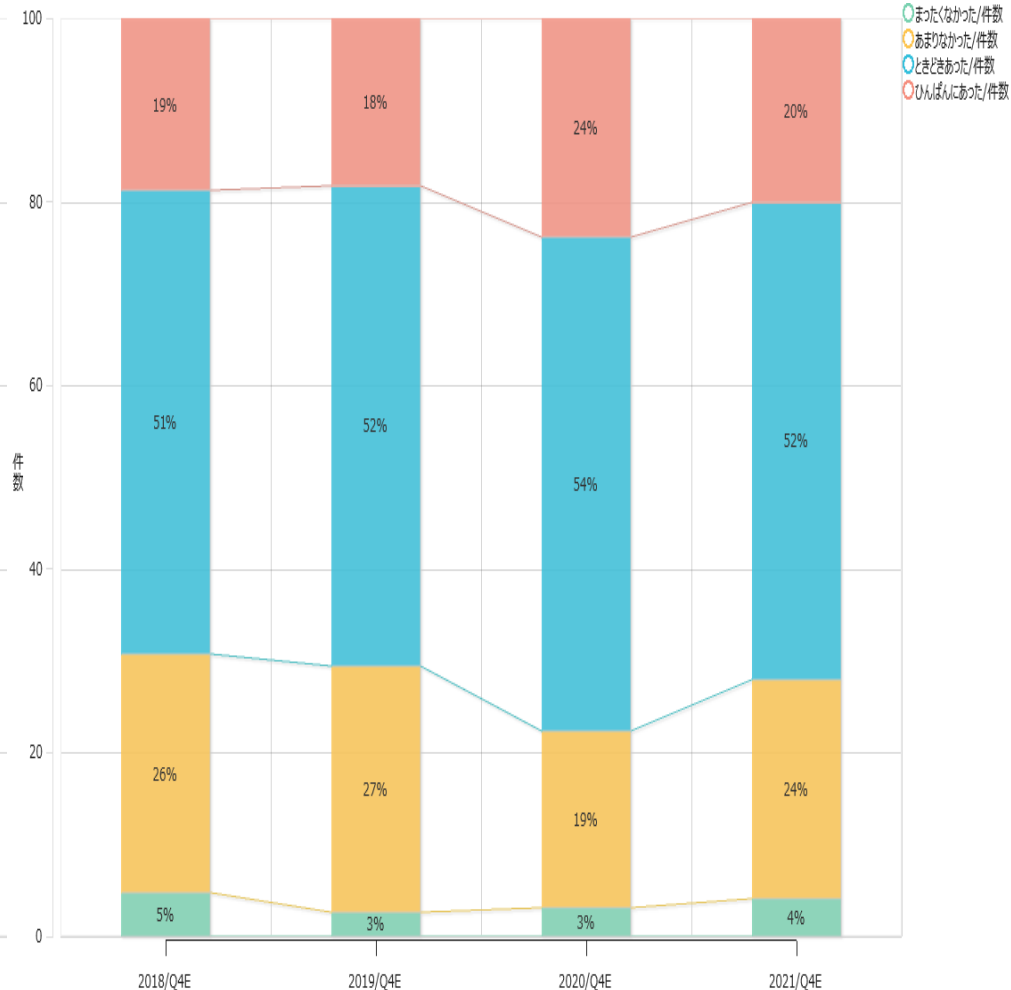
両学部とも「まったく・あまり」なかった」が殆どであった。ただし、学部間比較では人間生活学部の方が授業でボランティア活動をする機会が多いことがうかがえる。これも、カリキュラム上の違いを反映しているのだろう。年度による変遷については、コロナ禍の影響を受けたと思われる'20年度に「(ときどき・ひんぱんに) あった」が落ち込んでいる。'21年度には非常に僅かではあるが「あった」が微増している。

# 1-5. 学生自身が文献や資料を調べる

【Q4-E】



文学部



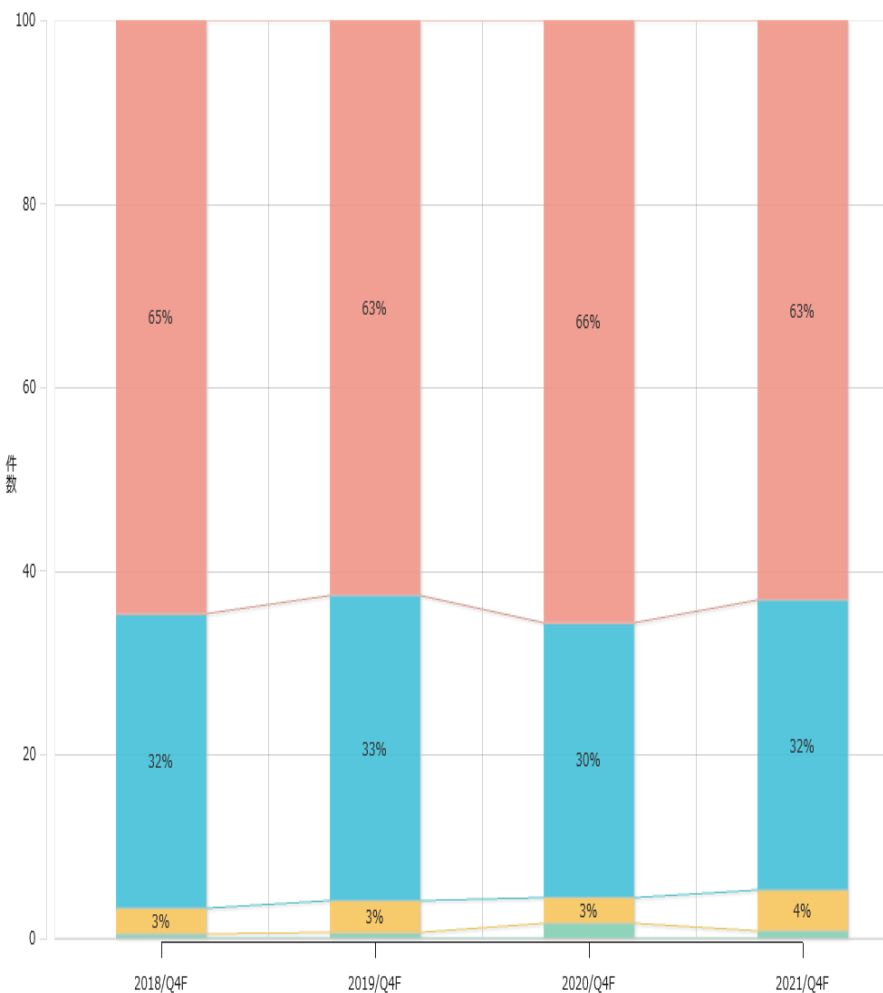
人間生活学部

【コメント】

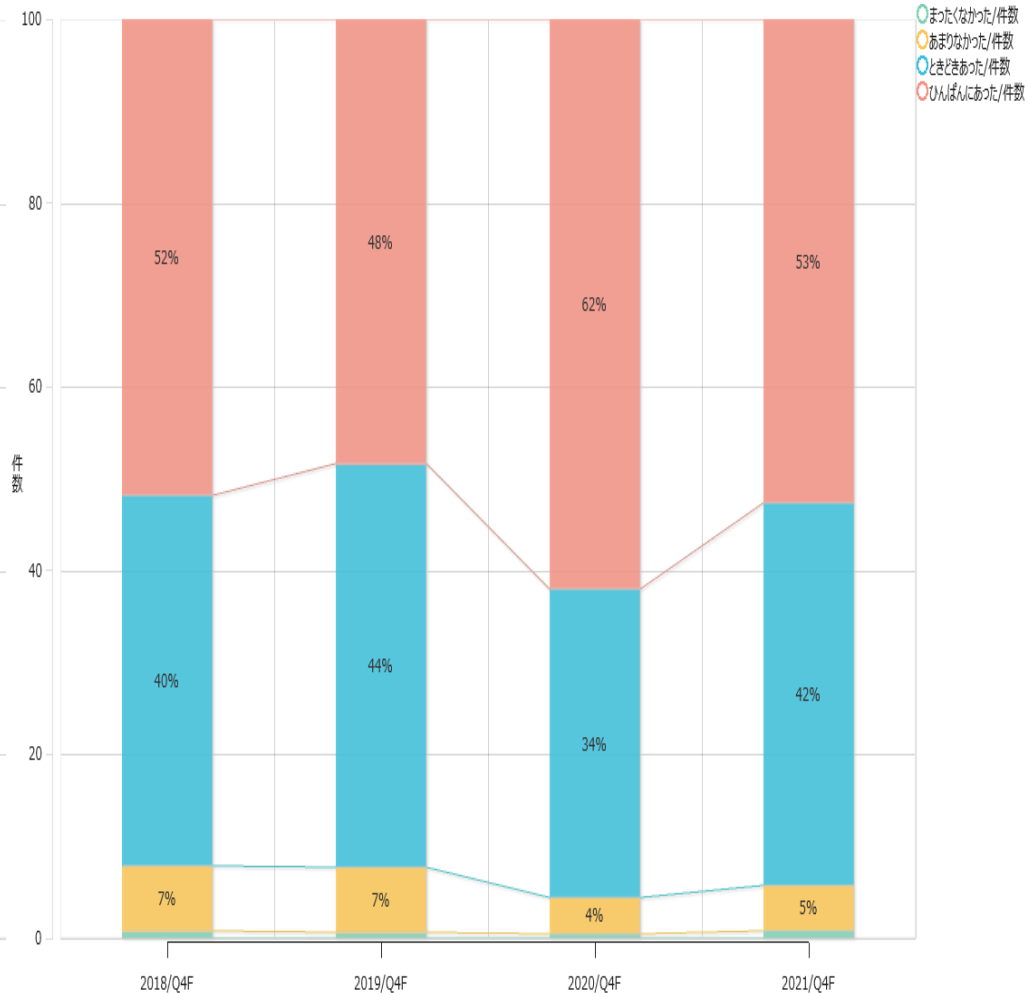
学部間差があり、文学部の方が「ひんぱんにあった」の回答率が高かった。年度による変遷については、文学部では'18—20年度を通して大きな違いは見られないが、人間生活学部では'20年度に「(とどき・ひんぱんに)あった」の率がやや上昇した。これはコロナ禍によって授業が非対面形式になったことで、人間生活学部において自習が必要な課題等が例年よりも多く課せられたのかもしれない。この傾向は文学部においては見られなかった。

# 1-6. 定期的に小テストやレポートが課される

【Q4-F】



文学部



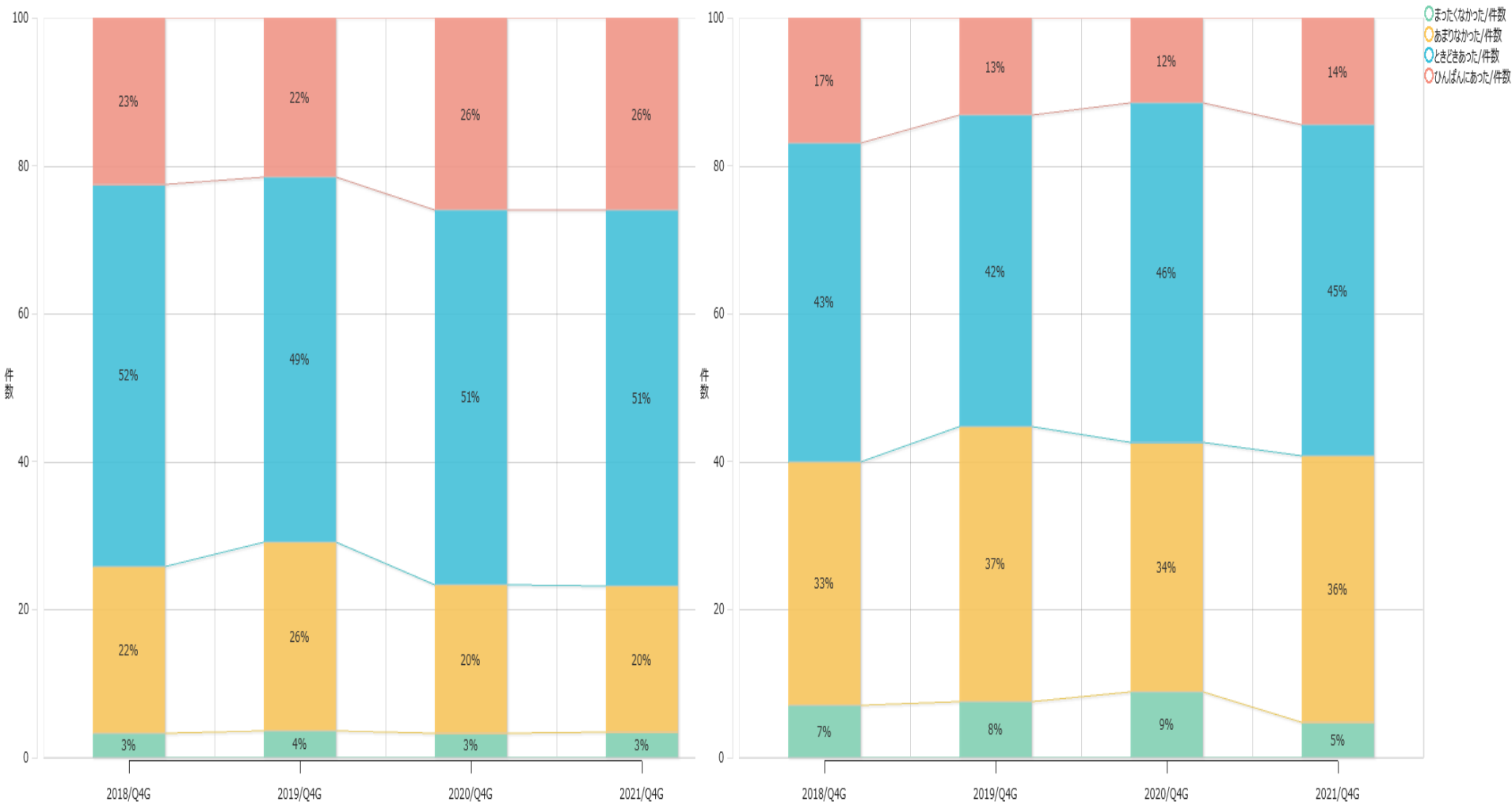
人間生活学部

【コメント】

文学部の方が「ひんぱんにあった」の回答率が高いが、人間生活学部においても「ときどき・ひんぱんに」を合わせると9割以上が「あった」と回答しており、両学部とも定期的に小テスト・レポートを実施している様子がうかがえる。年度による変遷では人間生活学部で'20年度の「ひんぱんにあった」の回答率が多くっており、非対面授業になって小テスト・レポートが増加したことが見て取れる。文学部ではこのような傾向が見られなかった。

# 1-7. 教員が提出物に添削やコメントをつけて返却する

【Q4-G】



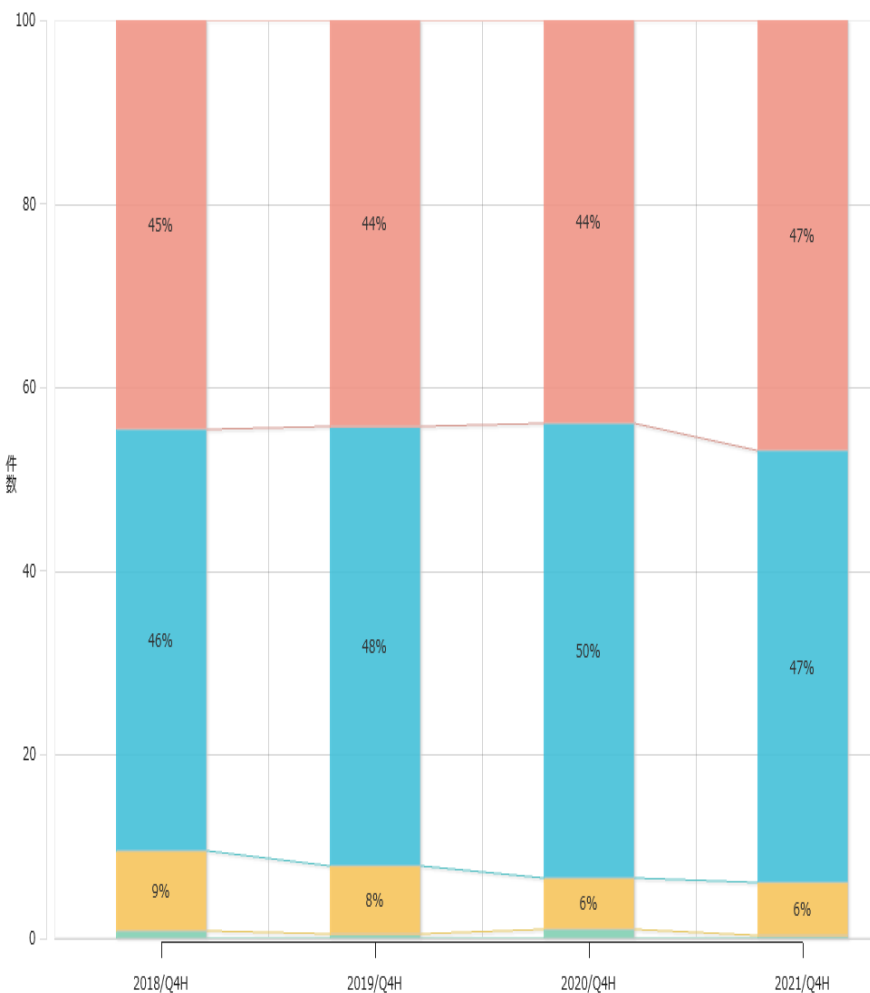
【コメント】

文学部

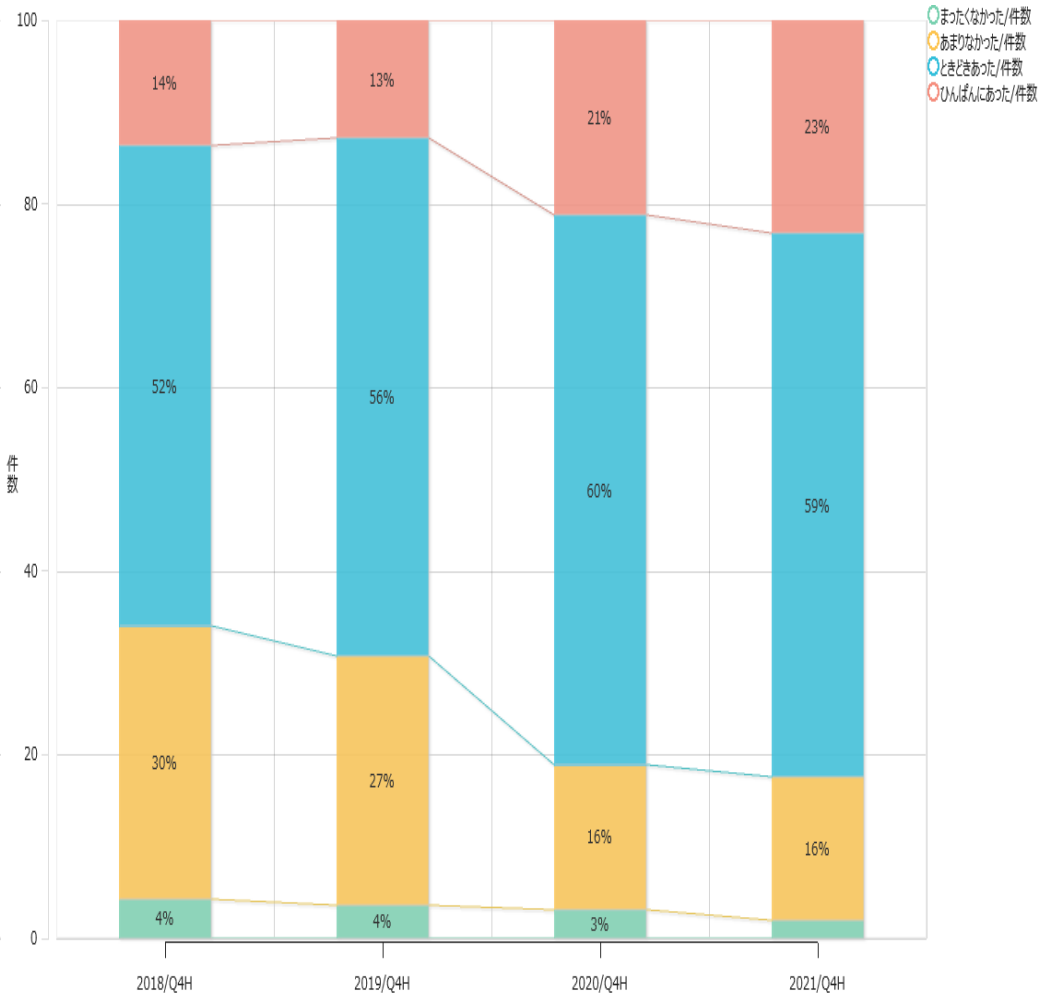
人間生活学部

両学部とも「(ときどき・ひんぱんに) あった」の回答率が過半数を超えており、文学部では7割程度、人間生活学部では5-6割程度であった。教員は丁寧に対応していると考えられるが、1-6の回答と合わせて解釈すると、小テストやレポートすべてに添削・コメントがなされているようではなさそうである。また、1-5・1-6と比べて年度による変遷が両学部ともあまり見られないことから、コロナ禍での非対面授業になって提出物が増えた一方で教員からのフィードバックがそれに伴って多くなったわけではないことが見て取れる。

# 1-8. 学生が自分の考えや研究を発表する 【Q4-H】



文学部



人間生活学部

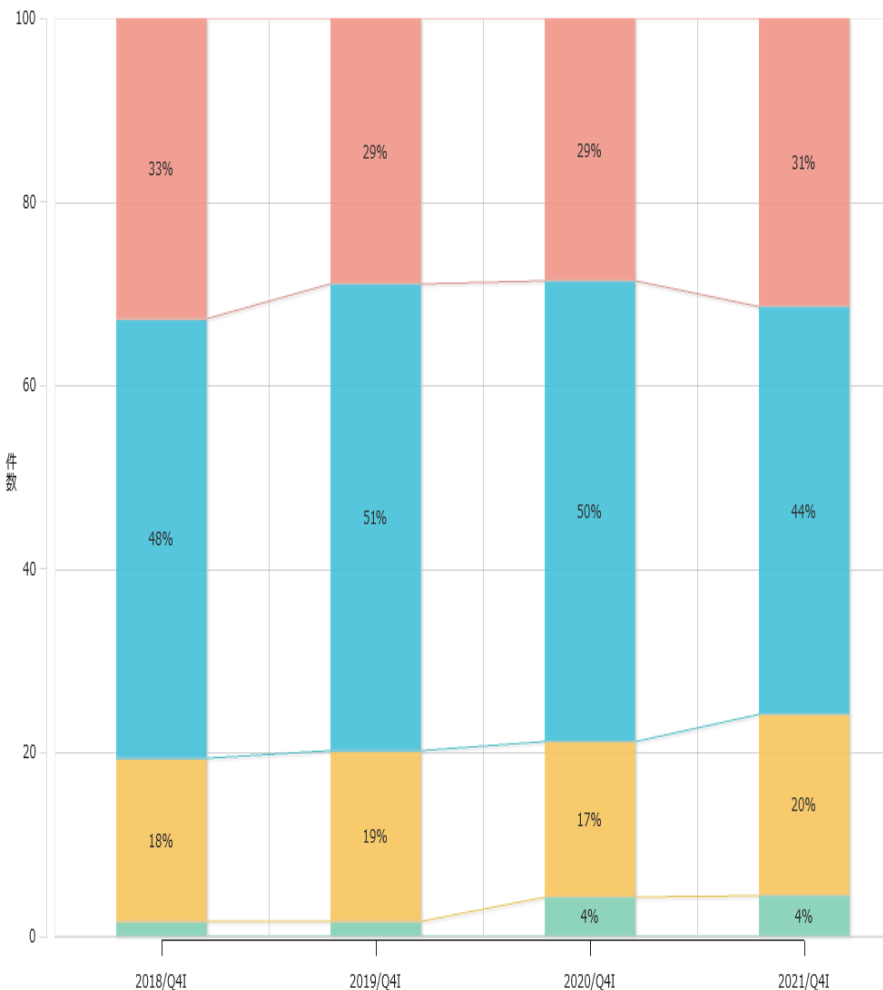
## 【コメント】

学部間の差があり、文学部の方が「(ときどき・ひんぱんに)あった」とする回答が多かった。ただし、人間生活学部においても、「あった」の回答が過半数であり、特に、'20年度以降「あった」の合計が増えて8割に達している。また、1-5・1-6とは違い、'21年度になってもその傾向が維持されていることから、コロナ禍による非対面授業をきっかけとして学生が発表する機会が増えたが、対面授業に戻つつあった年度においてもその機会は保たれていたようである。

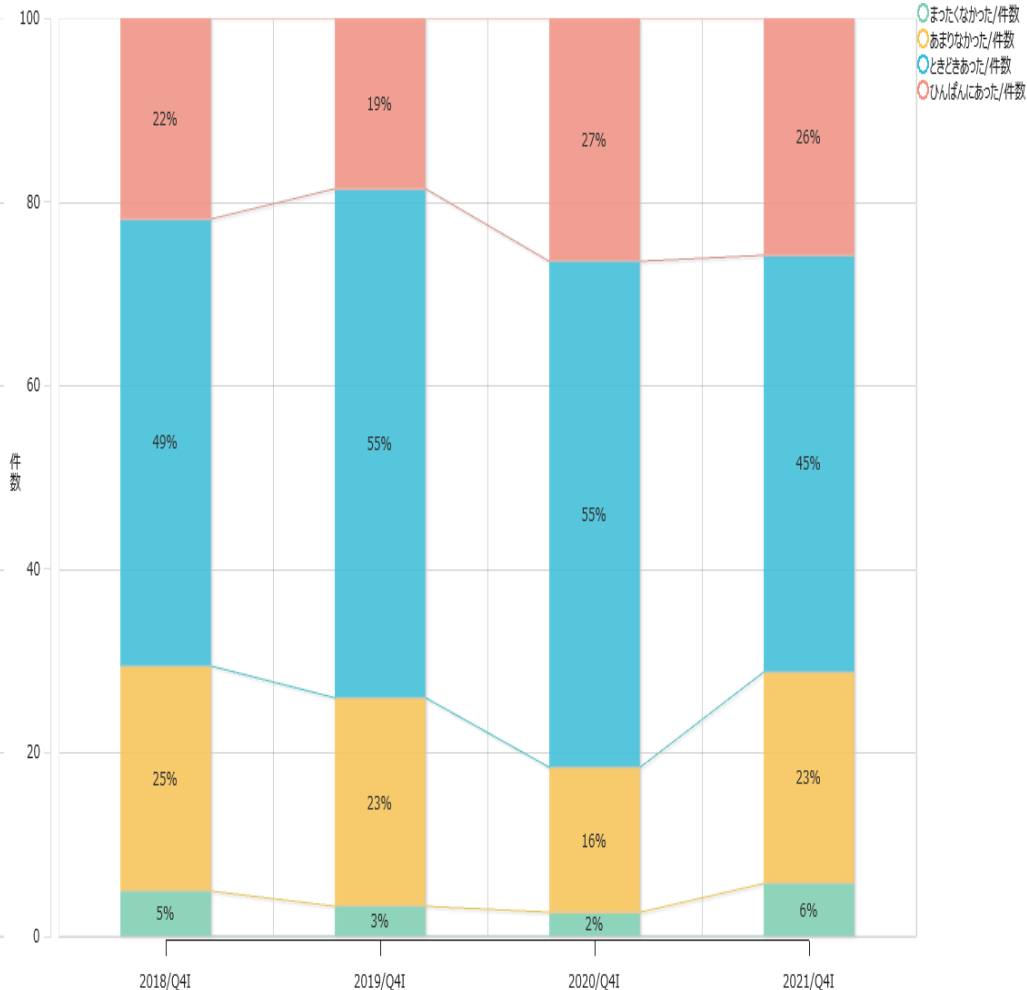


# 1-9. 授業中に学生同士が議論をする

【Q4-I】



文学部



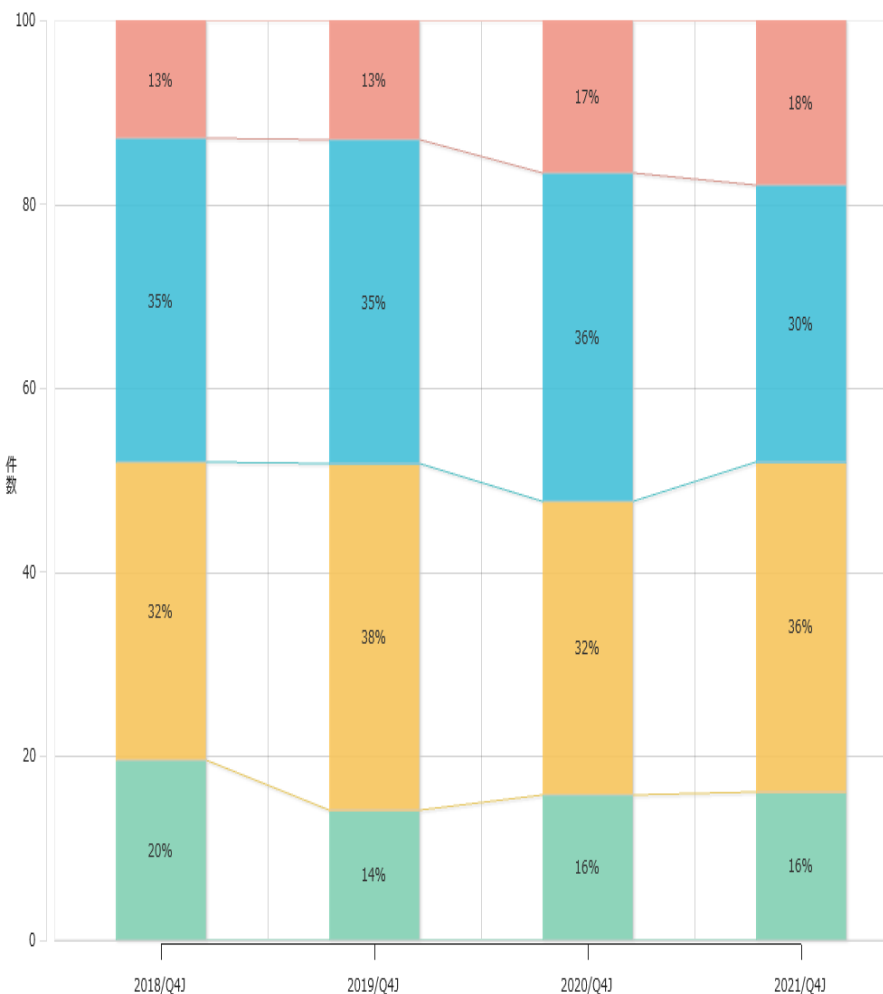
人間生活学部

【コメント】

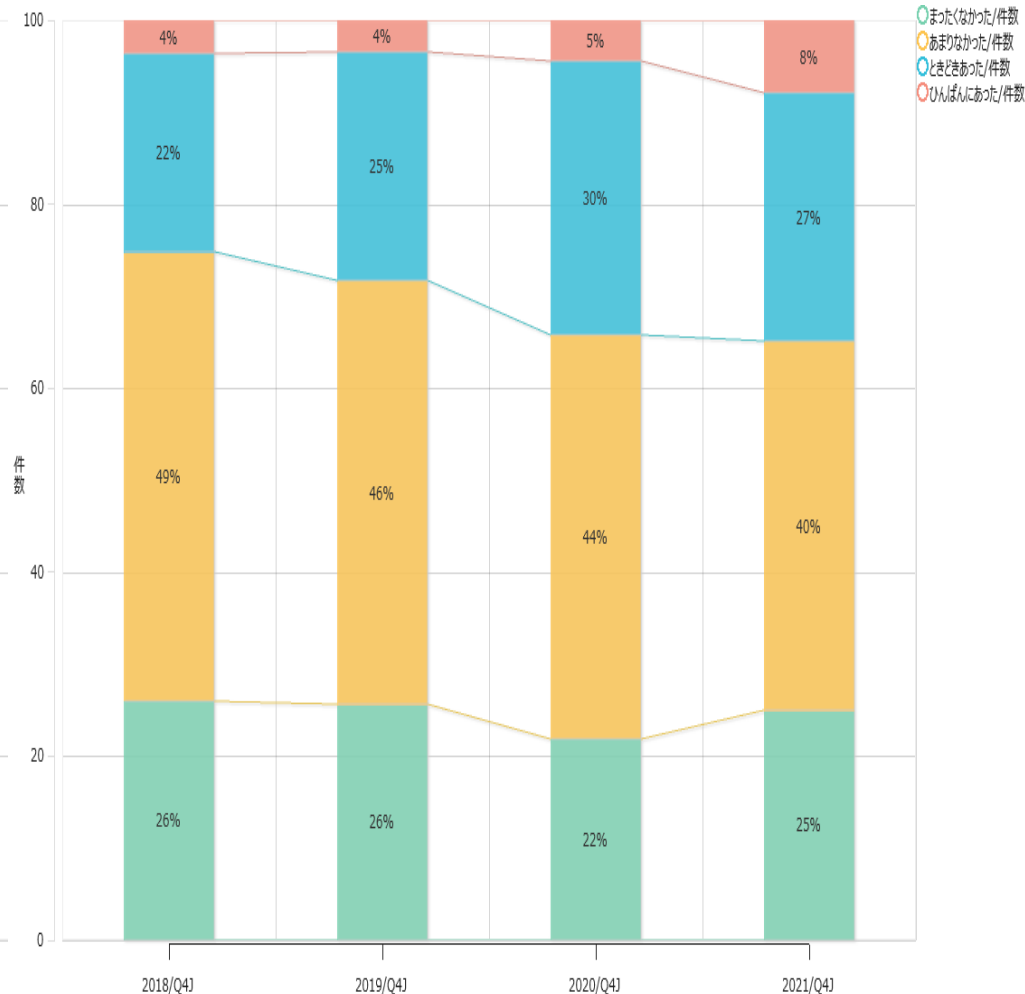
両学部とも、「(ときどき・ひんぱんに) あった」の回答率が7-8割程度であり、議論の機会が豊富に設けられているようである。年度による変遷では、人間生活学部において(著しい差ではないが)‘20年度に「ひんぱんにあった」の割合が増え、それが‘21年度にも維持されている一方で「ときどきあった」の回答率は下がっている。対面授業が戻りつつあった‘21年度では、会話を伴う課題の実施が現実的に難しかったのかもしれないが、それでもひんぱんに議論の機会を確保した授業の存在がうかがえる。その実施方法を詳細に確認することで、感染対策と議論を実施することとの両立が他の授業でも可能となるかもしれない。

# 1-10. 授業で検討するテーマを学生が設定する

【Q4-J】



文学部



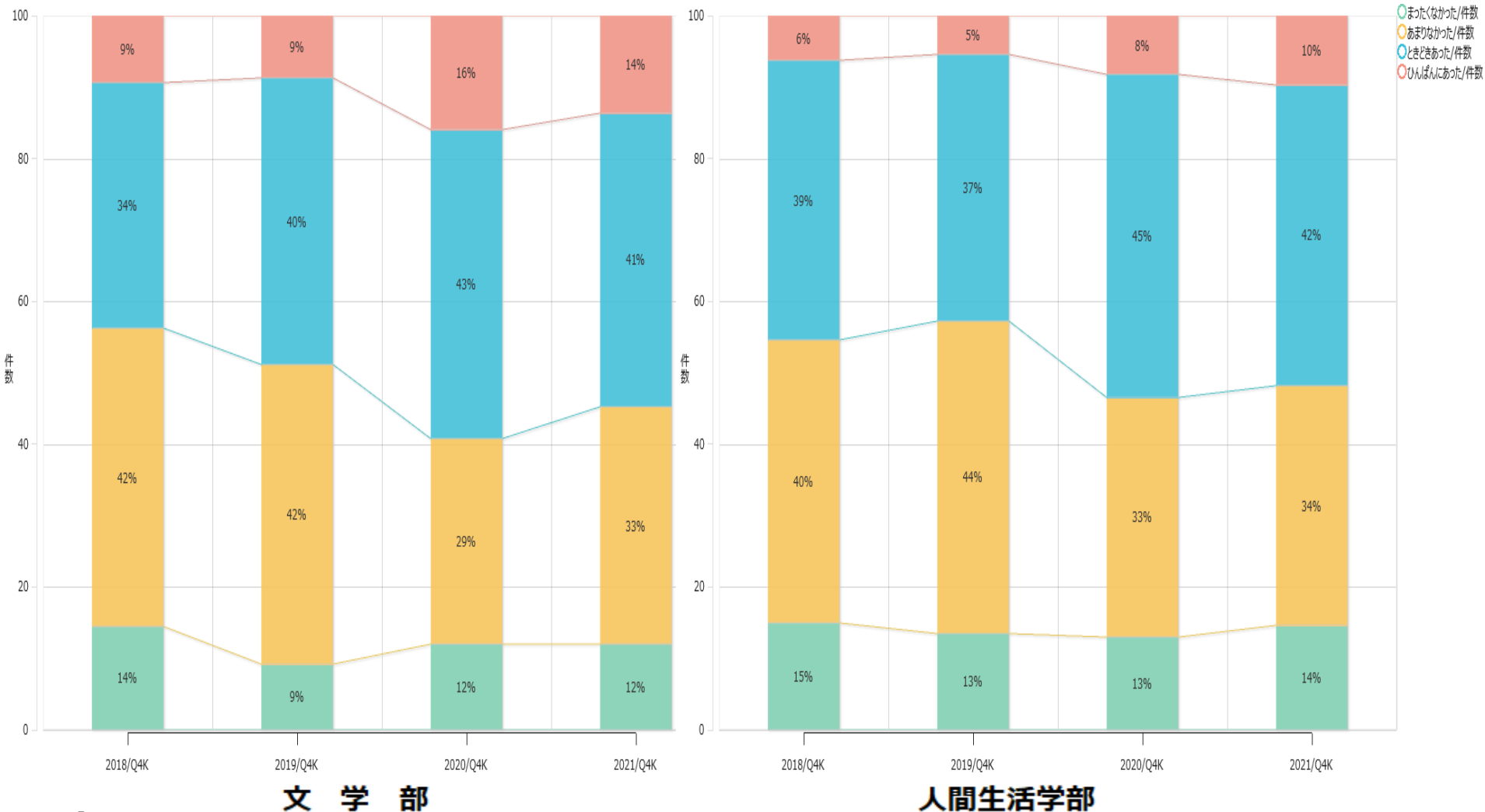
人間生活学部

【コメント】

文学部の方が「(ときどき・ひんぱんに)あった」と回答した割合が高かった。人間生活学部では資格取得のための授業が多いカリキュラムとなっているので、授業内容の自由度は当然低くなる。それを反映した結果と考えられる。また、文学部では演習が比較的多く設置されているため、演習内での発表や議論において学生が自身の興味に応じた内容を発表したり、学生の関心を汲んだテーマを取り上げたりしやすいのかもしれない。ただし、人間生活学部でも'20年度以降、「あった」の回答率が上昇しており、非対面授業をきっかけとして、学生が主体となって学習内容を設定できるようになったことが推測できる。

# 1-11. 授業の進め方に学生の意見が取り入れられる

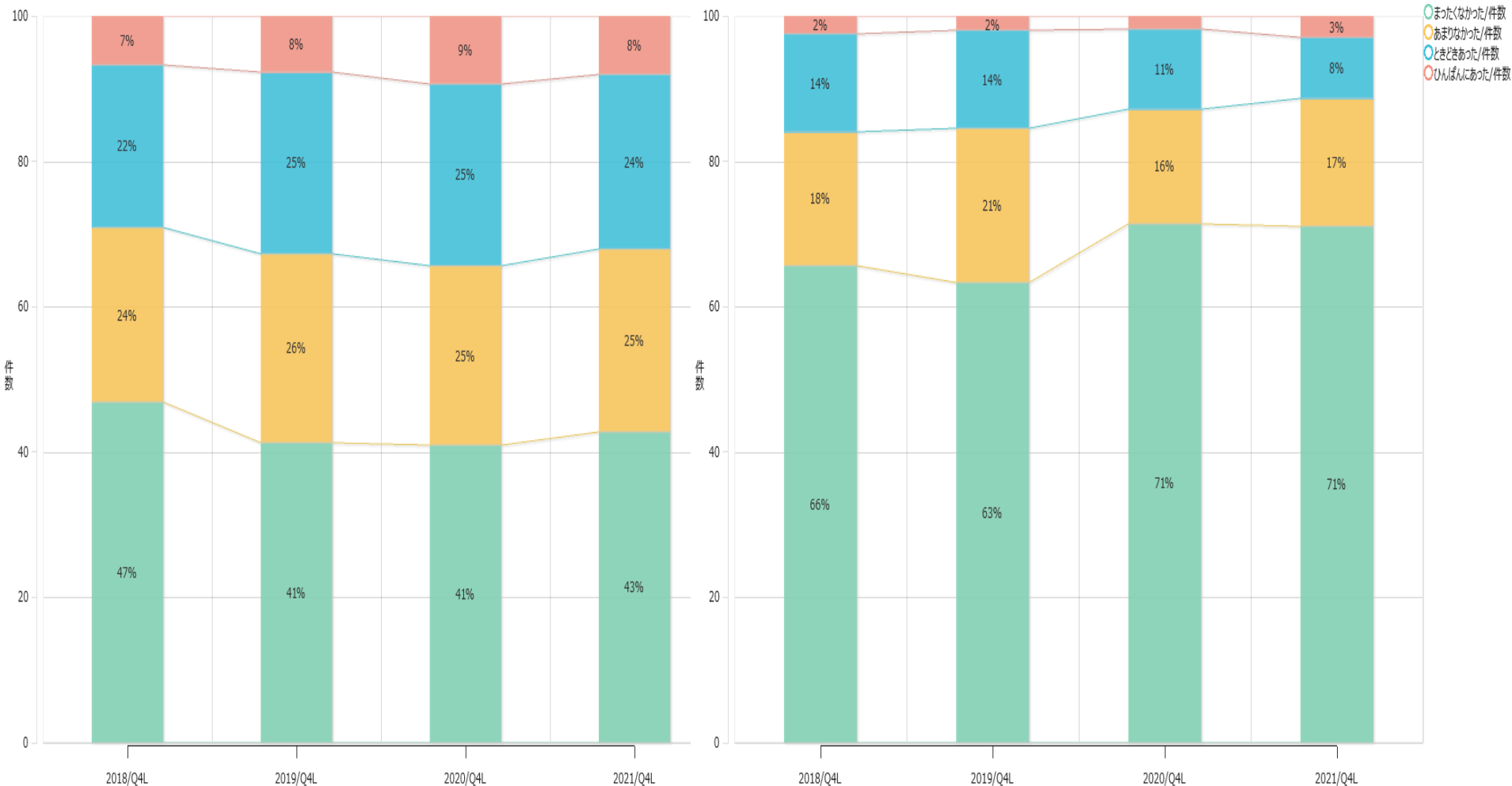
【Q4-K】



【コメント】

文学部の方が「(ときどき・ひんぱんに)あった」の回答率がやや高いが、差はそれほど大きくなかった。年度による変遷については、両学部共に'20年度・'21年度に「あった」の回答率が上昇している。コロナ禍によって非対面授業を余儀なくされた状況では、受講生である学生からの意見や助言が有用であったことがこの傾向からは読み取れる。

# 1-12. 取りたい授業を履修登録できなかった 【Q4-L】



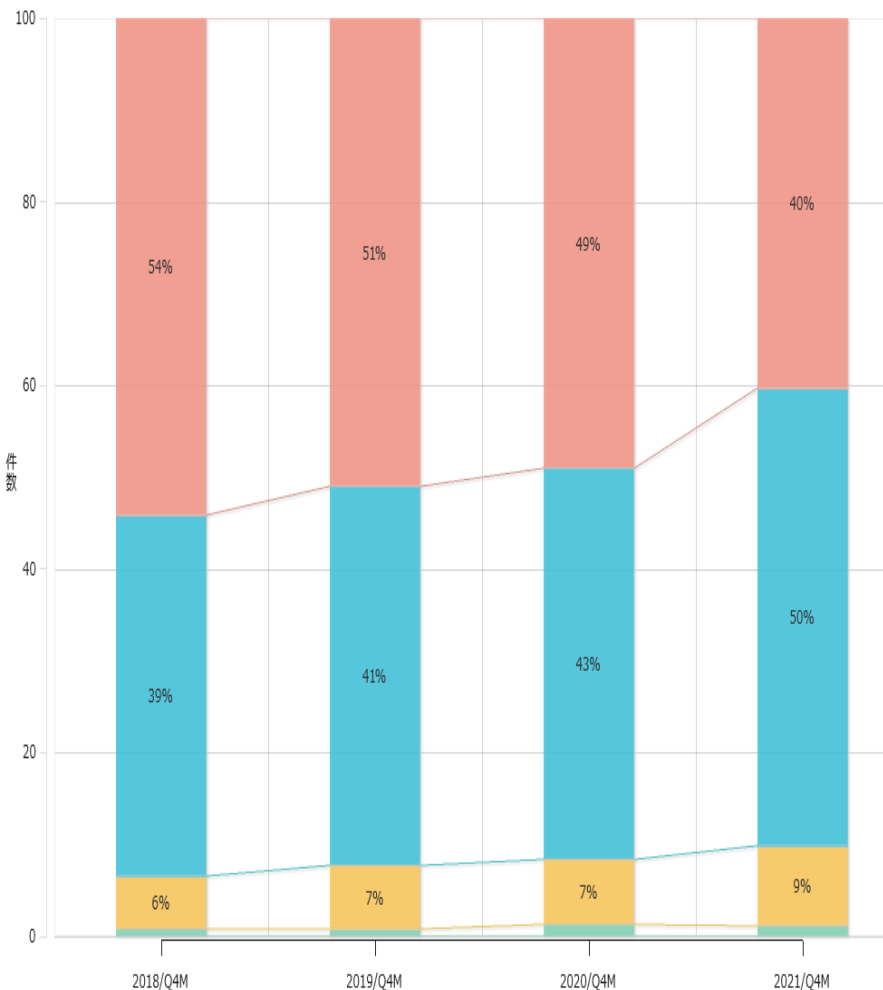
## 【コメント】 文学部

「まったくなかった」の回答が人間生活学部ではが過半数であるのに対して文学部では4割程度になっており、「ひんぱんにあった」が文学部ではどの年度も1割弱、「ととききあった」も含めると3割程度回答されている一方で、人間生活学部での「ひんぱんにあった」は5%にも満たなかった。これは、人間生活学部では資格取得に関連した必修授業が多く設置されており、そもそも「取りたい授業」という選択肢が少ないことを反映していると考えられる。とはいえ、人間生活学部でも、少数ながらそうした経験をした学生が存在しているため、両学部共に何らかの対策を講じる必要があるのかもしれない。

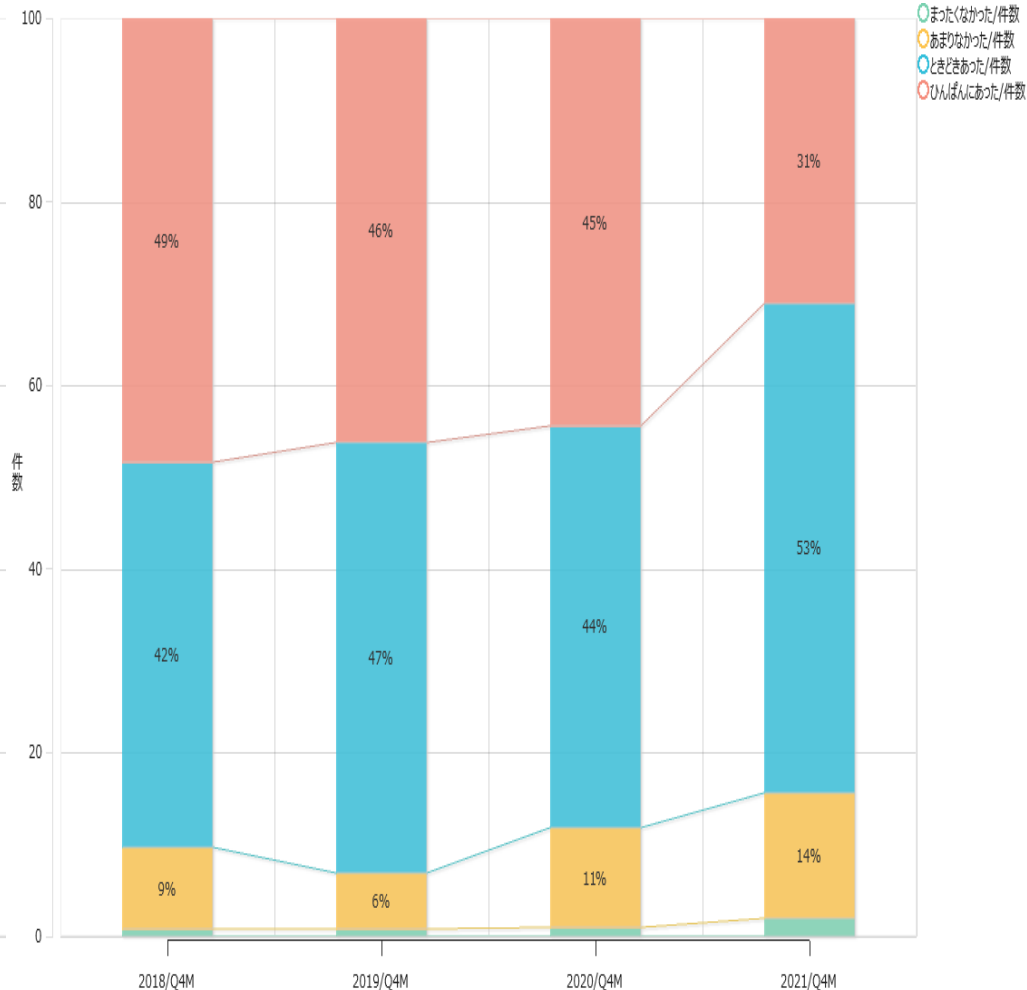
## 人間生活学部

# 1-13. 出席することが重視される

【Q4-M】



文学部



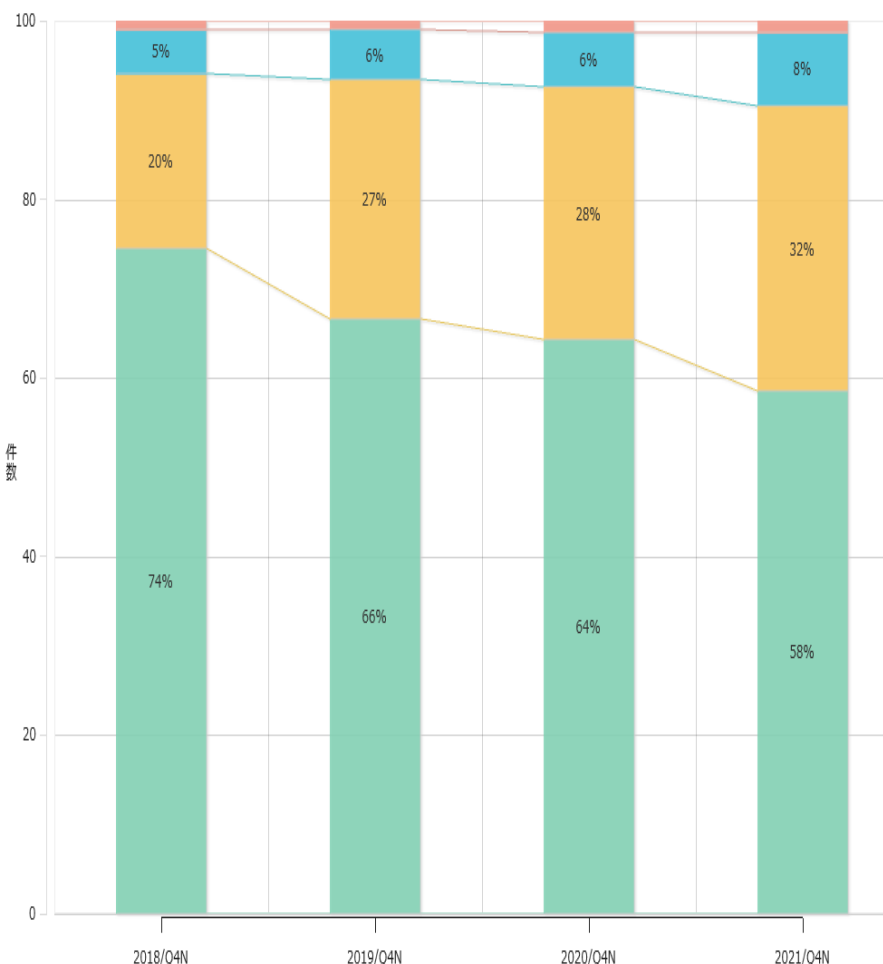
人間生活学部

【コメント】

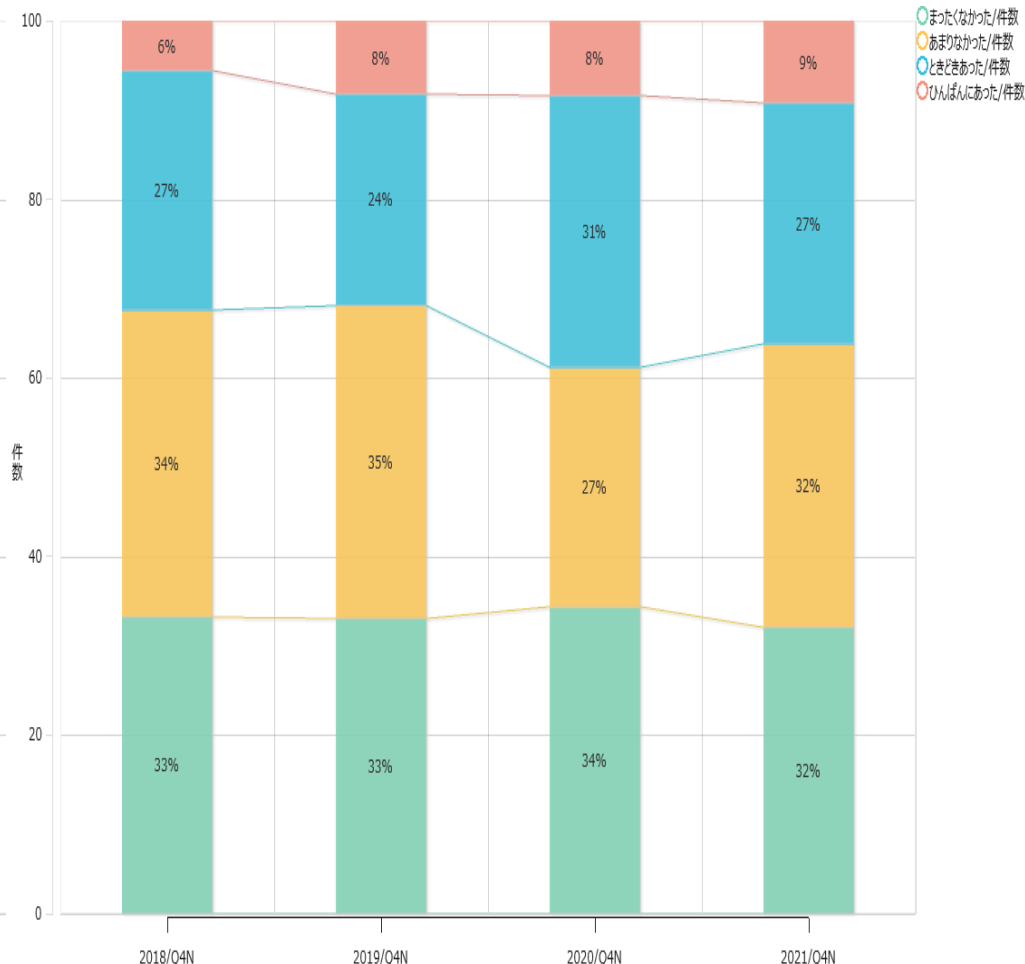
学部間の差はさほど見られず、両学部とも「(ときどき・ひんぱんに) あった」の回答率が8-9割を占めており、出席が重視されていると感じている学生が殆どであることがうかがえる。文学部では'20年度より、全教員の出席簿提出が義務付けられたが、それによって学生の意識が大きく変わった様子はないようである。年度による変遷では、'21年度に両学部とも「あった」の割合が減少している。これについては解釈が難しいが、'20年度の非対面授業から、'21年度の対面授業に変わった際、学生らは非対面の時よりは出席管理が厳しくなくなったと感じたのかもしれない。

# 1-14. TAやSAなどの授業補助者から補助を受ける

【Q4-N】



文学部



人間生活学部

【コメント】

文学部では「まったくなかった」が6-7割程度と過半数であった。人間生活学部では「まったくなかった」は3割程度で、「(ときどき・ひんぱんに)あった」も3割程度であった。人間生活学部では院生がTAとして授業補助をしているが、文学部ではTAがないことが影響していると考えられる。文学部にはFSA制度があるが、授業内でサポートをするTAとは違い、自ら要請しないと援助が受けられないため、この差が出たのだろう。ただし、年度別にみえていくと文学部の「まったくなかった」は減少傾向にある。FSAが周知されてきつつあることを示しているのかもしれない、今後補助を受ける学生が増える可能性もある。

# 「授業での経験」 コメント

学部間の比較をすると、文学部学生は自らが関心のあるテーマを設定し（1-10）、自ら資料にあたる（1-5）などの自由度の高い学習や、発表の機会（1-8）を多く得ている一方で、人間生活学部では実習など（1-1）や日常場面に直結しうる授業（1-2・1-3）を多く経験し、仕事に役立つスキルや知識を身につける機会に恵まれていることがうかがえた。これらは、両学部間のカリキュラムの違いを反映した結果だと考えられる。ただし、文学部においても教員が授業内容と社会や日常生活とのかかわりを説明（1-3）していると感じる学生が半数を超えていたり、人間生活学部でも特にコロナ禍以降は学生の発表の機会（1-8）が増えていたり、各カリキュラムの制限の中ではあるが、授業においてどちらの学部の学生も多様な経験をすることができていると推測できる。

年度による変遷を追っていくと、コロナ禍による非対面授業化（'20年度）の影響が見て取れる。両学部とも、学生が体験的に学んだり（1-1）ボランティアをする（1-2）機会が明らかに減少している。また、特に人間生活学部においてコロナ禍（非対面授業）の影響が顕著にみられた。具体的には、学生自身が授業内容を設定したり（1-10）、文献や資料を調べたり（1-5）、発表したり（1-8）、議論したり（1-9）する機会が増え、また定期的な小テストやレポート（1-6）も多くなったことがうかがえた。非対面授業によって実習や実験が実施できなくなったため、代替措置としてこのような機会が多くなったと解釈できるが、学生自身が授業内容を設定する（1-10）・発表する（1-8）機会に関しては対面授業が復活してきた'21年度においても維持されている。一方で、学生の自習（1-5）・定期的な課題（1-6）については'21年度には減少しコロナ禍以前の水準に落ち着いている。非対面授業によって課題が多くなり学生の負担が増えたことが話題となったが、'21年度以降はそれを受けて負担については改善し、一方で学生の主体的な授業参加については非対面授業をきっかけとして今後も取り入れられていく可能性がある。コロナ禍の影響は今後も一定程度続くと考えられることから、これからも感染対策を講じながら授業内での学びの機会を多く・多様に設けられるような工夫が必要とされるだろう。

## 2. 学修に関する経験

**Q.大学の授業や授業以外の学習に関して、あなたは次のようなことをどのくらい経験しましたか。**

2-1. 授業課題のために図書館の資料を利用した

2-2. 授業課題のためにWeb上の情報を利用した

2-3. インターネットを使って授業課題を受けたり、提出したりした

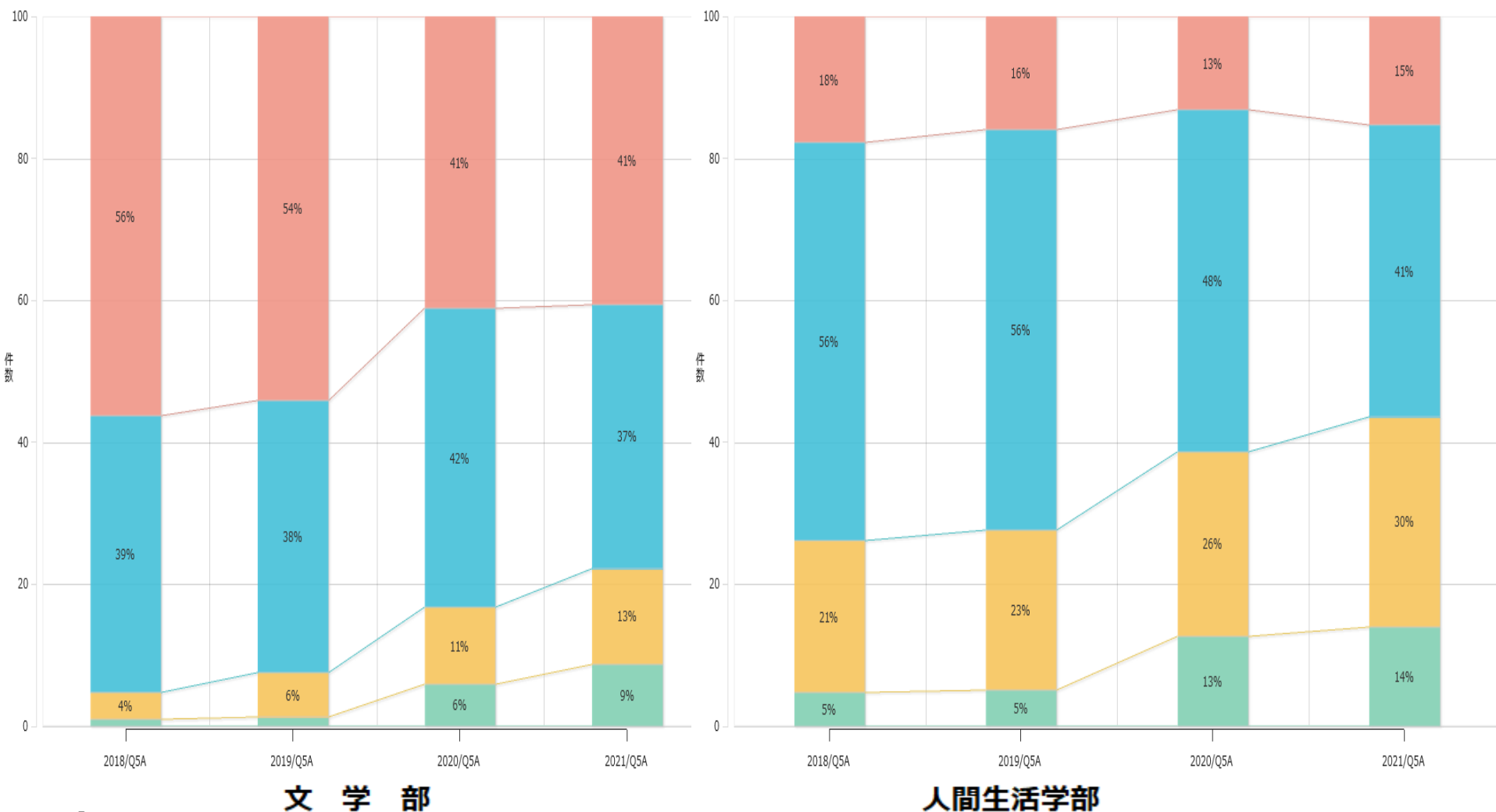
2-4. 授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりした

2-5. 学内での学習支援を受けた(教職員に学習に関する相談をした、学内の学習支援室を利用した等)

2-6. 教員に親近感を感じた



## 2-1. 授業課題のために図書館の資料を利用した 【Q5-A】

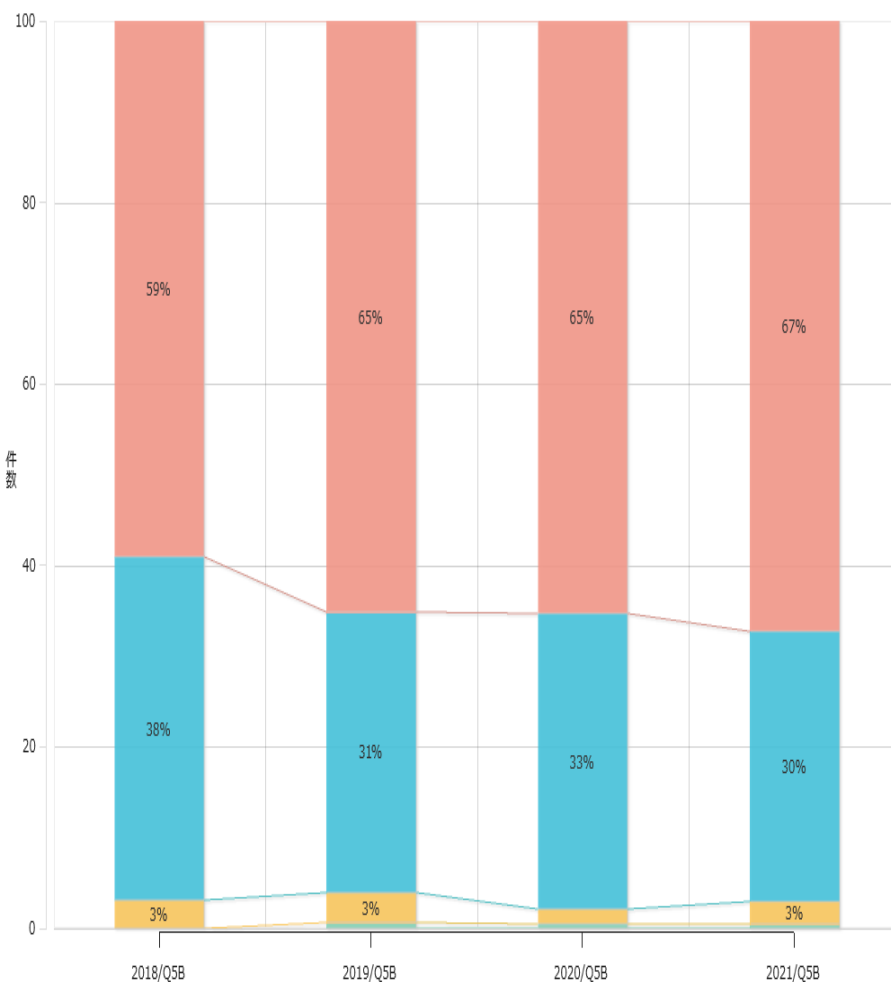


### 【コメント】

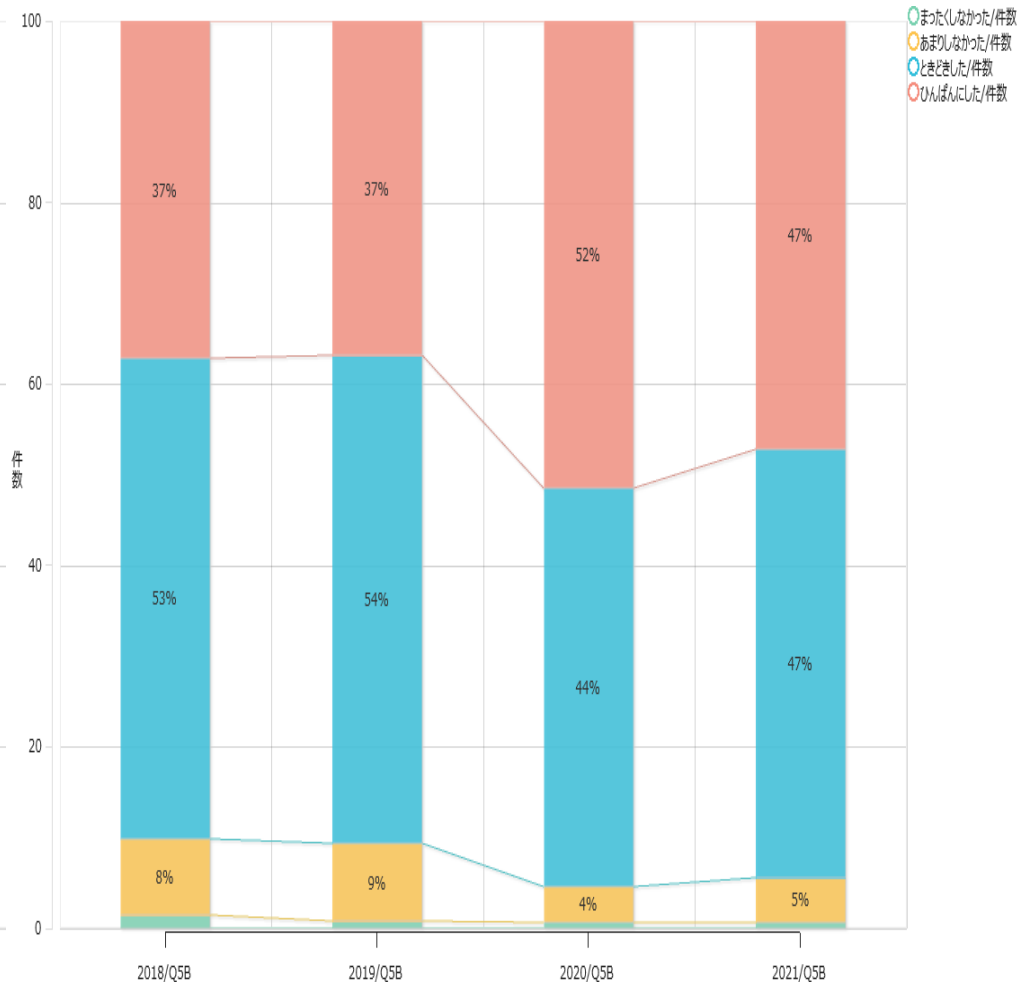
両学部共にIRコンソーシアム加盟大学全体平均（評価：「ときどきした」以上）51.7%を上回る結果(文学部78%.人間生活学部56%)となったが、前年度比較で微減。コロナ禍以降、非対面授業や館内の利用制限の影響から入館者数が減少。文学部は図書館の歴史的資料の豊富さや学修特性の強みが顕著。人間生活学部は専門職向け学習資料以外にも学生が喜ぶ選書に取り組むが、バス利用のため放課後すぐに帰宅する学生が多いことが影響。また、コロナ禍のため教員が図書館資料の利用(調べ学習)を推進出来なかったことも理由一つと考えられる。

## 2-2. 授業課題のためにWeb上の情報を利用した

【Q5-B】



文学部

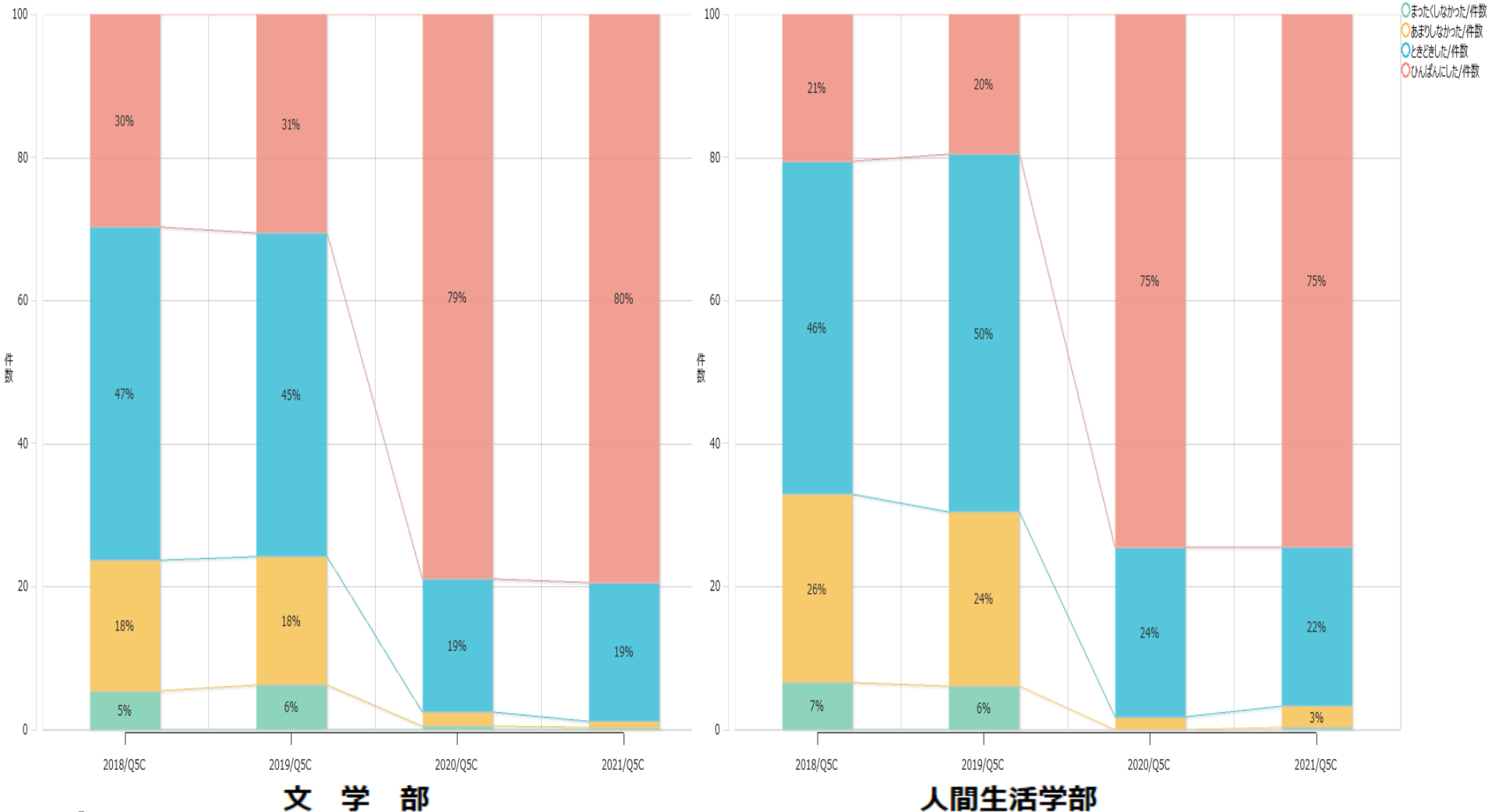


人間生活学部

### 【コメント】

両学部共にIRコンソーシアム加盟大学全体平均（評価：「ときどきした」以上）93.2%を上回る結果(文学部97%.人間生活学部94%)となったが、前年度比較で微減。スマートフォンの普及から容易にWEB上の情報を利用しているといえる。前年度からの減少の理由は、対面授業の部分的再開によるものと思われる。一方、コンピュータを使いこなせない学生や品質の高い情報を選択する情報検索能力不足の学生も散見される。社会人としてのコンピュータスキルは必須であり今後の課題と考える。

## 2-3. インターネットを使って授業課題を受けたり、提出したりした

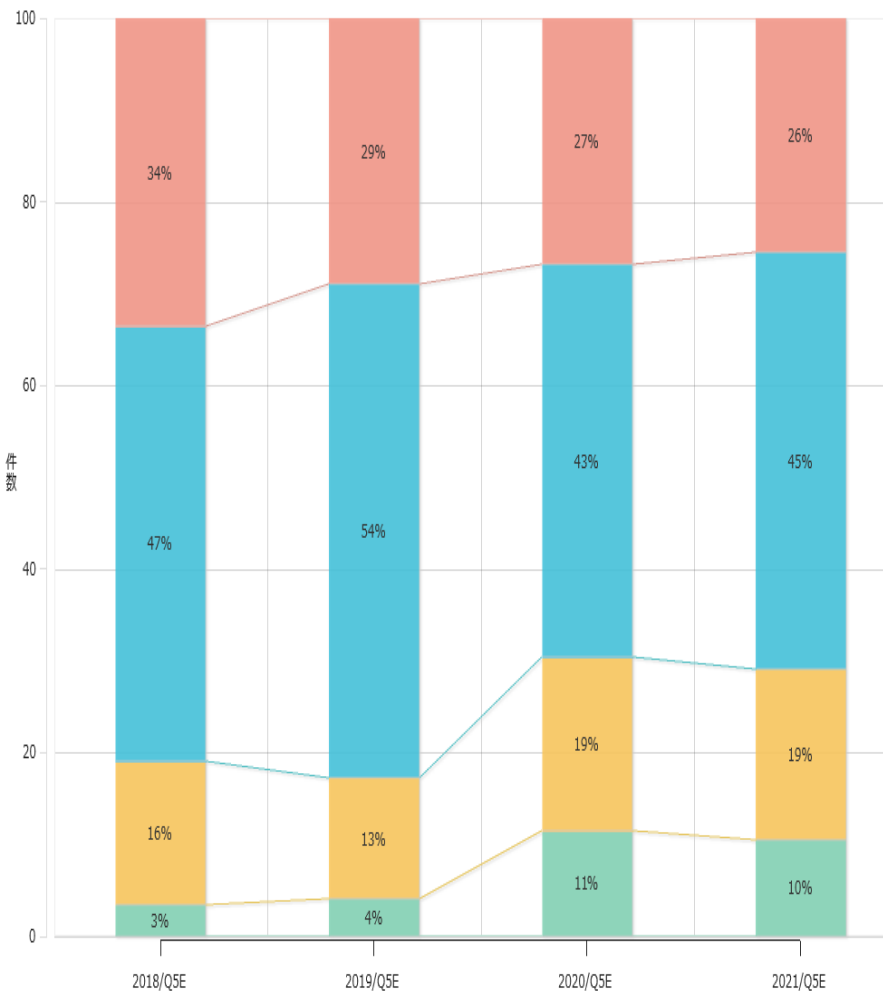


### 【コメント】

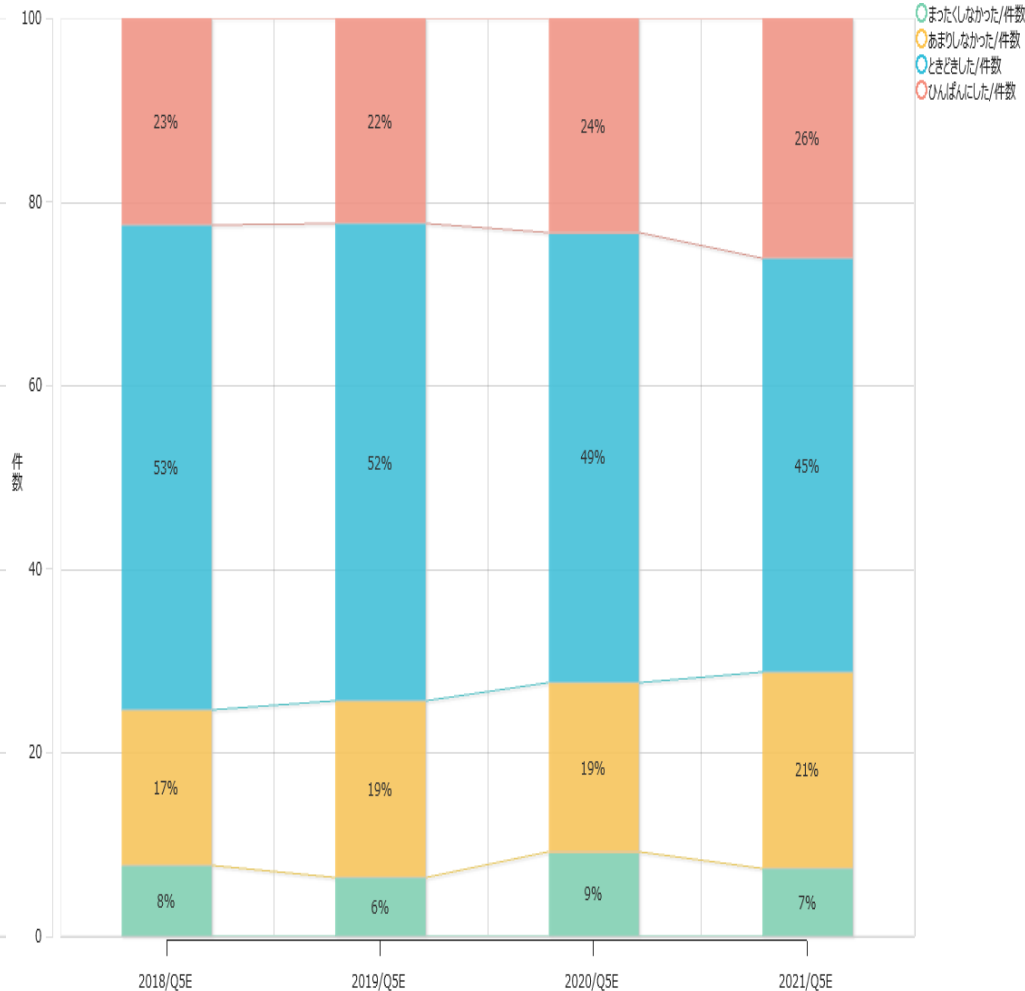
両学部共にIRコンソーシアム加盟大学全体平均（評価：「ときどきした」以上）95.2%を上回る結果(文学部99%・人間生活学部97%)となった。前年度比較では文学部は微増、人間生活学部は微減。コロナウイルス感染拡大後、LMSやZoomの活用による非対面授業に切替わった結果と言えるが、人間生活学部では実習が少しずつ再開されているため微減となった。前頁2-2でも記載したが、コンピュータスキル向上のために今後もインターネットの積極的な活用を考えたい。

## 2-4. 授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりした

【Q5-E】



文学部



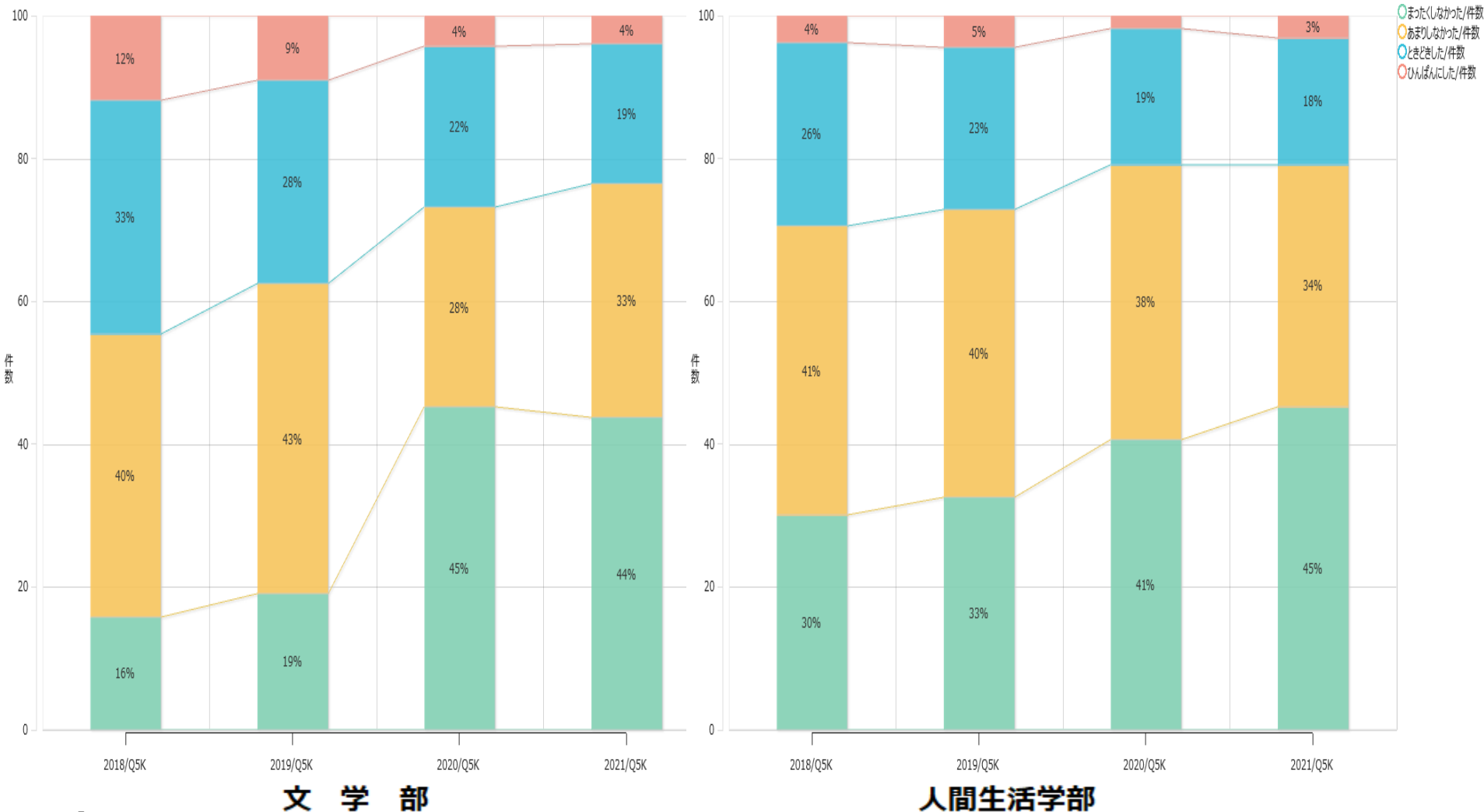
人間生活学部

### 【コメント】

両学部共にIRコンソーシアム加盟大学全体平均（評価：「ときどきした」以上）72.4%を下回る結果(文学部71%.人間生活学部71%)となった。前年度比較で文学部は微増、人間生活学部は微減。加盟大学全体平均よりも低い理由として、他大学で“全面対面”授業の実施により施設利用した学生が講義外の時間を他の学生と共有したものと考えられる。大学等1,158校中(調査回答校)、419校(36.2%)が“全面対面”、332校(28.7%)が“ほとんど対面”。調査当時、本学は“7割が対面”213校(18.4%)（参考：令和3年度後期の大学等における授業等の実施方針等について 文部科学省調査R3.11.19）

## 2-5. 学内での学習支援を受けた 【Q5-K】

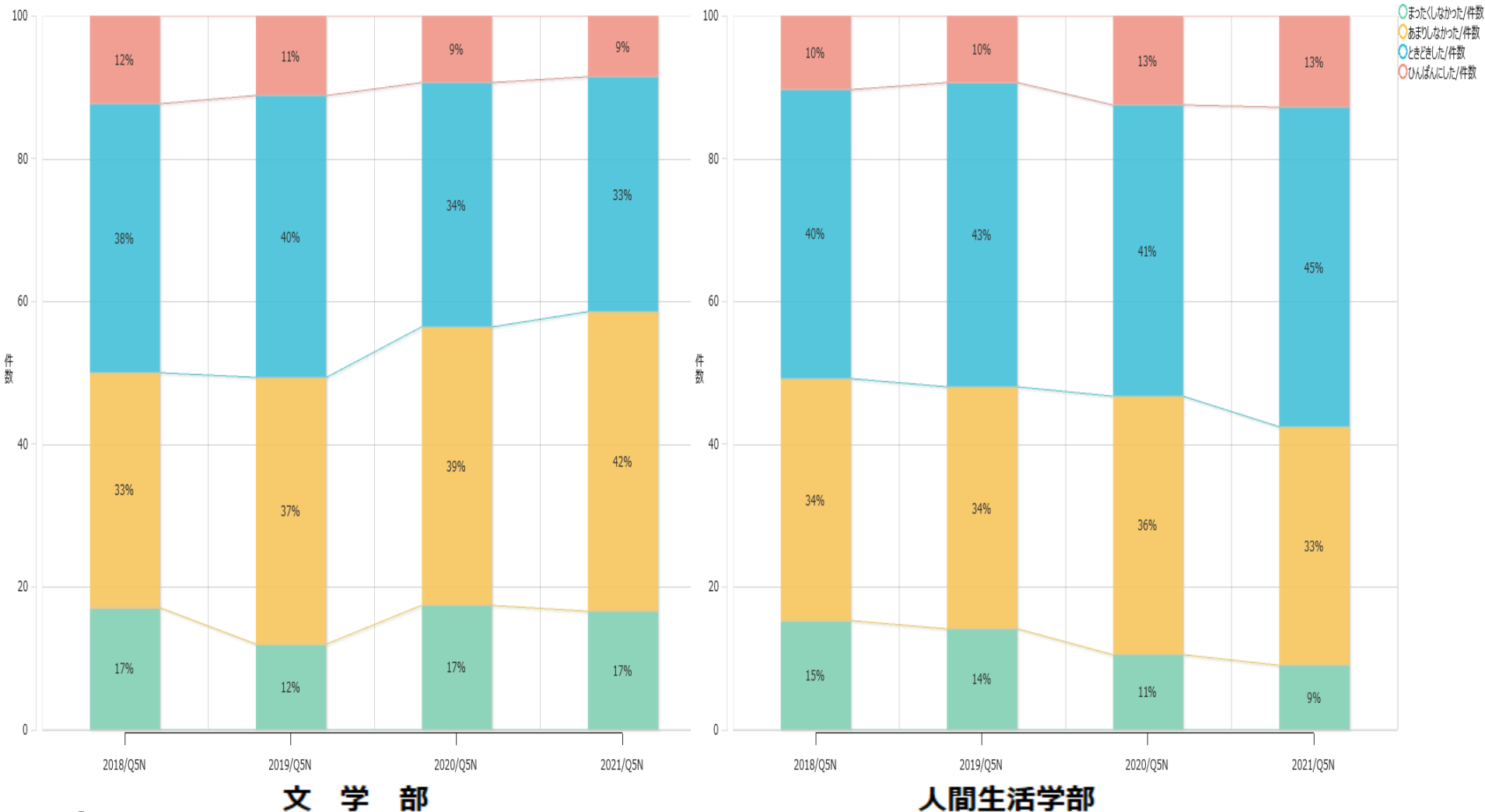
(教職員に学習に関する相談をした、学内の学習支援室を利用した等)



### 【コメント】

両学部共にIRコンソーシアム加盟大学全体平均（評価：「ときどきした」以上）24.9%を下回る結果(文学部23%.人間生活学部21%)となった。前年度比較で微減。加盟大学全体平均よりも低い理由として、前頁2-4と同様の理由（文部科学省調査による）が考えられる。コロナ禍により対面で気軽に相談が出来ないことや他人との会話の機会が失われたことも考えられ、コミュニケーション力の低下も危惧される。

## 2-6. 教職員に親近感を感じた 【Q5-N】



### 【コメント】

I Rコンソーシアム加盟大学全体平均（評価：「ときどきした」以上）46.1%を、文学部(42%)は下回り、人間生活学部(58%)は上回る結果となった。前年度比較では文学部が微減、人間生活学部は増加となった。人間生活学部は実習による教員との距離感が近いことが影響したと考えられる。「親近感」という表現に惑わされることなく、学生が主体的に行動できるよう「専門分野の知識・技能」の修得、幅広く複眼的な視野をもち論理的かつ批判的な「思考力・判断力・表現力」を身につけさせる必要がある。

「学修に関する経験」のデータから、大学の授業や授業以外の学習に関して、本学の学生がどの程度主体的に取り組んだのか  
を見ることができる。

## 【課題】

- ① コロナ禍以降、学生の行動が限定的になっていると思われ、教職員への相談や図書館を始め施設の利用も減少している。  
どのような事にも、主体性高く積極的に取り組む姿勢は社会人基礎力として必要とされる。  
特に図書館資料の活用は知識を深める手段として重要であり、コロナ禍前のように「調べ学習」の施設利用をお願い  
したい。
- ② インターネットやスマートフォンの普及により気軽に情報を入手できる時代になったが、ビジネスで必要な  
コンピュータの操作方法や情報リテラシー・エビデンスの重要性を知ることが求められる。
- ③ これから社会に出る学生にとってコミュニケーションは深い知識や広い見識を身につけるための必要不可欠な能力で  
ある。コロナ禍により行動を制限された結果、異なった世代や性別の人とのコミュニケーションに抵抗感を持つ学生も  
おり、受け身ではない積極的な行動が期待される。

# 3. 時間の使い方

**Q. あなたは次の活動に1週間あたりどのくらいの時間を費やしましたか。**

**3-1. 授業や実験に出る**

**3-2. 授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする**

**3-3. 授業時間外に、授業に関連しない勉強をする**

**3-4. オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する**

**3-5. 部活動や同好会に参加する**

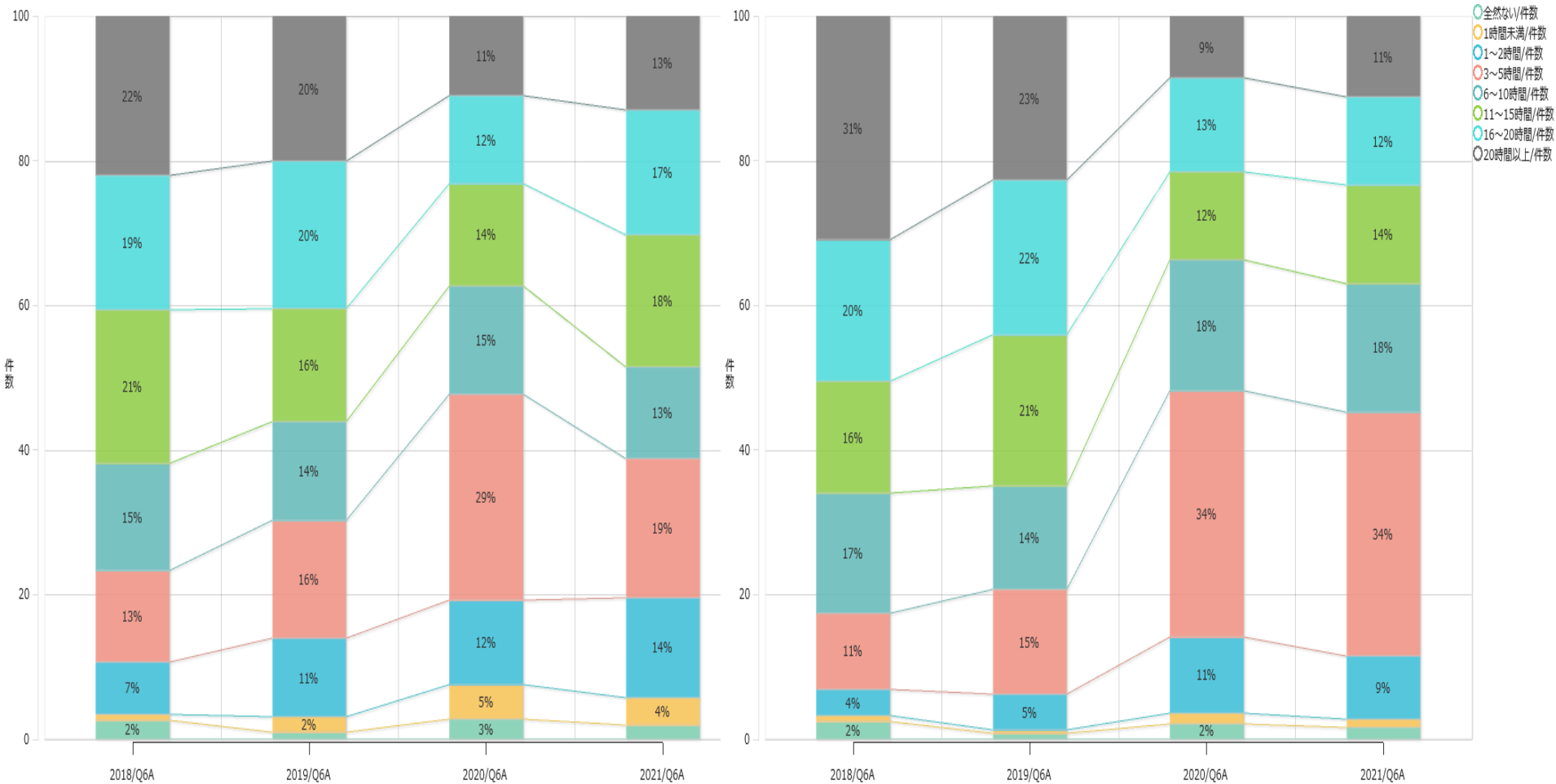
**3-6. 大学外でアルバイトや仕事をする**

**3-7. 読書をする（マンガ・雑誌を除く）**

**3-8. 個人的な趣味活動をする（テレビやゲーム、映画鑑賞など）**



# 3-1. 授業や実験に出る 【Q6-A】



## 文学部

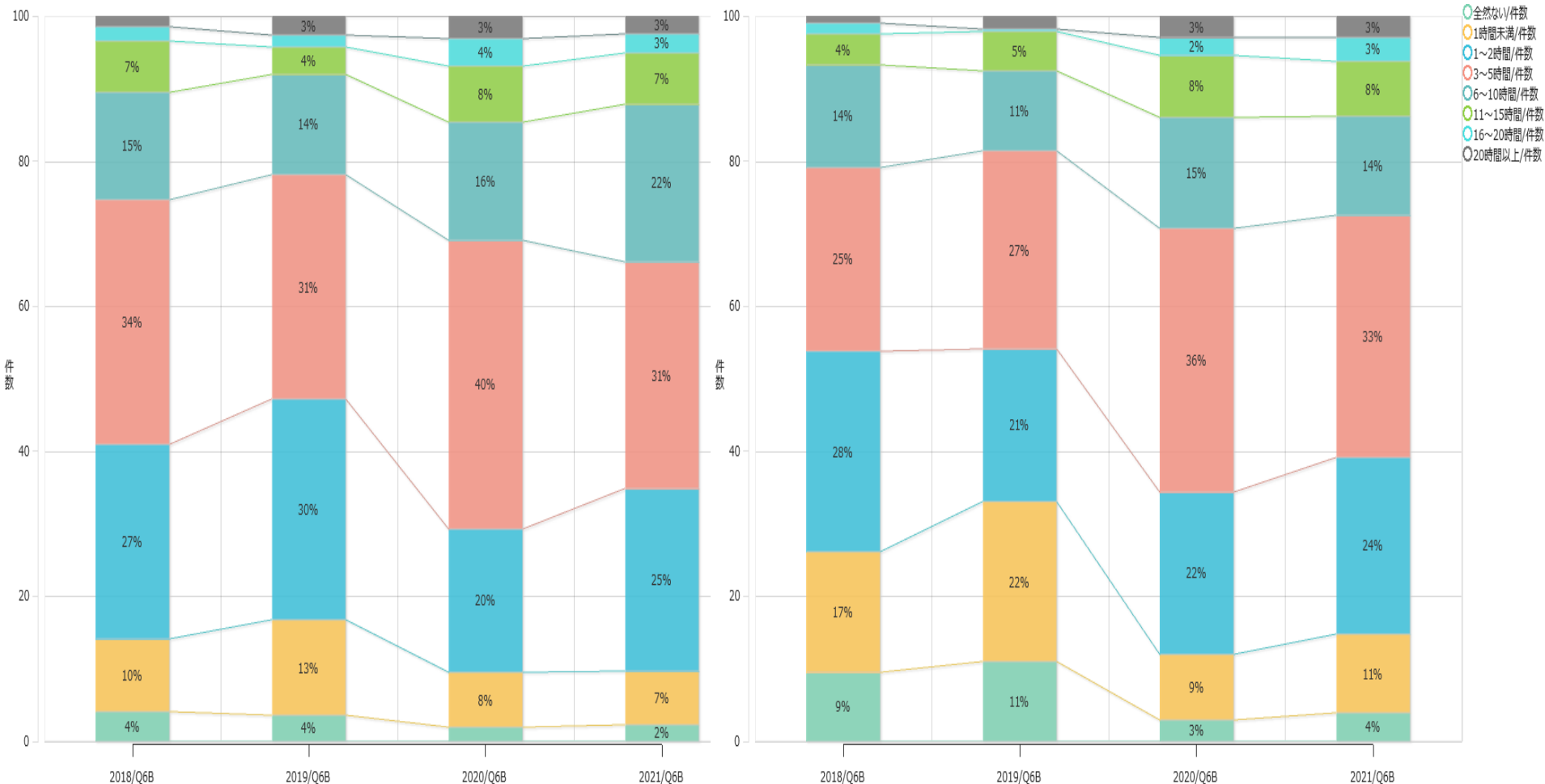
## 人間生活学部

### 【コメント】

2020年度より、コロナ禍のオンライン授業による影響等で、両学部とも授業や実験への参加時間が減少している。2021年は若干数値が増加しているが、人間生活学部では未だ半数近くが5時間未満となっており、11時間以上の割合が低いなど、コロナ禍前の状況には戻っていない。

## 3-2. 授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする

【Q6-B】



### 文学部

### 人間生活学部

#### 【コメント】

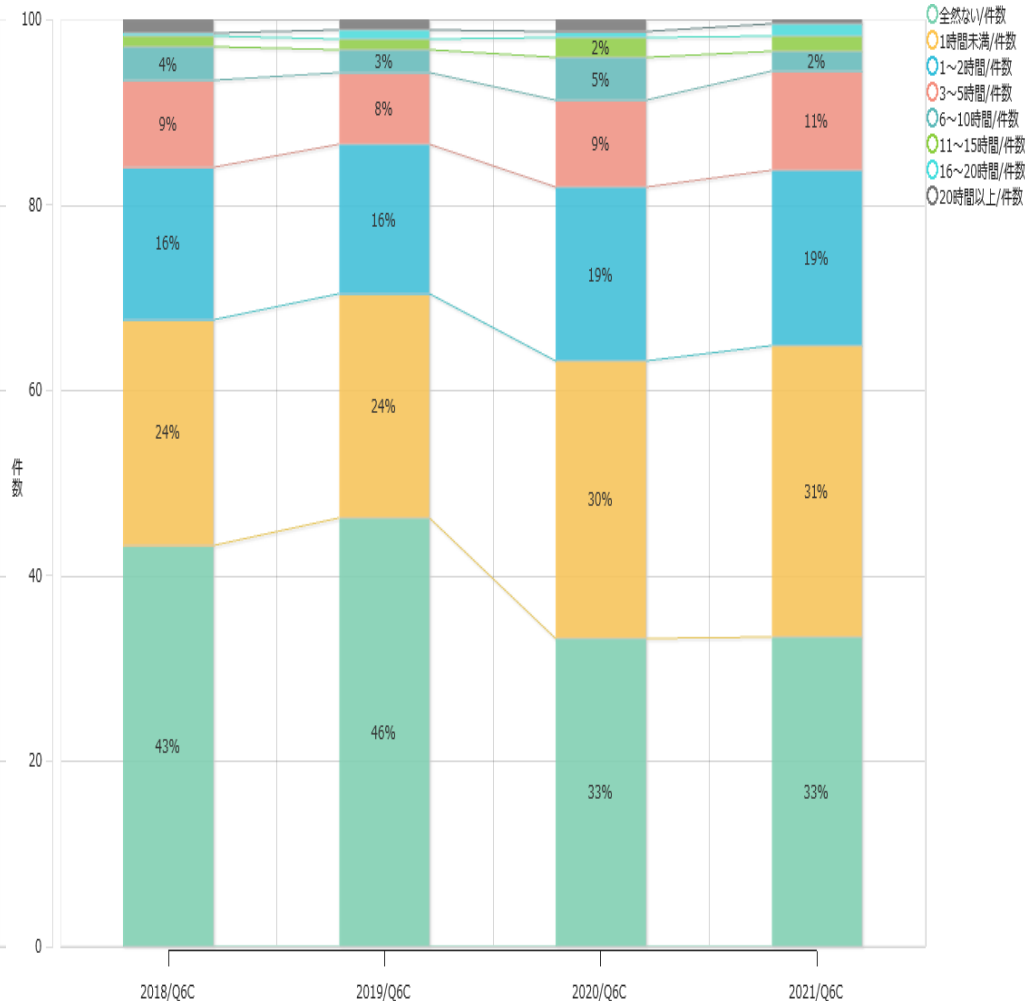
両学部とも、2020年度より授業時間外の学習時間が増えており、オンライン授業等の影響が考えられる。2020年度と比べて2021年度では、「6時間以上」の学生が文学部では増加し、人間生活学部ではほぼ変わらないが、「2時間以下」の学生は両学部とも5%程度増えている。オンライン授業では、じっくりと課題に取り組む熱心な学生がいる一方で、そうではない学生も少なからずおり、課題等に対する意欲の「二極化」が起こっている可能性も考えられる。

### 3-3. 授業時間外に、授業に関連しない勉強をする

【Q6-C】



文学部



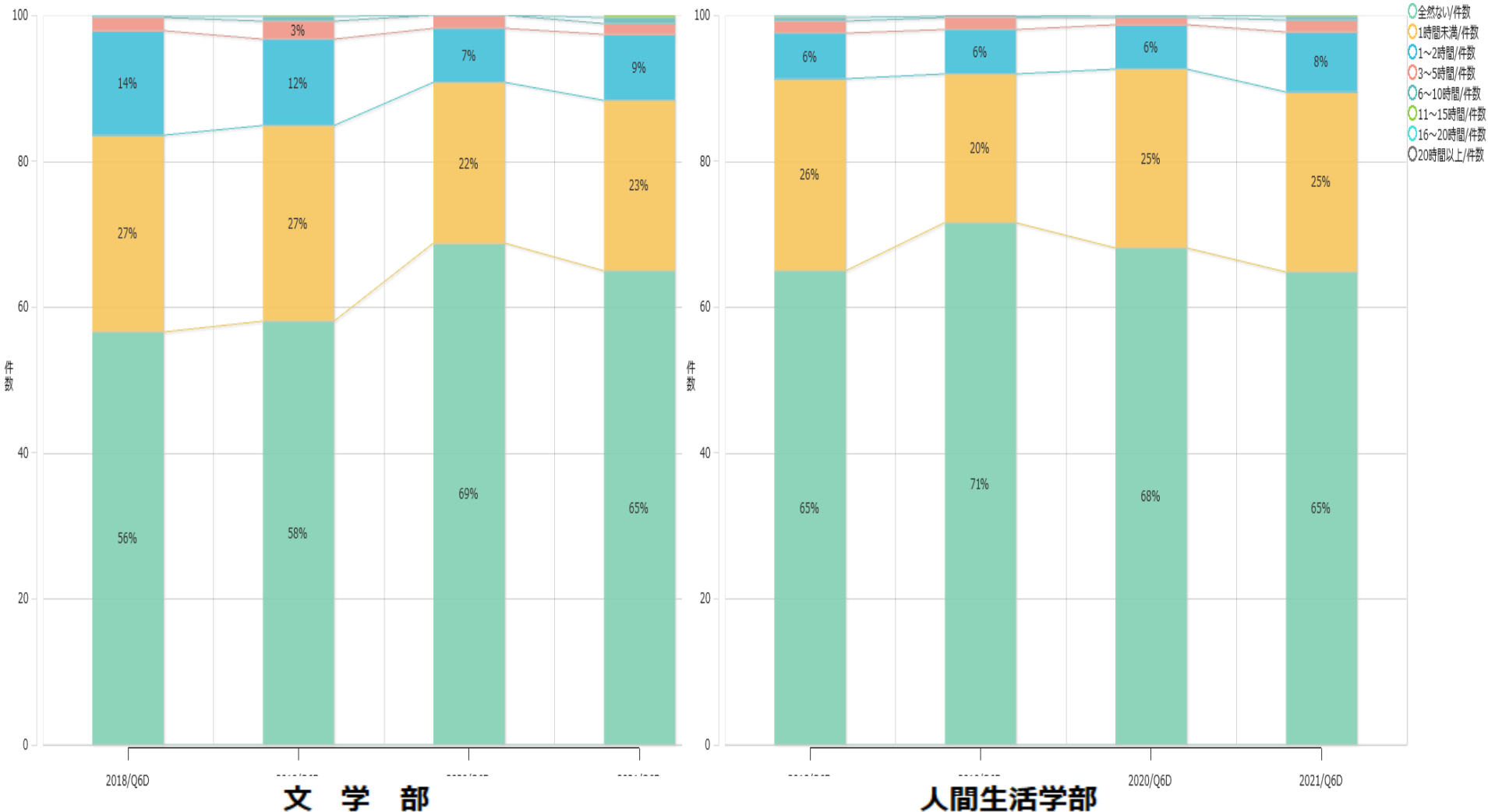
人間生活学部

【コメント】

授業時間外に、授業に関連しない勉強をする時間が「全然ない」と回答した学生の割合は、両学部ともに2020年度から減少し、2021年度もほぼ同じ割合である。コロナ禍により、オンライン授業で登校時間等が減少した分、授業に関連しない分野への興味・関心が増えた可能性が考えられる。文学部と比べて人間生活学部が少ない傾向はこれまでと変わらず、資格取得を目的とする学生が多いため、授業に関連のない勉強の割合は少ない可能性が考えられる。

### 3-4. オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する

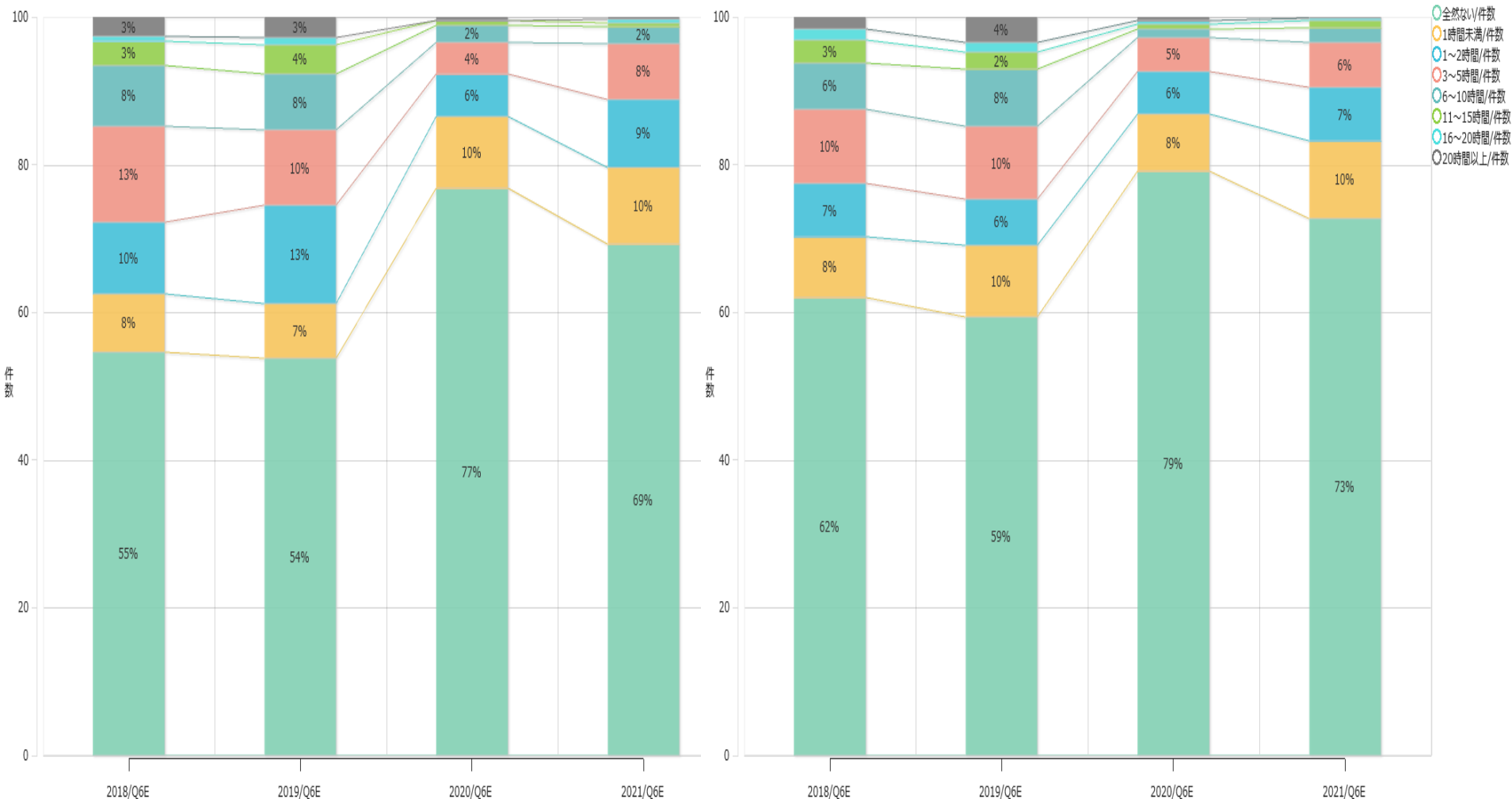
[Q6-D]



【コメント】

2020年度以降、両学部で傾向が異なっている。面談が「全然大きくない」と回答した学生はコロナ禍前と比べて、文学部では増加し、人間生活学部では減少している。「3-1. 授業や実験に出る」の項目では、人間生活学部と比べて文学部では授業への参加時間が長い傾向であったため、教員と面談する機会を持ちやすい環境ではあったと思われるが、コロナ禍前の数値には戻っていない。今後も面談を希望している学生が面談しやすい環境を整えていく必要がある。

# 3-5. 部活動や同好会に参加する 【Q6-E】



【コメント】

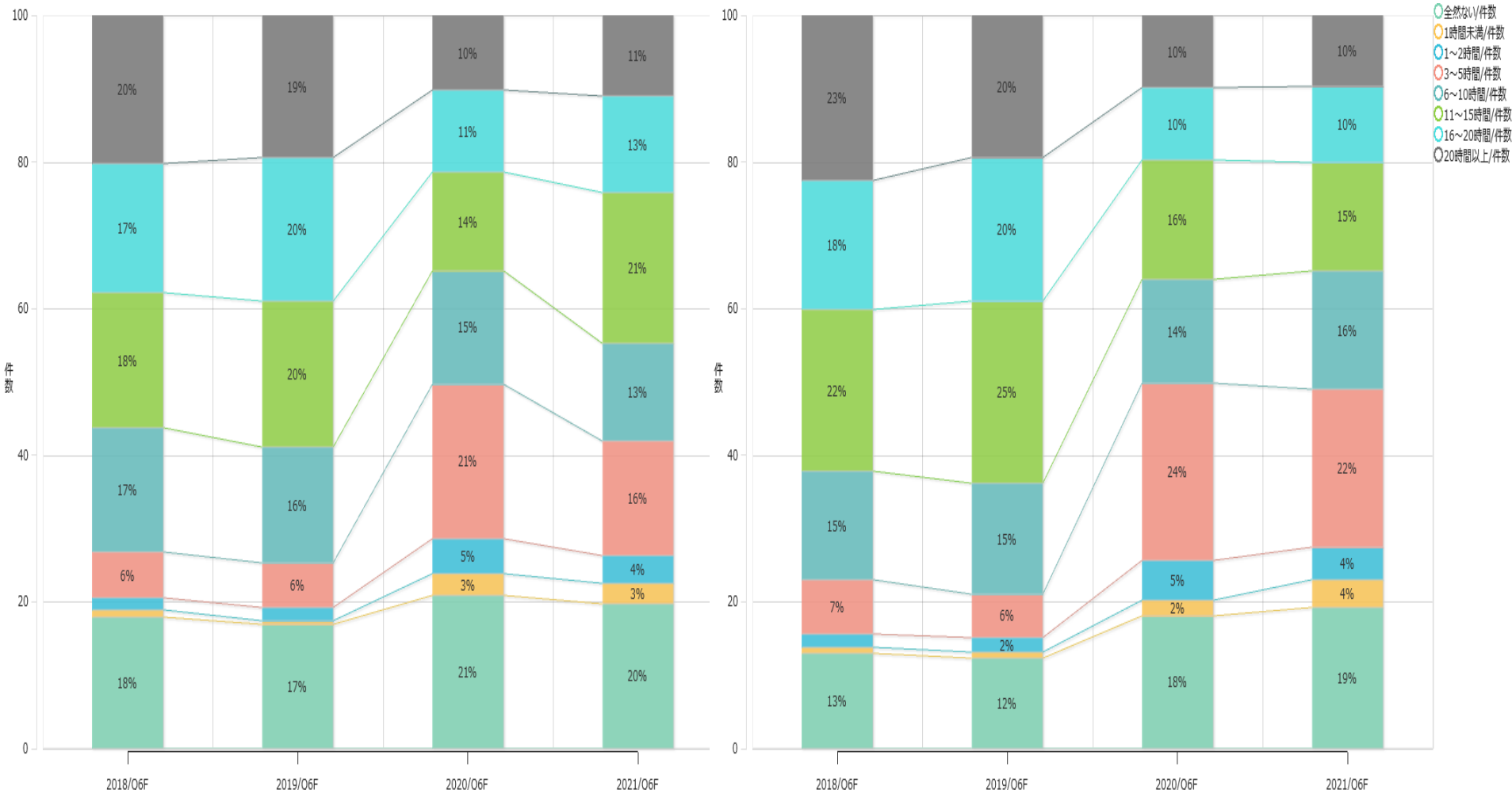
## 文学部

## 人間生活学部

2020年度はコロナ禍により部活動等の活動が制限された影響が大きく、両学部ともに部活動や同好会に参加する割合が2割程度に減少した。2021年度では「全らない」と回答した割合が文学部で8%、人間生活学部で6%減少し、参加者は若干増えているが、コロナ禍前と比べると両学部とも未だ15%程度低くなっている。部員が集まらず思い通りに活動ができていない部・同好会も少なくなく、この2年間で大会参加やイベント実施に関する引き継ぎが出来ていない可能性もあるため、大学としてもフォロー体制を整えていく必要があるかもしれない。

# 3-6. 大学外でアルバイトや仕事をする

【Q6-F】



【コメント】

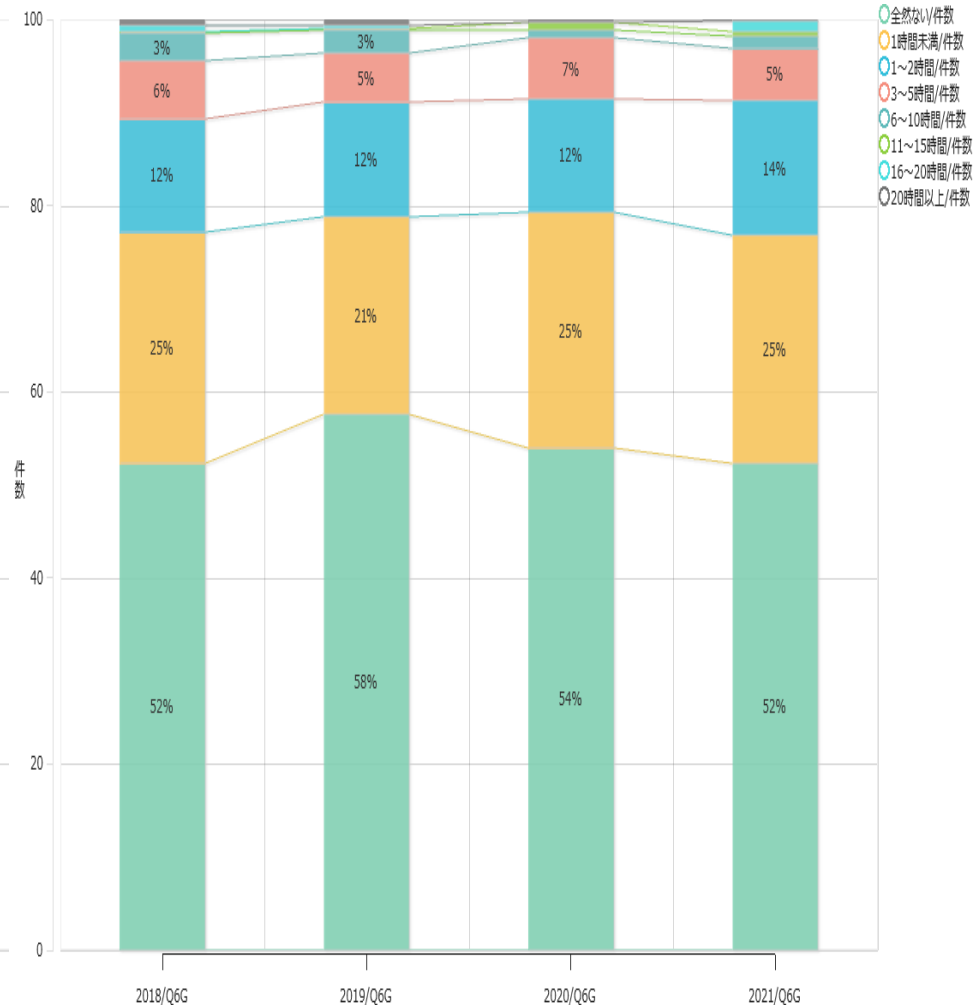
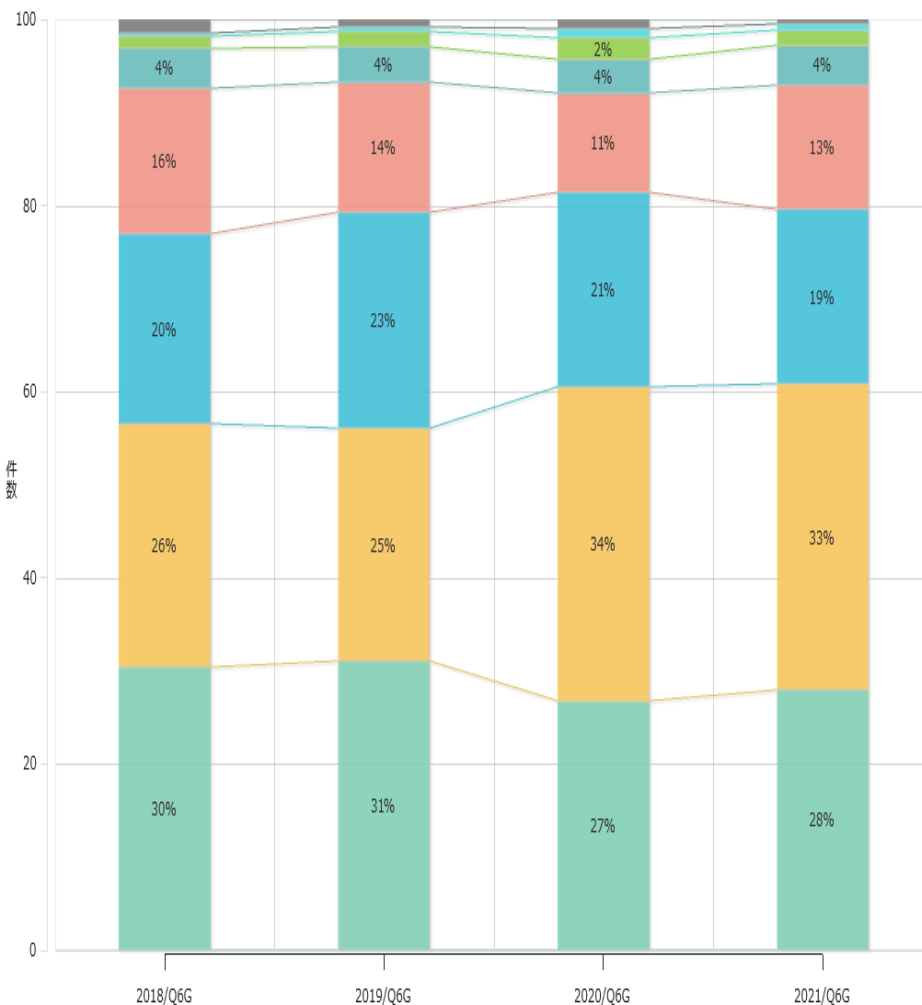
文学部

人間生活学部

2020年度より、両学部ともアルバイト等の時間が減少している。両学部ともに2019年度までは16時間以上アルバイト等に費やしていた学生が4割程度いたが、2020年度から2割程度に減少し、「全然ない」から「3~5時間」の割合が増加した。2021年度は文学部で11時間以上の割合が10%程度増加しているが、コロナ禍前の状況には戻っていない。また、学生生活等への影響が考えられる「20時間以上」の割合も2020年度以降は両学部とも10%程度となっている。アルバイト等の勤務の減少は、学生の経済的困窮にもつながる可能性があるため、今後も学生の生活状況等を追跡する必要があると思われる。

# 3-7. 読書をする（マンガ・雑誌を除く）

【Q6-G】



【コメント】

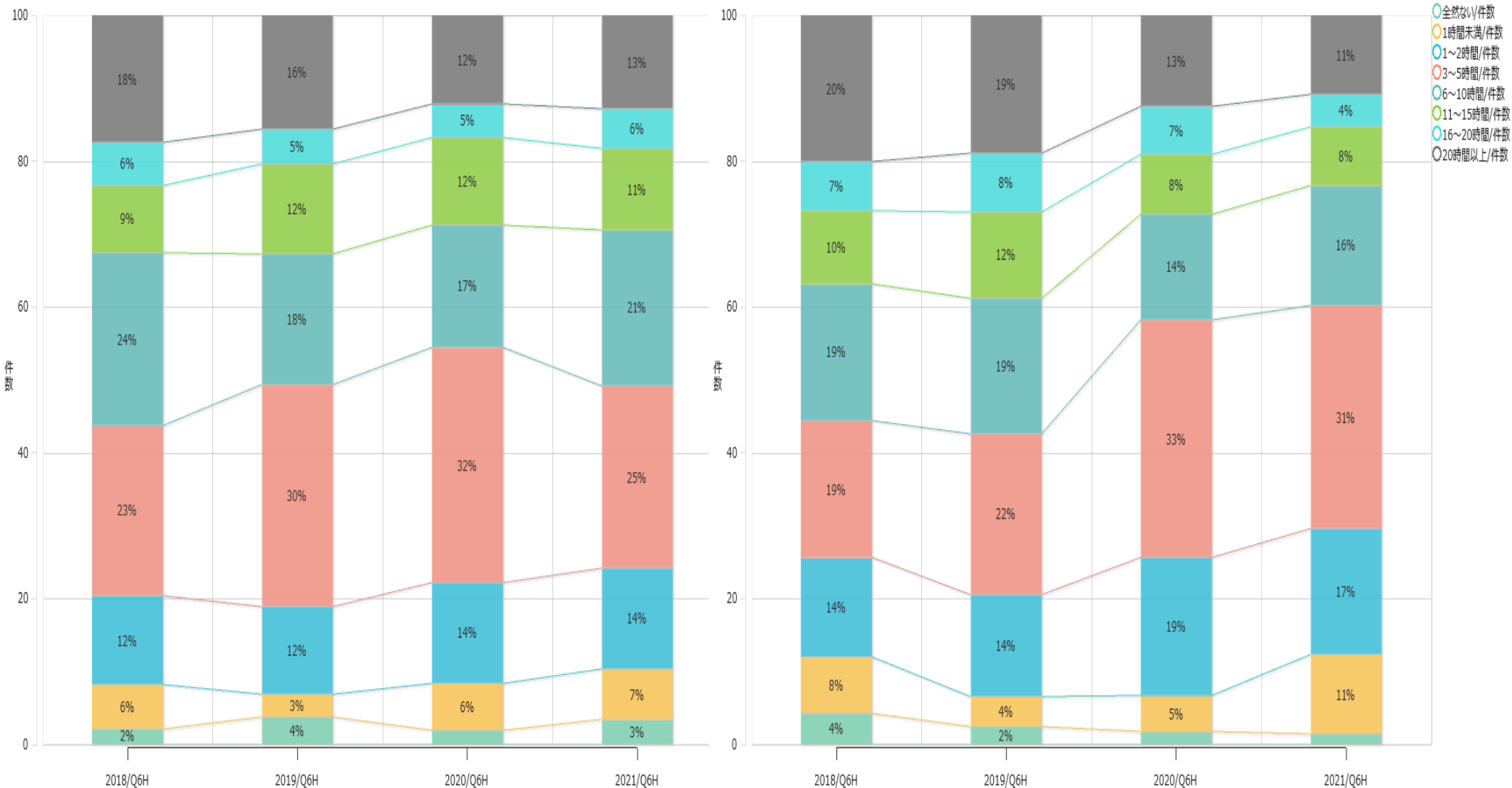
## 文学部

## 人間生活学部

人間生活学部と比べて、文学部は読書をする割合は以前から多いが、2020年度からは「1時間未満」の割合が増えている。「全然大きくない」学生が3割以下であり、全体的に読書する傾向は変わらずあるが、読書にかかる時間は若干減少している。人間生活学部は読書をするのが「全然大きくない」学生が約半分という傾向がコロナ禍前から変わらないが、2021年度では「1時間以上」の学生が若干増えている。

### 3-8. 個人的な趣味活動をする（テレビやゲーム、映画鑑賞など）

【Q6-H】



【コメント】

#### 文学部

#### 人間生活学部

個人的な趣味活動をする時間は、両学部ともに2020年度は「3～5時間」の割合が増え、「6時間以上」の割合は減少した。2021年度では、文学部でコロナ禍前の割合に近づいているが、人間生活学部では2020年度と比べても「1時間未満」の割合が増加し、それ以上の割合がほぼ減っており、コロナ禍前と比べると「6時間以上」じっくりと個人的な趣味活動に費やす割合は15%以上減少している。



「時間の使い方」については、2020年度からのコロナ禍による影響が依然として残っていることが明らかとなった。オンライン授業等の実施により、対面授業への参加が減少し、課題等が増加したことによる影響が、その他の課外活動にも影響している可能性が考えられる。2020年度と比べて、2021年度に改善している項目もあるが、ほぼすべての項目でコロナ禍前の状況には戻っていない。「授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする」では、コロナ禍が長引いていることにより、課題への取り組み姿勢が二極化している様子も見受けられ、オンライン授業による課題量や学習効果についても、引き続き検討していく必要があると思われる。また、2020年度と比べて対面授業が増加した2021年度においても、部活動やアルバイトなどへの参加の割合は未だに低く、教員との面談の機会も充分ではない可能性がある。正課だけでなく、課外活動での経験や人間関係も大学生にとってはたいへん重要であることは言うまでもなく、今後は顕在化していない孤立や精神的不安などにも配慮が必要になるであろう。

コロナ禍による「時間の使い方」の変化により、学生の学習に対する取り組みや様々な経験は、より二極化や多様化が進んでいることが考えられ、今後も新たな学習支援・生活支援ニーズへの対応が求められる可能性が高い。学生の声に耳を傾け、協働して学生を支援できる体制を整えることがますます重要になってくるのではないだろうか。

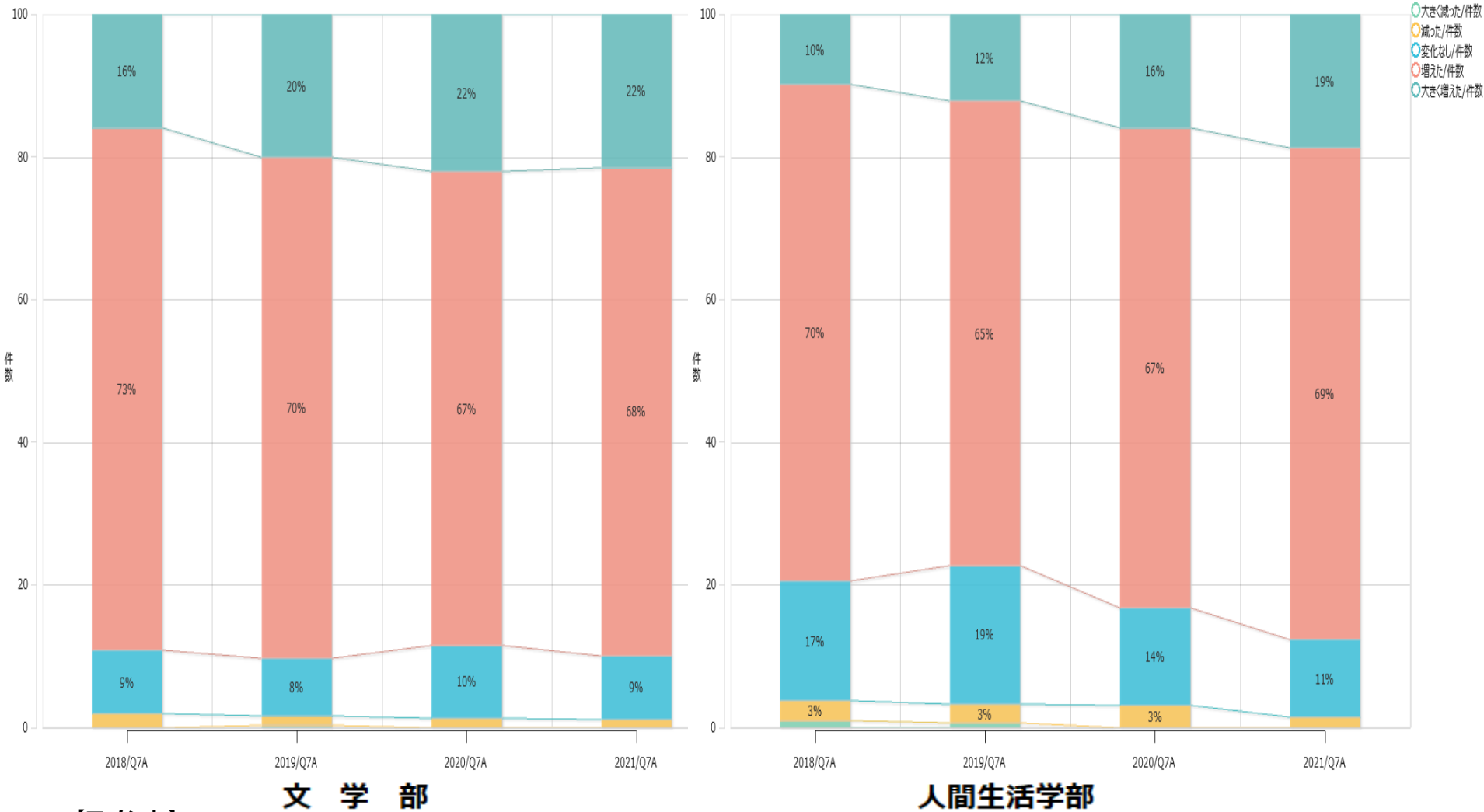
# 4. 能力の変化

**Q. 入学した時点と比べて、あなたの能力や知識はどのように変化しましたか。**

- 4-1. 一般的な教養
- 4-2. 分析力や問題解決能力
- 4-3. 専門分野や学科の知識
- 4-4. 批判的に考える能力
- 4-5. 異文化の人々に関する知識
- 4-6. リーダーシップの能力
- 4-7. 人間関係を構築する能力
- 4-8. 他の人と協力して物事を遂行する能力
- 4-9. 異文化の人々と協力する能力
- 4-10. 地域社会が直面する問題を理解する能力
- 4-11. 国民が直面する問題を理解する能力
- 4-12. 文章表現の能力
- 4-13. 外国語の運用能力
- 4-14. コミュニケーションの能力
- 4-15. プレゼンテーションの能力
- 4-16. 数理的な能力
- 4-17. コンピュータの操作能力
- 4-18. 時間を効果的に利用する能力
- 4-19. グローバルな問題の理解
- 4-20. 卒業後に就職するための準備の度合い

# 4-1. 一般的な教養

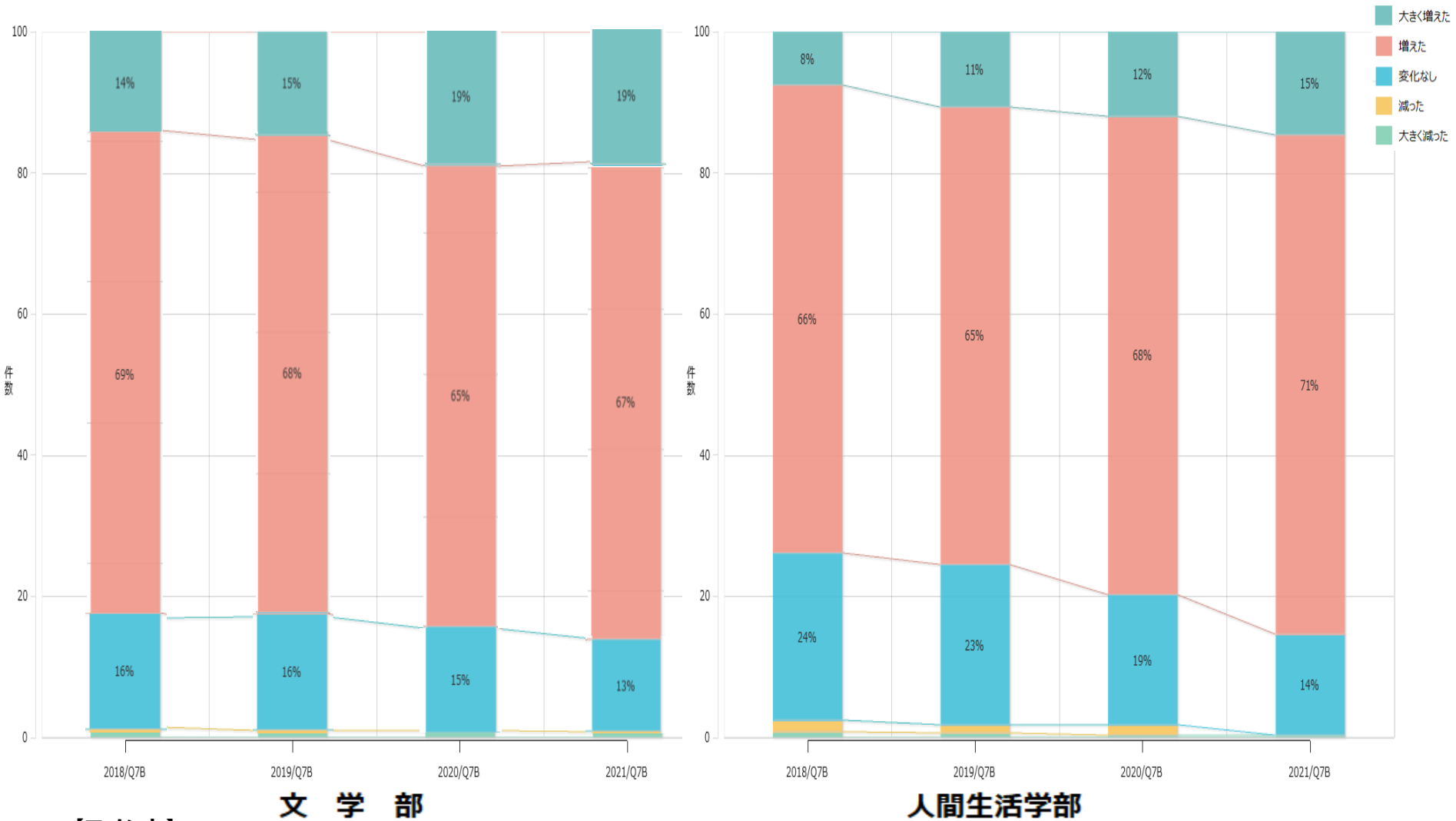
【Q7-A】



【コメント】

コロナ前の2018, 2019年調査結果では学部間に差が見られ、文学部の方が「大きく増えた」と回答する割合が多かったが、2021年調査ではその差がほとんど見られなくなった。非対面授業により従来よりもレポートなどの課題が増えたことなどにより、教養科目への向き合う姿勢や課題への取り組み方に変化が見られた可能性が考えられる。

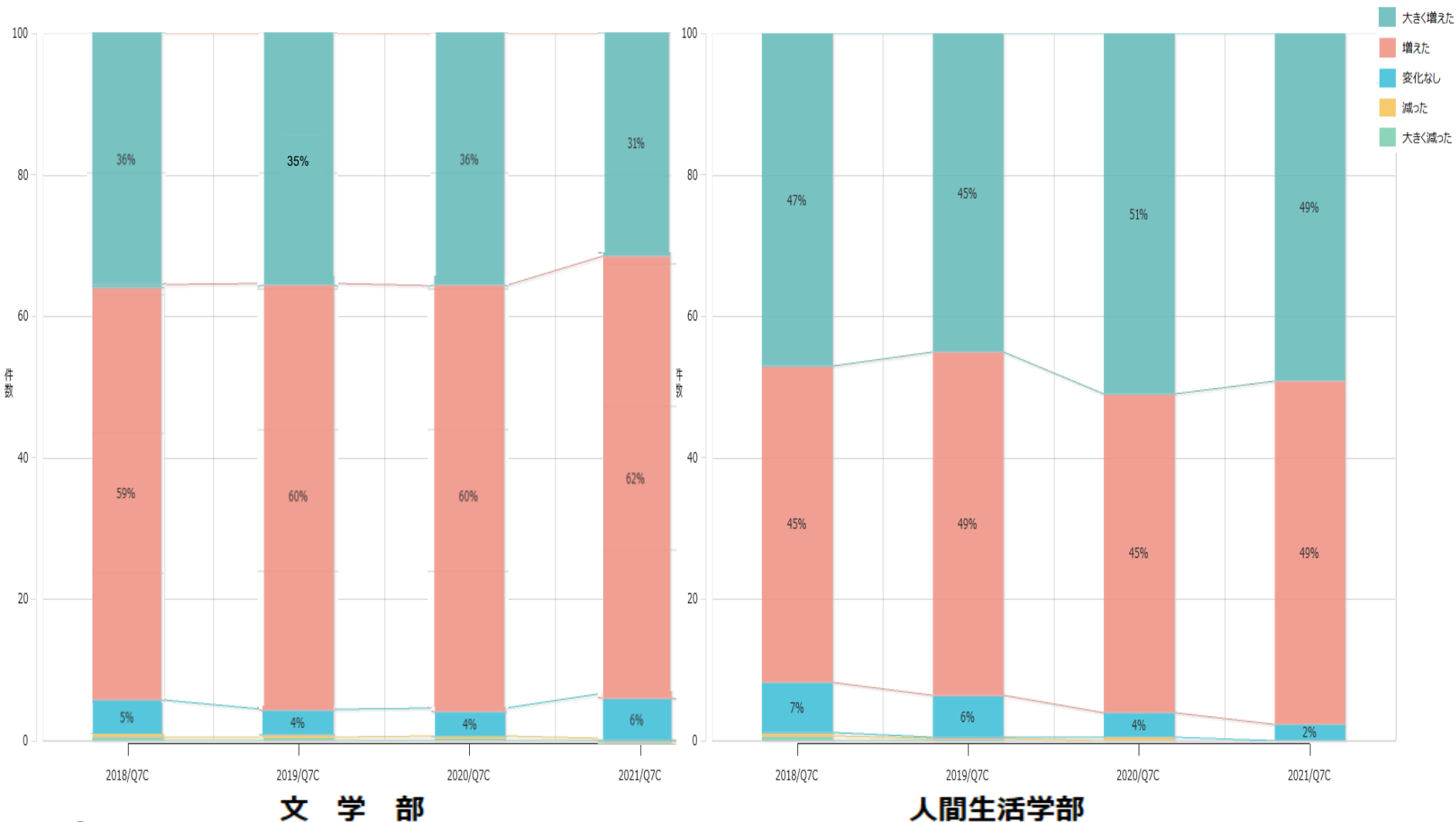
## 4-2. 分析力や問題解決能力 【Q7-B】



### 【コメント】

「大きく増えた」「増えた」と回答した割合は文学部の方がやや多いという特徴がある。経年比較では人間生活学部において著増傾向が見られるが、非対面授業（2020、2021年）による変化なのかどうかの検証については、今後の課題としたい。

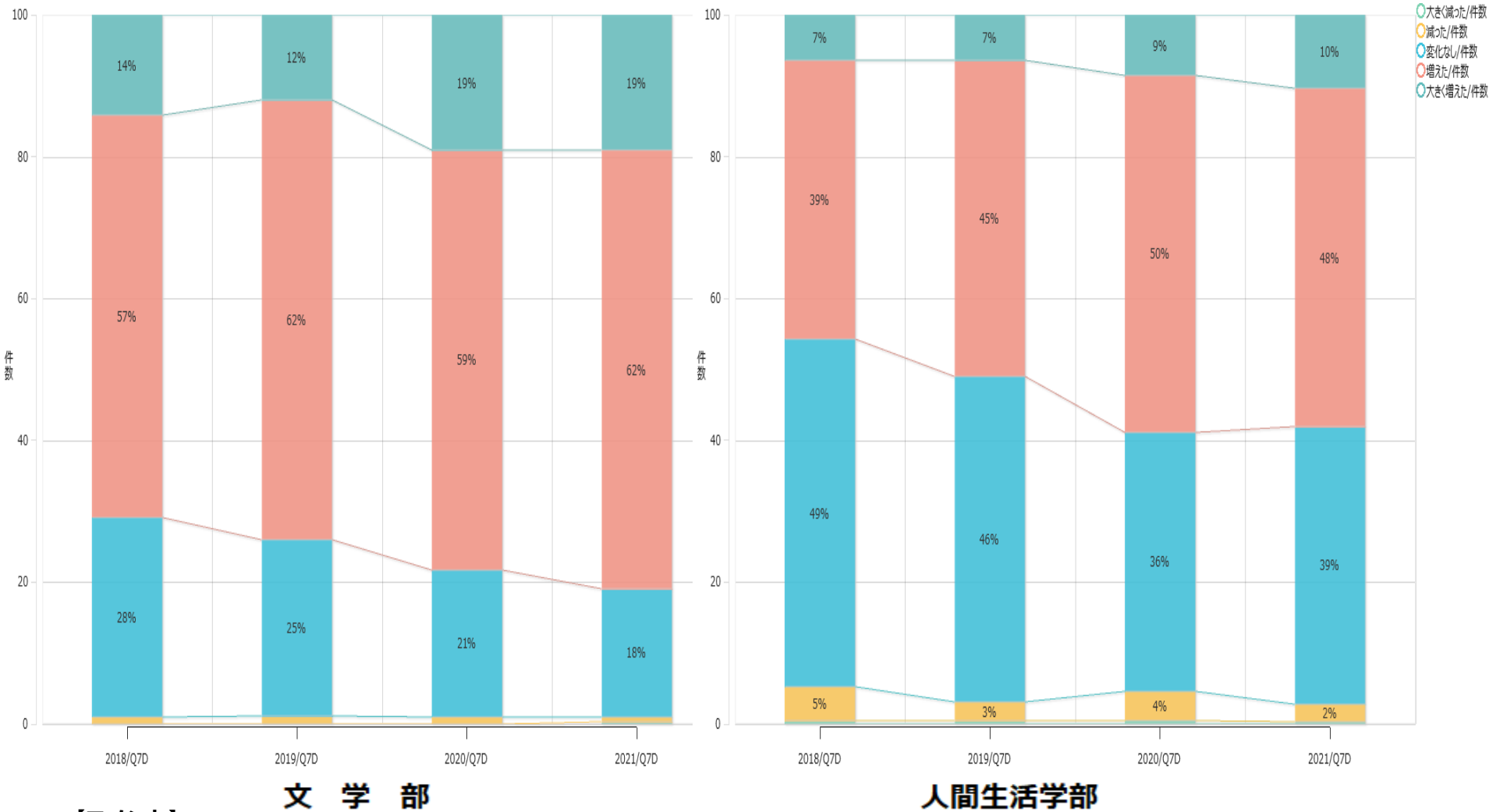
## 4-3. 専門分野や学科の知識 【Q7-C】



### 【コメント】

「大大きく増えた」「増えた」と回答した割合は人間生活学部の方が多いという特徴があるが、経年比較では両学部で大きな変化はなかった。このことから、本調査結果からは専門分野や学科の知識修得への対面（2018, 2019年）、非対面授業（2020, 2021年）による影響は見られなかった。

## 4-4. 批判的に考える能力 [Q7-D]

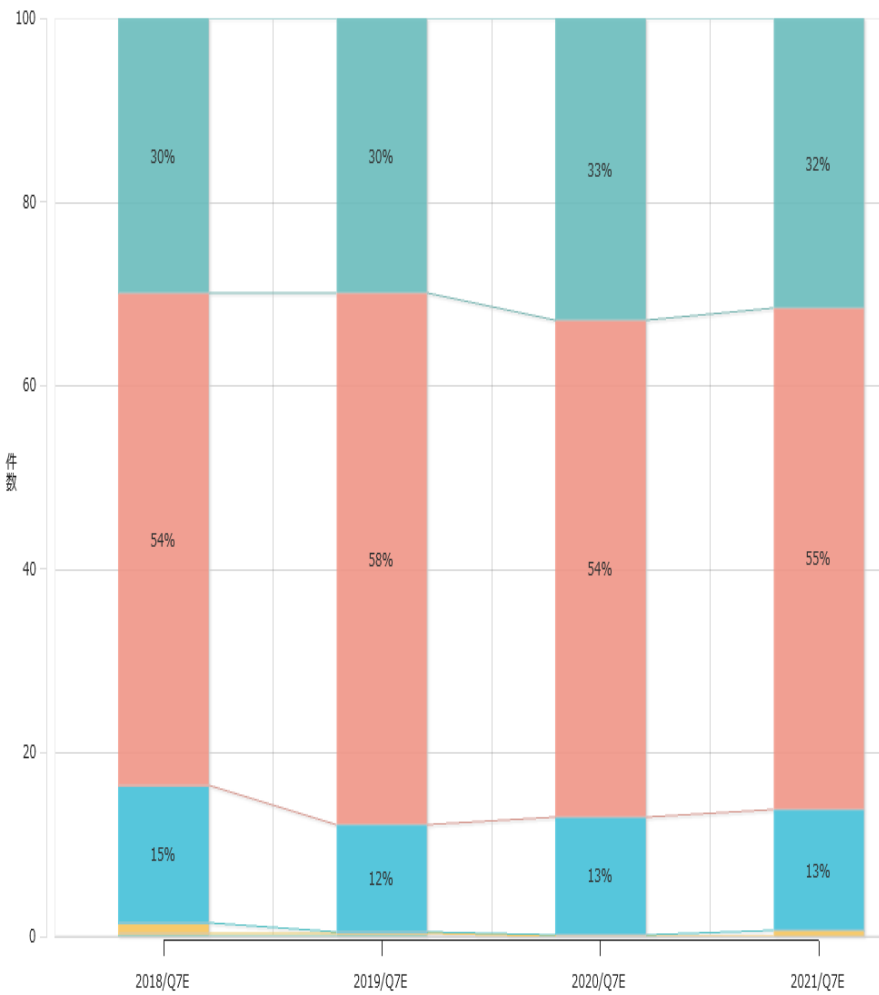


### 【コメント】

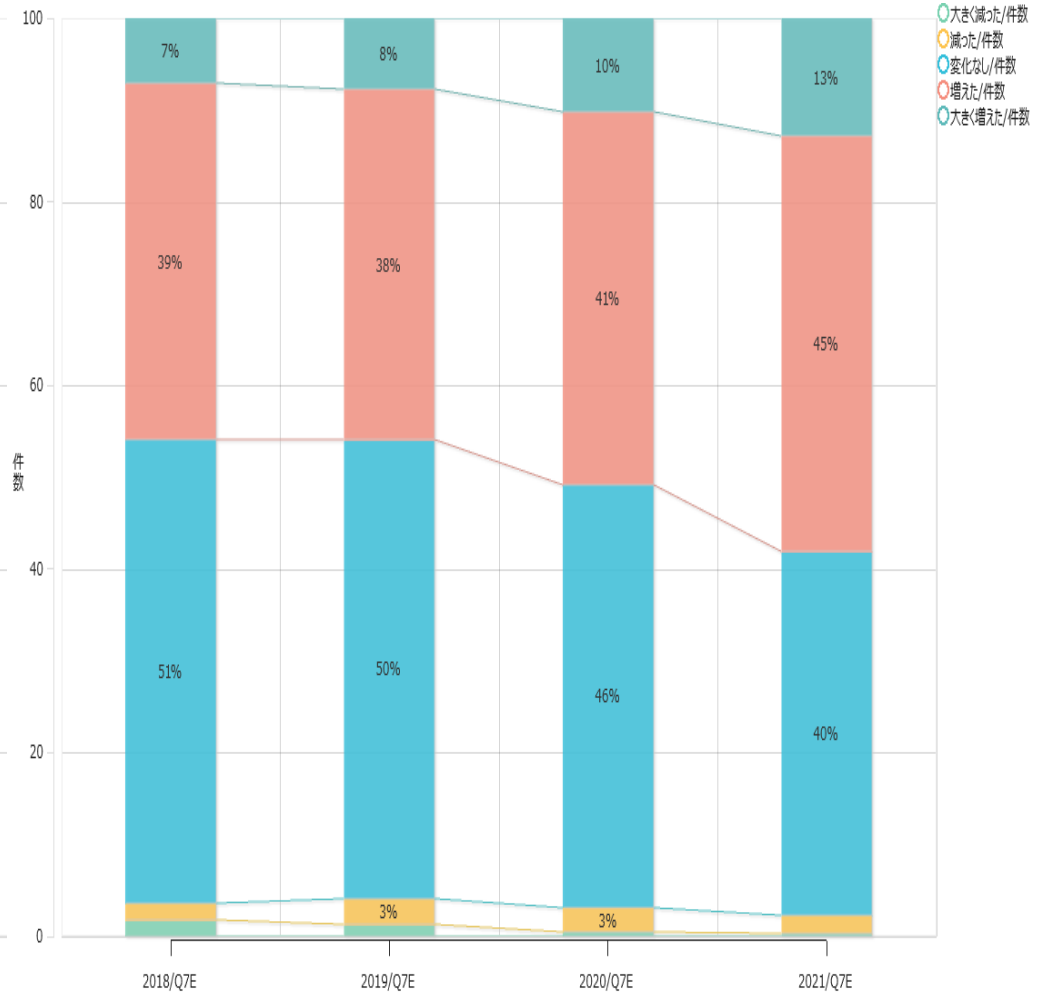
いずれの年度においても文学部の方が高いという特徴が見られる。両学部ともに2020年、2021年における「大々増えた」「増えた」の割合がそれ以前と比較して増加傾向が見られ、とくに人間生活学部において顕著に増加している。非対面授業において提示される課題への取り組み等を通じて、物事を多面的かつ客観的に捉える機会が増えたことにより批判的思考力が身についたと実感している可能性が考えられる。

# 4-5. 異文化の人々に関する知識

【Q7-E】



文学部

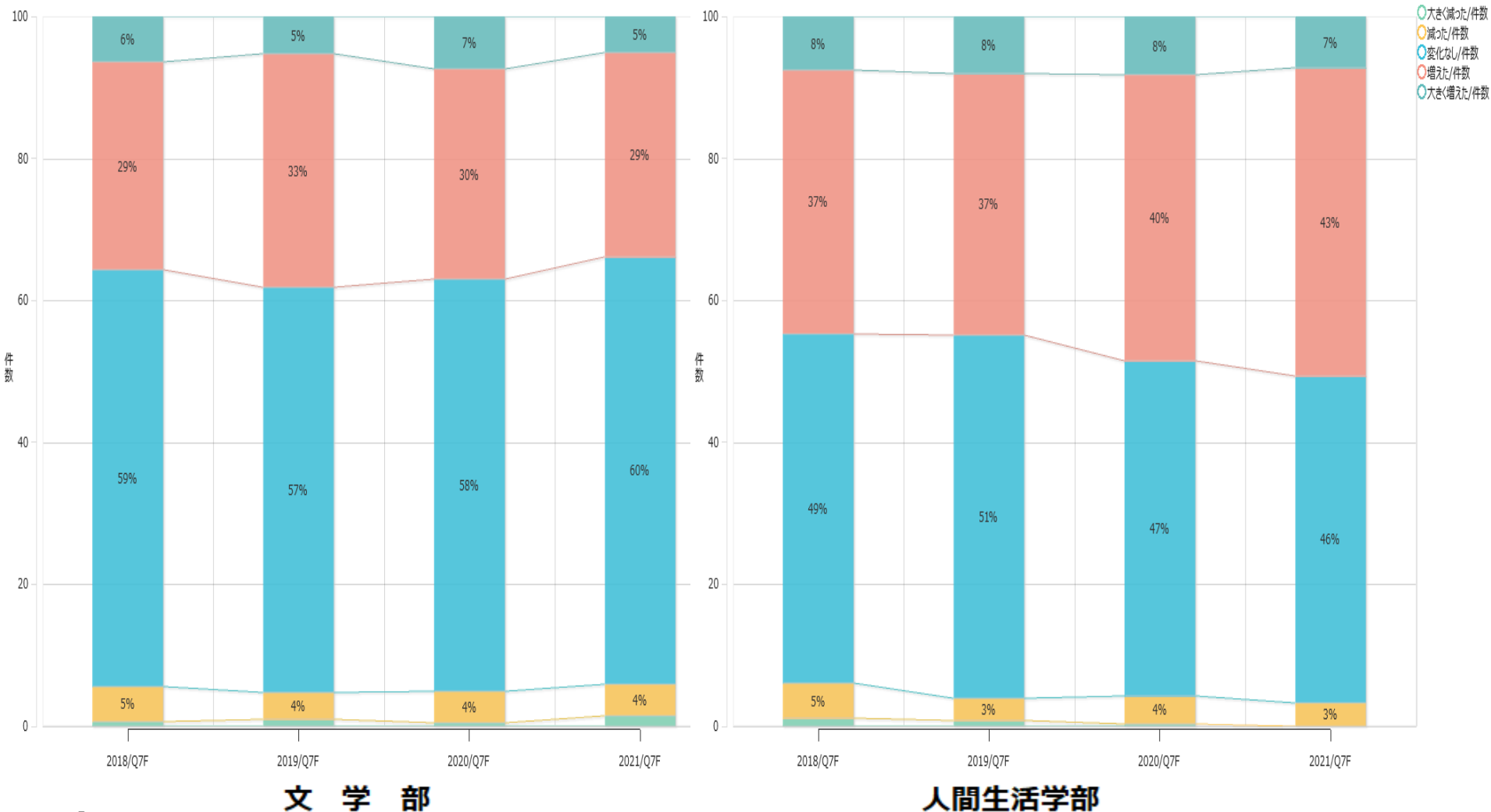


人間生活学部

【コメント】

いずれの年度においても文学部の方が高いという特徴が見られる。人間生活学部では2021年における「大きく増えた」「増えた」の割合がコロナ前の2018、2019年と比較して増加傾向にある。

## 4-6. リーダーシップの能力 【Q7-F】

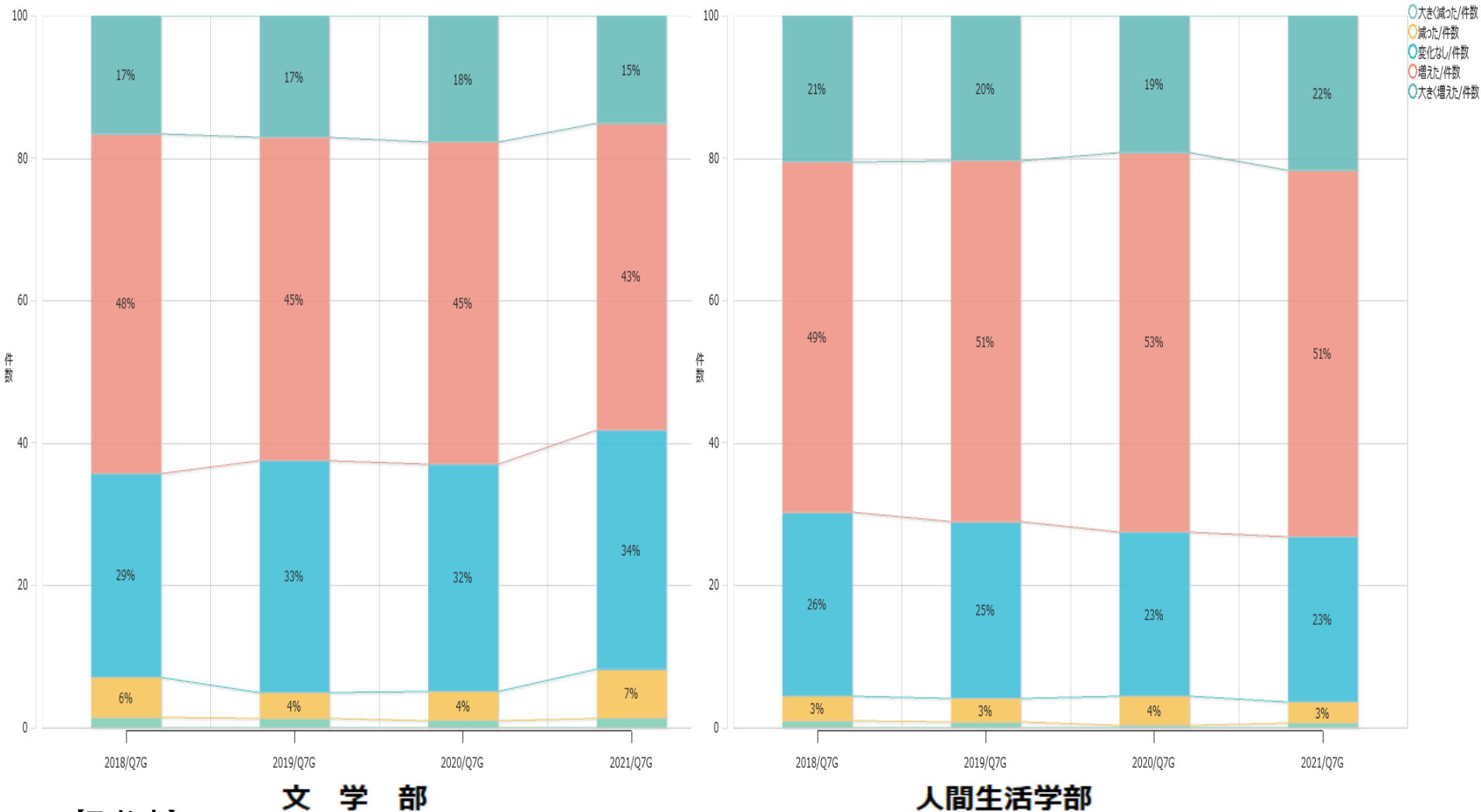


### 【コメント】

「大きく増えた」「増えた」と回答した割合は人間生活学部の方が多いという特徴があるが、経年比較では両学部で大きな変化は見られなかった。このことから、本調査結果からはリーダーシップの能力への対面（2018、2019年）、非対面授業（2020、2021年）による影響は見られなかった。



## 4-7. 人間関係を構築する能力 [Q7-G]

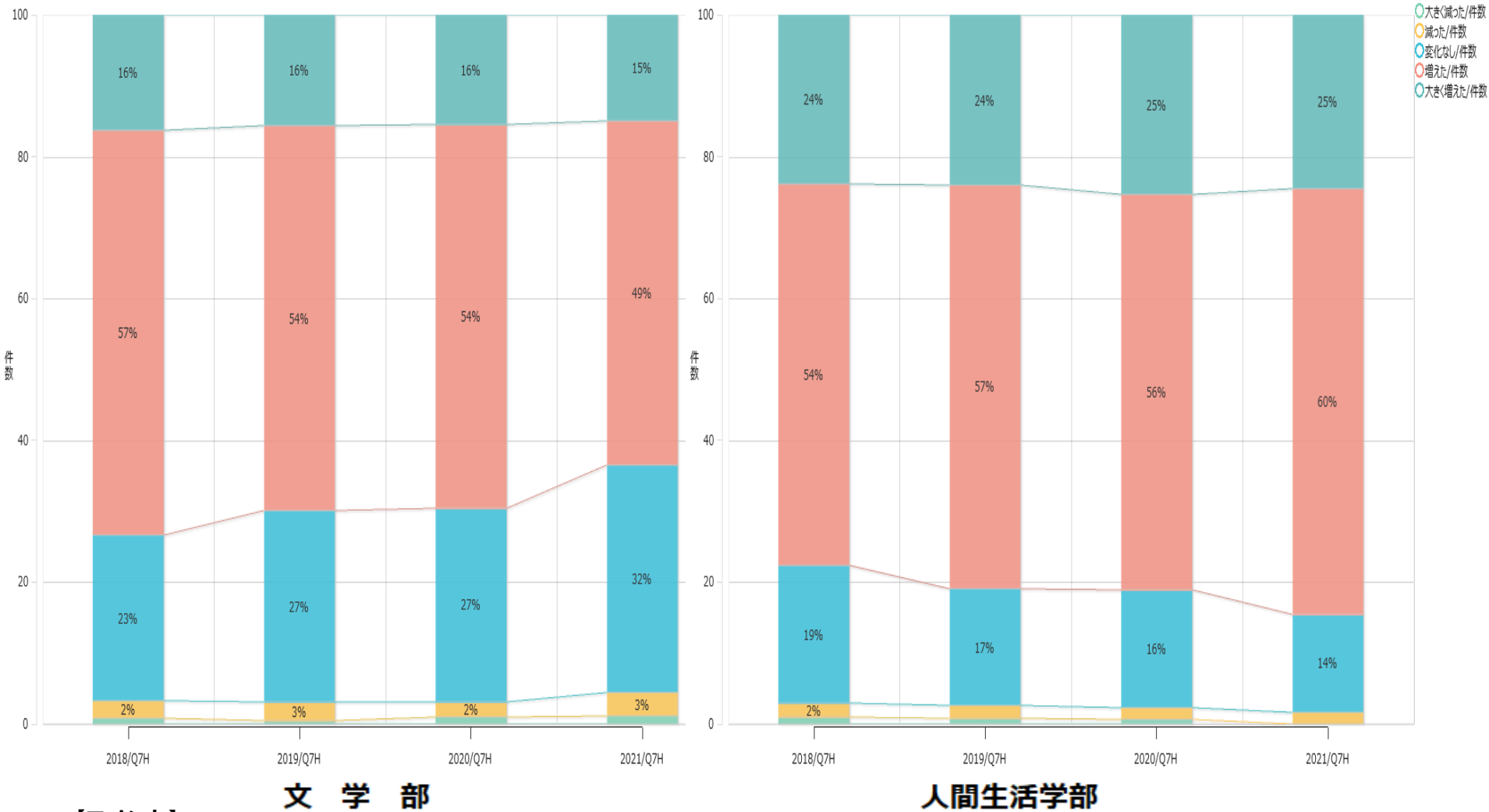


### 【コメント】

「大きく増えた」「増えた」と回答した割合は人間生活学部の方が多いという特徴があるが、経年比較では両学部で大きな変化はなかった。このことから、本調査結果からは、人間関係を構築する能力への対面（2018, 2019年）、非対面授業（2020, 2021年）による影響は見られなかった。

# 4-8. 他の人と協力して物事を遂行する能力

[Q7-H]

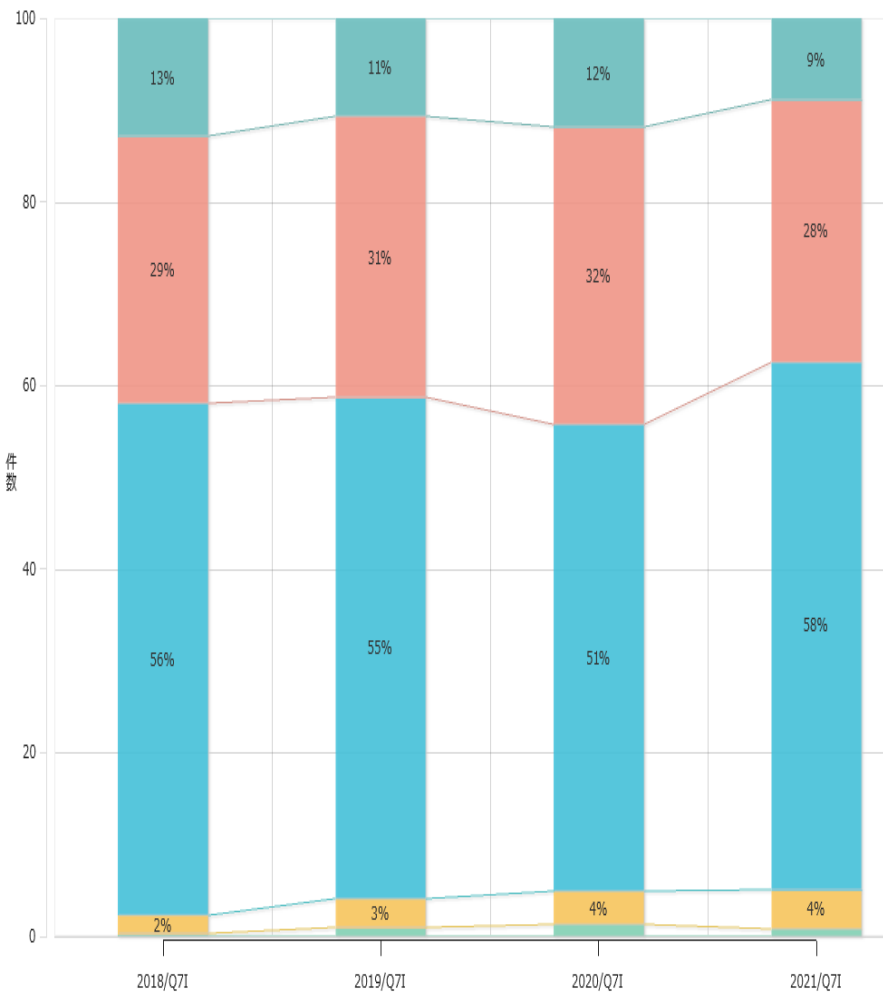


**【コメント】**

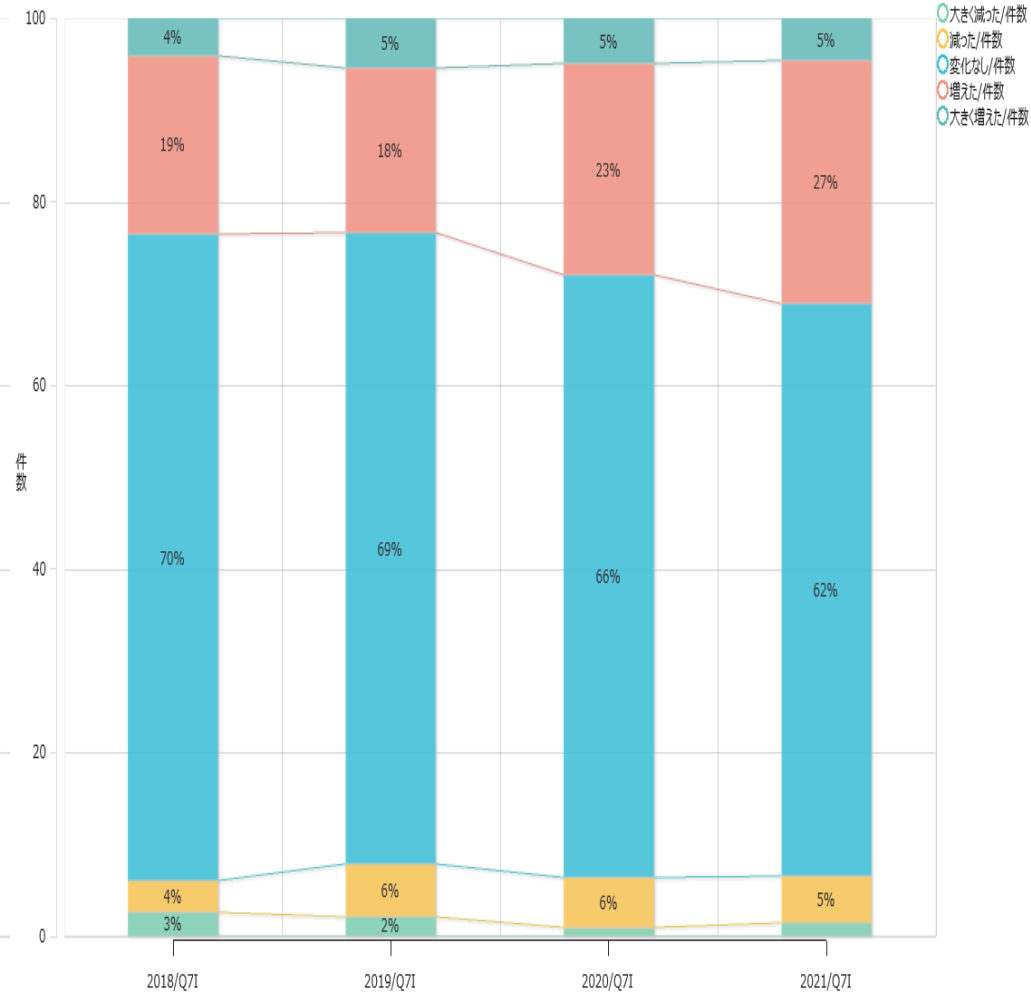
「大きく増えた」「増えた」と回答した割合は人間生活学部の方が多くという特徴が見られる。経年比較では文学部において「増えた」が減少傾向である一方、「変化なし」が増加傾向と読み取れるが、非対面授業（2020、2021年）による影響なのかどうか、今後の動向も踏まえて見極める必要がある。

# 4-9. 異文化の人々と協力する能力

【Q7-I】



文学部

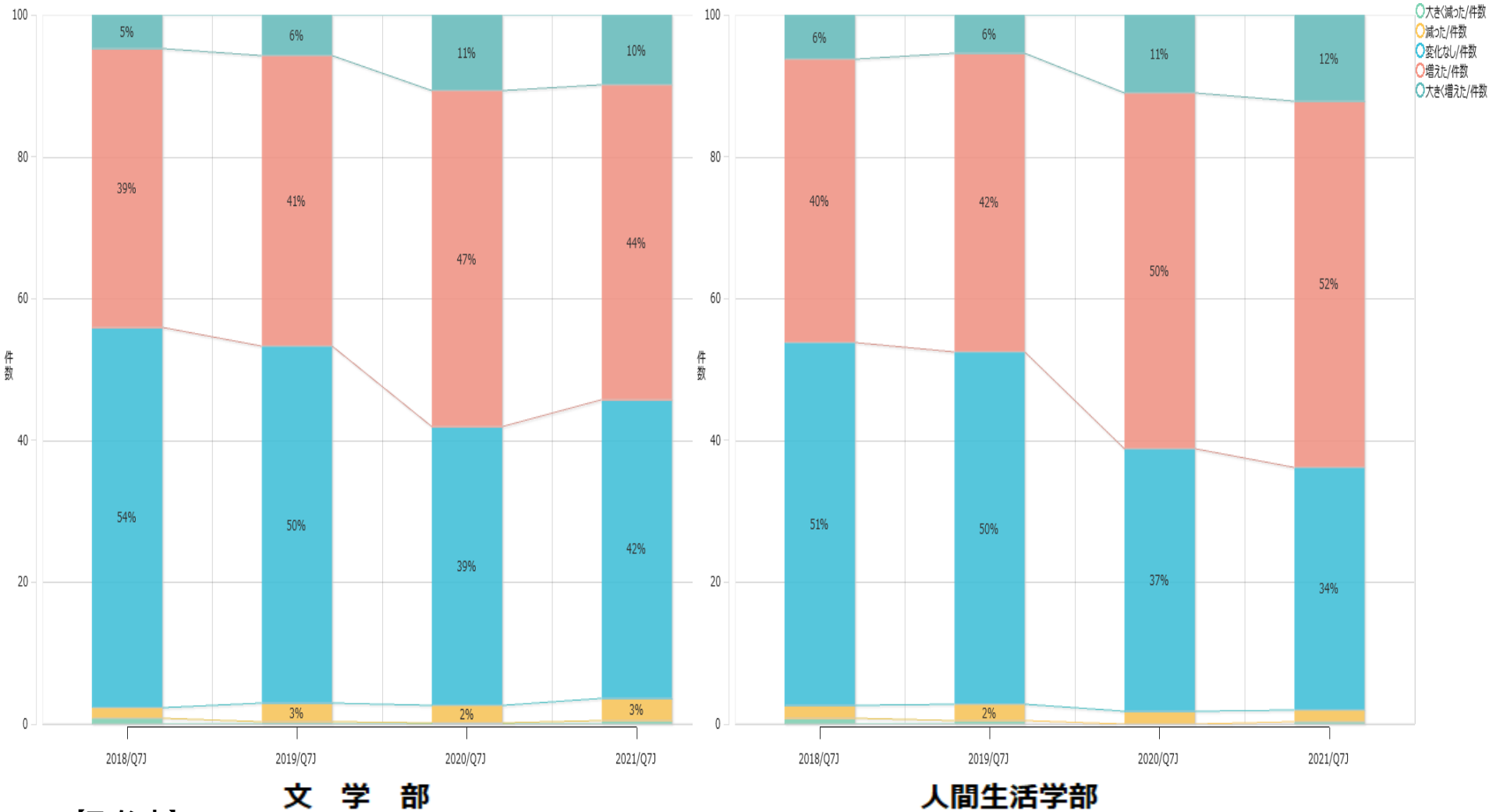


人間生活学部

【コメント】

いずれの年度においても文学部の方が高いという特徴が見られる。人間生活学部においては2020、2021年における「大きく増えた」「増えた」の割合がコロナ前の2018、2019年と比較して増加傾向にある。

# 4-10. 地域社会が直面する問題を理解する能力 【Q7-J】

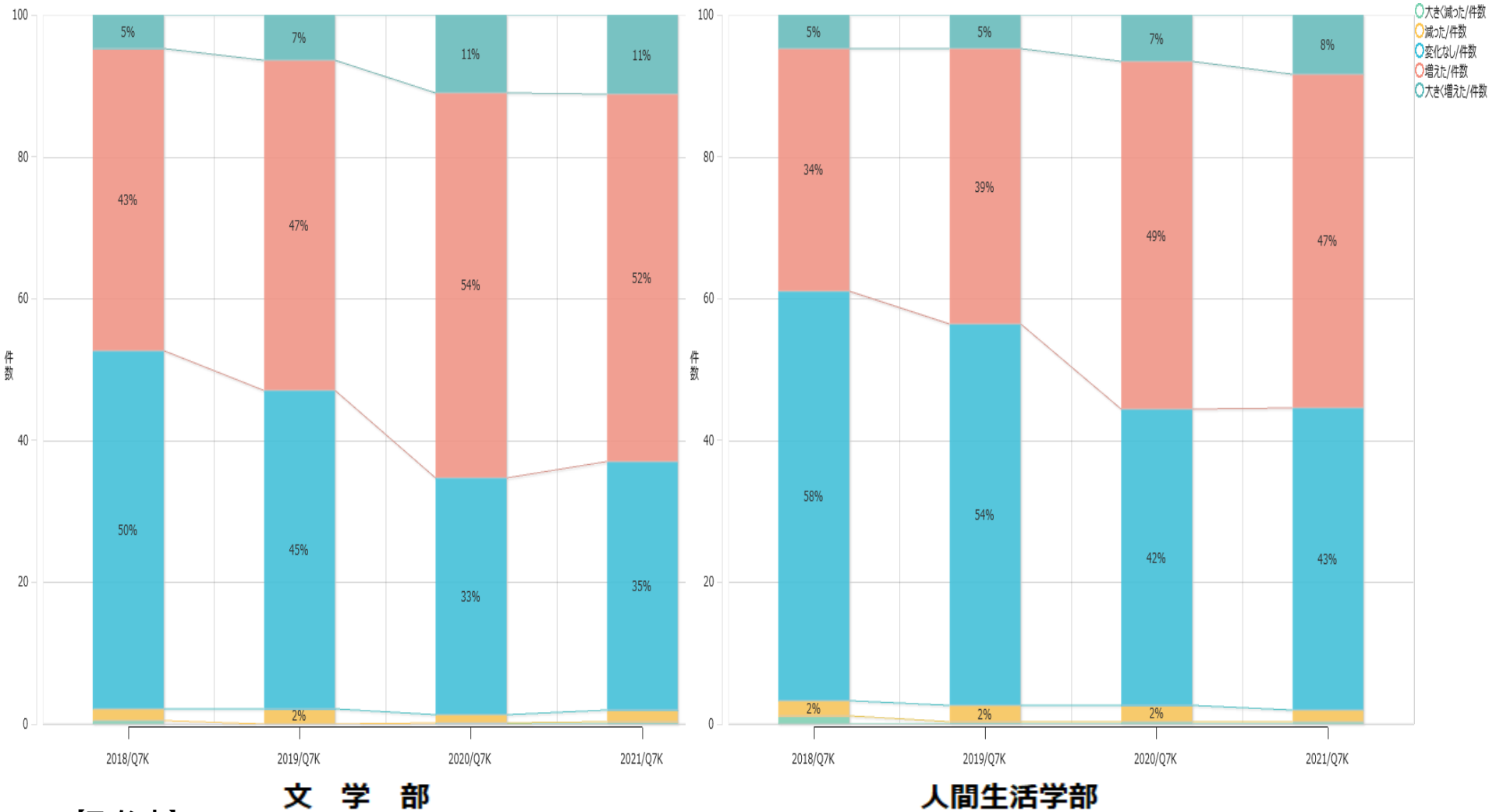


**【コメント】**

両学部ともに、2020、2021年における「大きく増えた」「増えた」の割合がコロナ前の2018、2019年と比較して増加傾向にある。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、外出や他者との関わりが制限されるなどの経験から、地域社会への繋がりや関心の高まりが見られたことなどが要因と考えられる。

# 4-11. 国民が直面する問題を理解する能力

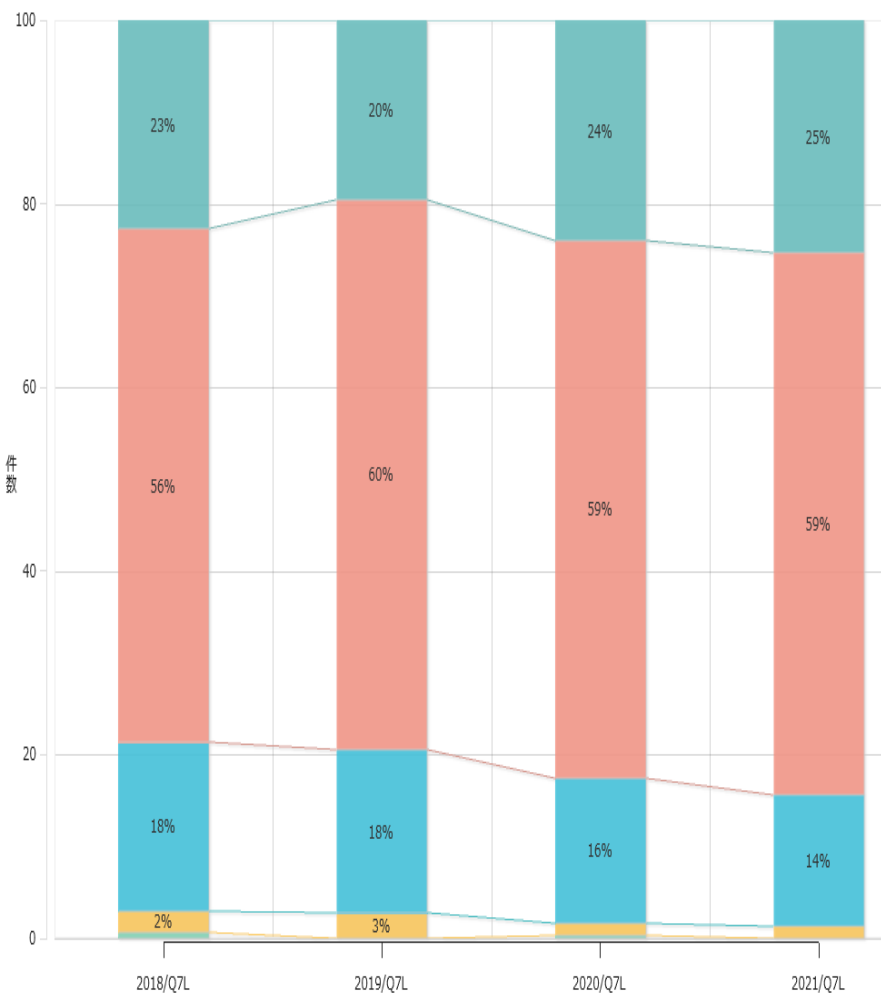
【Q7-K】



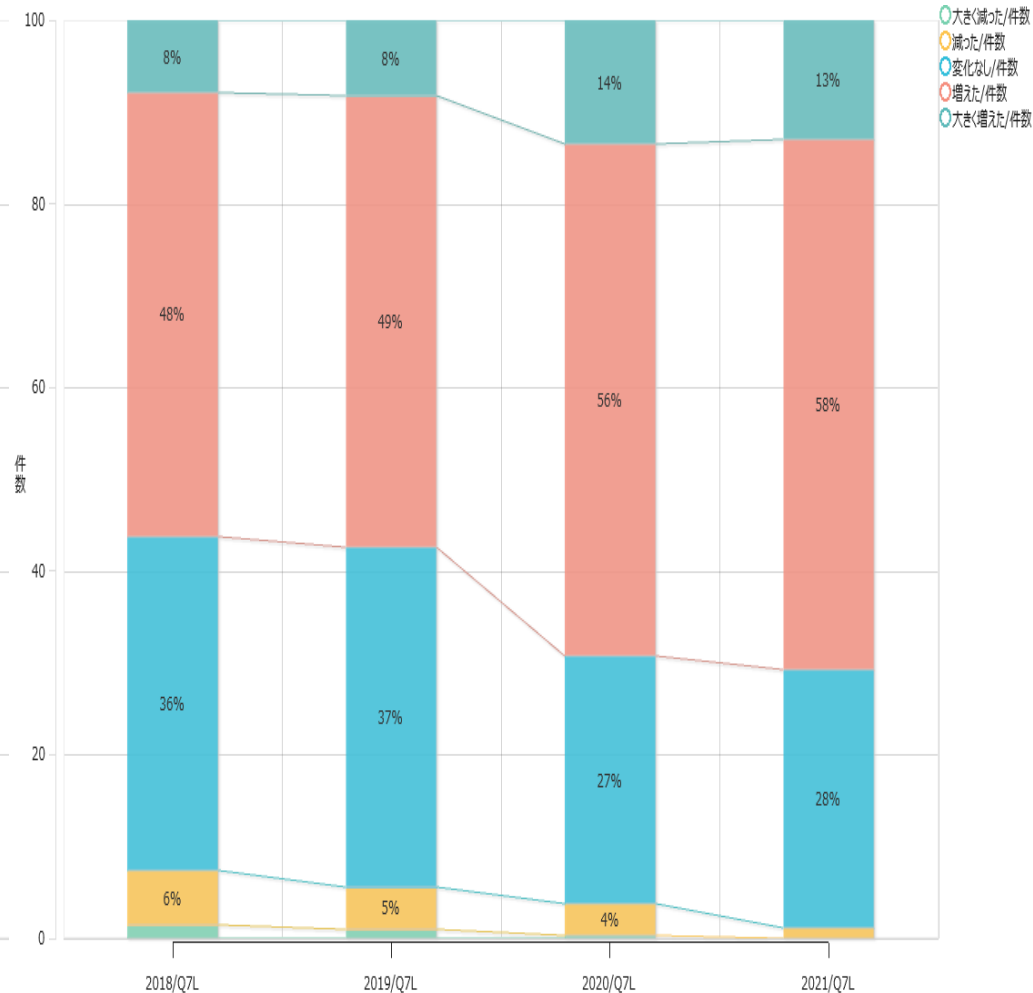
【コメント】

両学部ともに、2020、2021年における「大きく増えた」「増えた」の割合がコロナ前の2018、2019年と比較して増加傾向にある。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、経済や産業、観光などさまざまな課題に直面する中で、国や自治体の対応のあり方や自分自身にできることは何かなど考える機会となったことなどが要因と考えられる。

## 4-12. 文章表現の能力 【Q7-L】



文学部

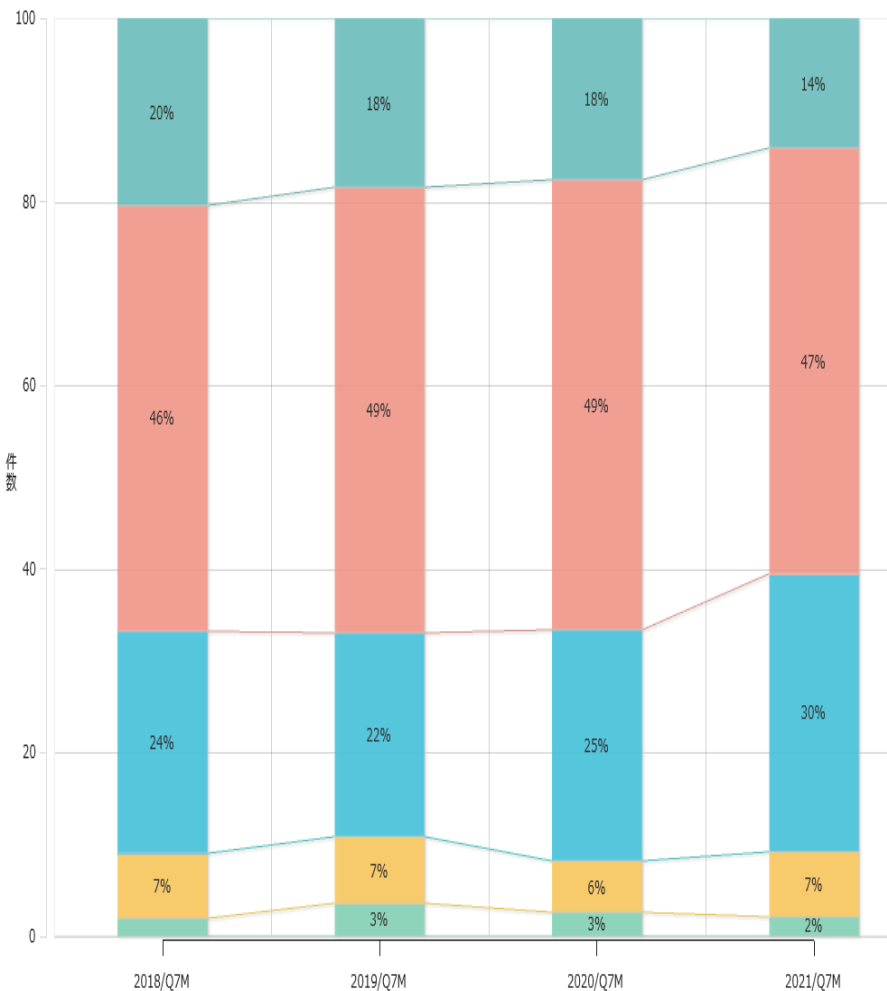


人間生活学部

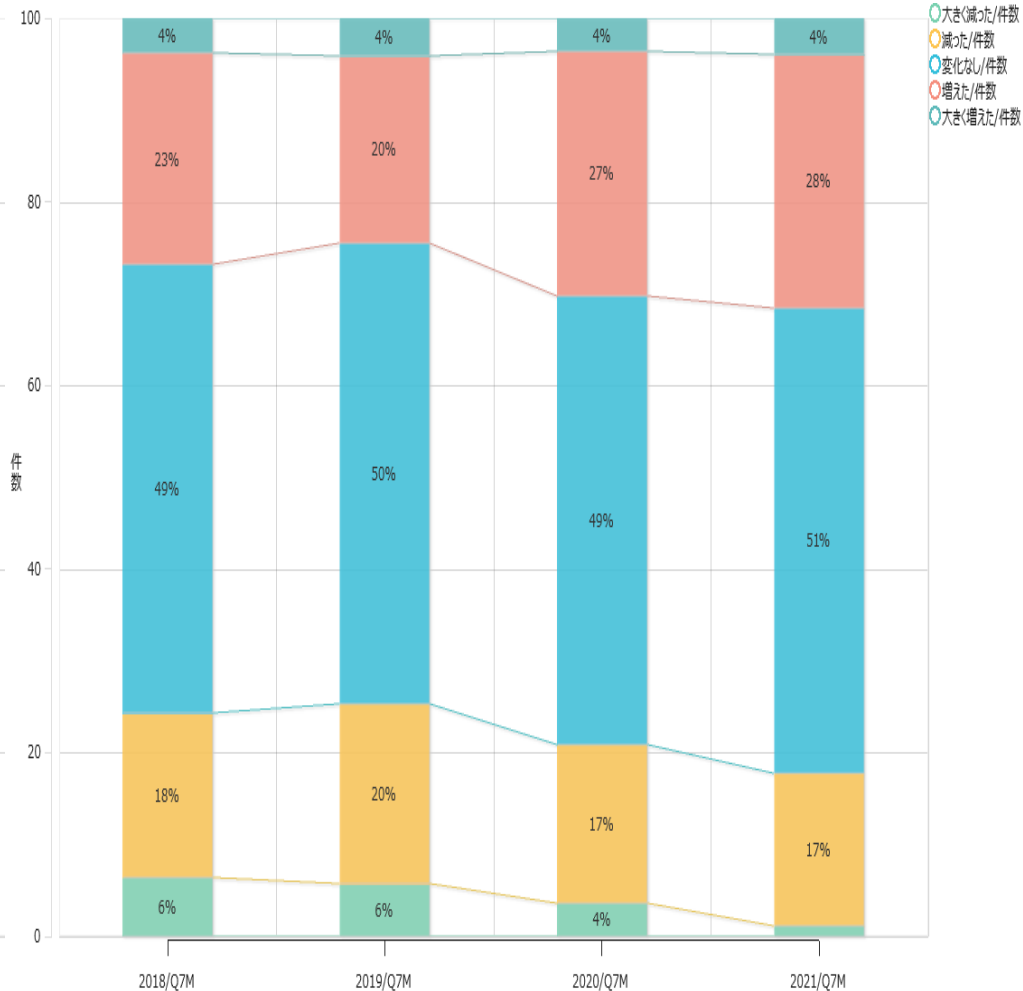
### 【コメント】

いずれの年度においても文学部の方が高いという特徴が見られる。人間生活学部においては2021年で「大きく増えた」「増えた」がコロナ前の2018、2019年と比較して増加傾向にある。レポート課題等が増えたことにより、相対的に自分自身の考えを文章にまとめる機会が増えたためと考えられる。

# 4-13. 外国語の運用能力 【Q7-M】



**文学部**



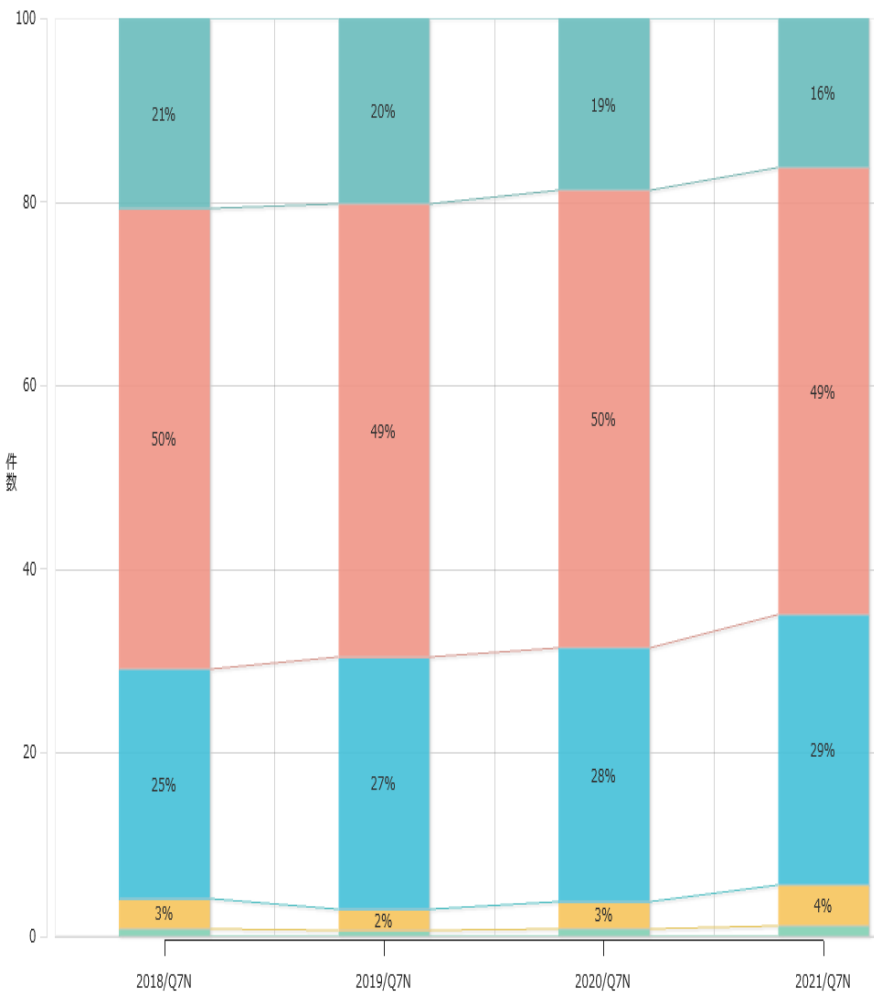
**人間生活学部**

**【コメント】**

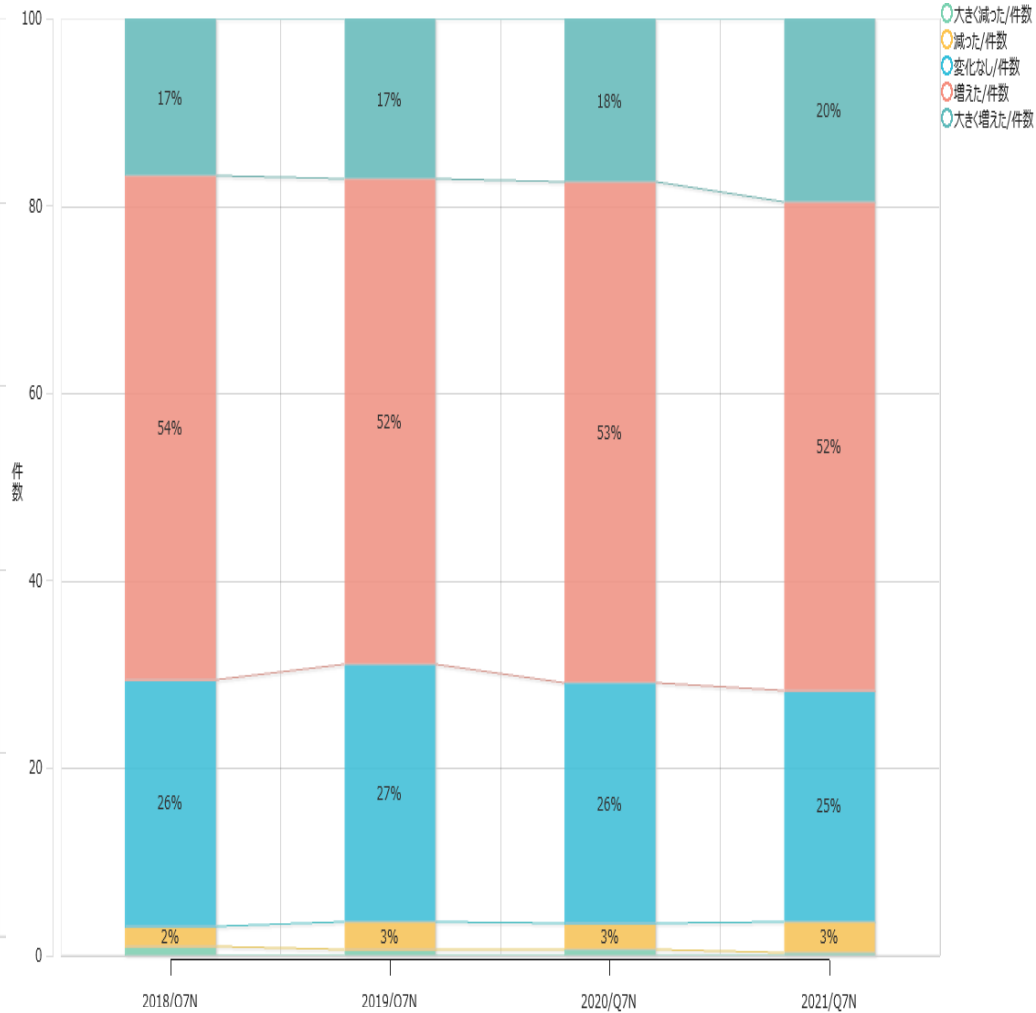
「大きく増えた」「増えた」と回答した割合は文学部の方が多いという特徴が見られる。経年比較では文学部において「増えた」が減少傾向である一方、「変化なし」が増加傾向と読み取れるが、非対面授業（2020，2021年）による影響なのかどうか、今後の動向も踏まえて見極める必要がある。

# 4-14. コミュニケーションの能力

【Q7-N】



## 文学部



## 人間生活学部

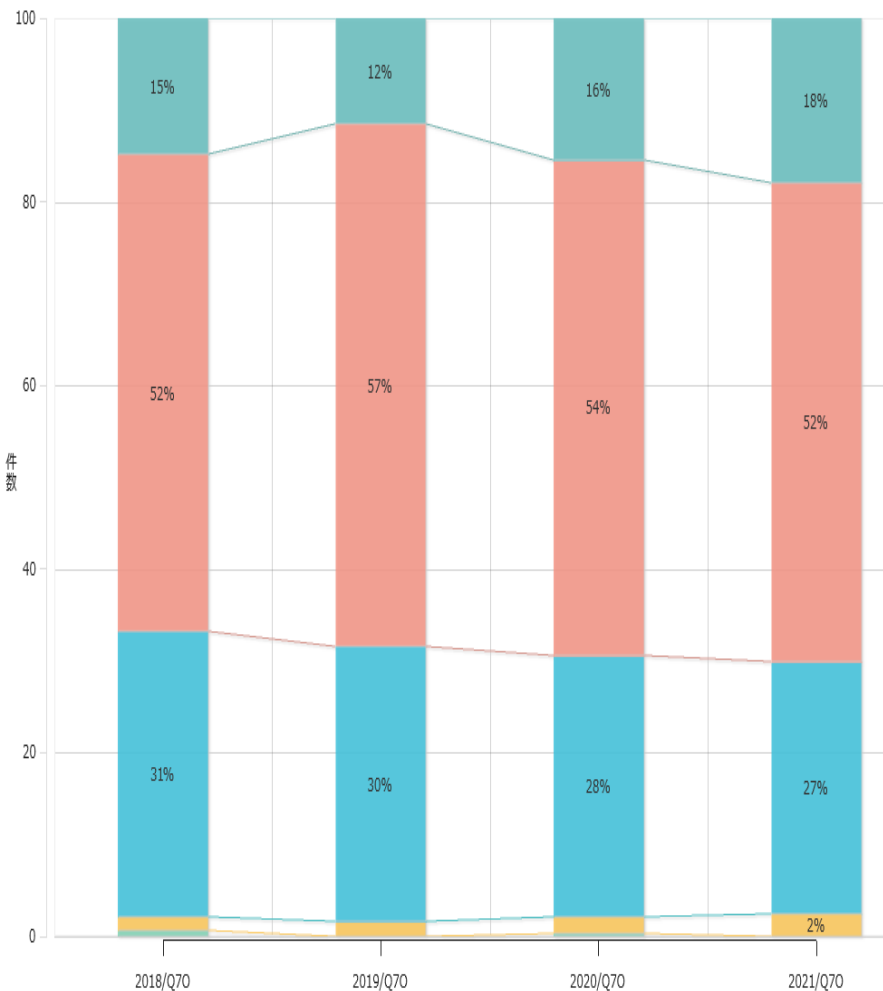
### 【コメント】

「大きく増えた」「増えた」と回答した割合、経年比較いずれも両学部で大きな変化はなかった。このことから、本調査結果からはコミュニケーション能力への対面（2018、2019年）、非対面授業（2020、2021年）による影響は見られなかった。

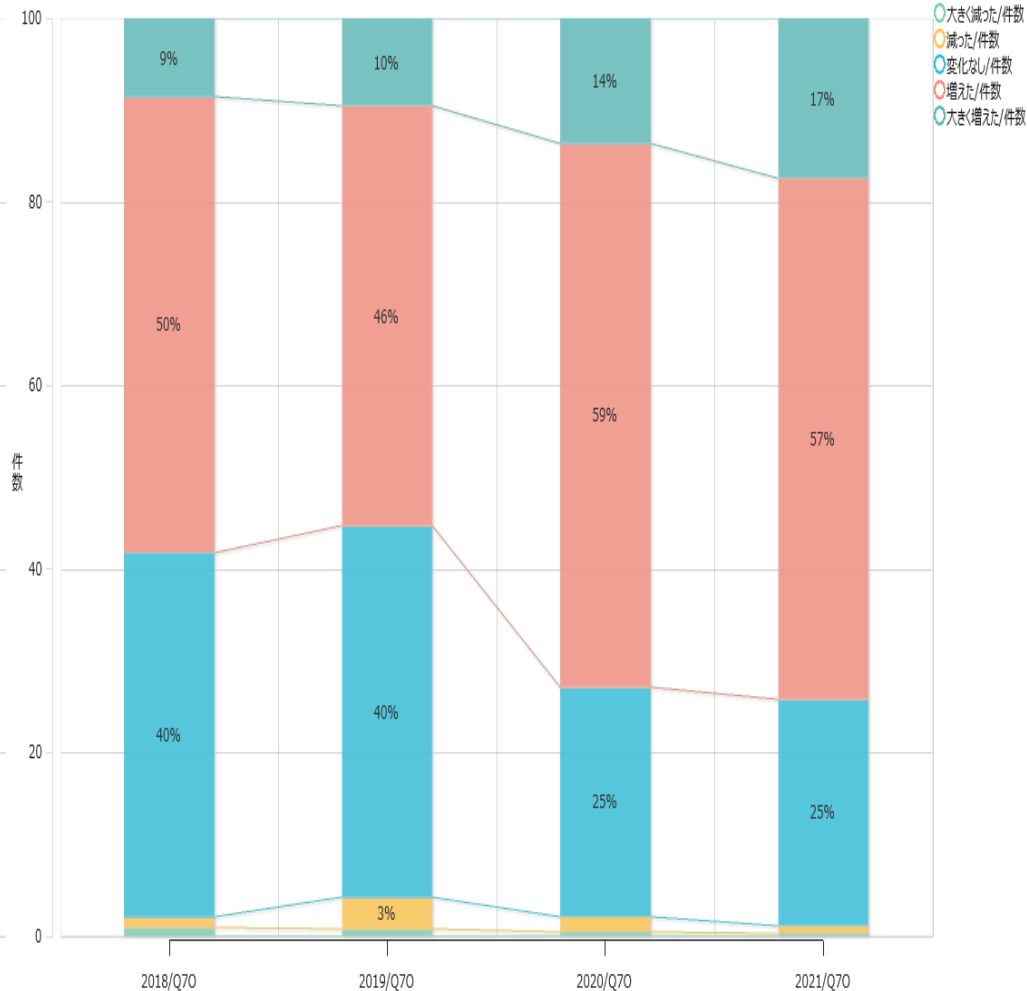


# 4-15. プレゼンテーションの能力

【Q7-0】



文学部

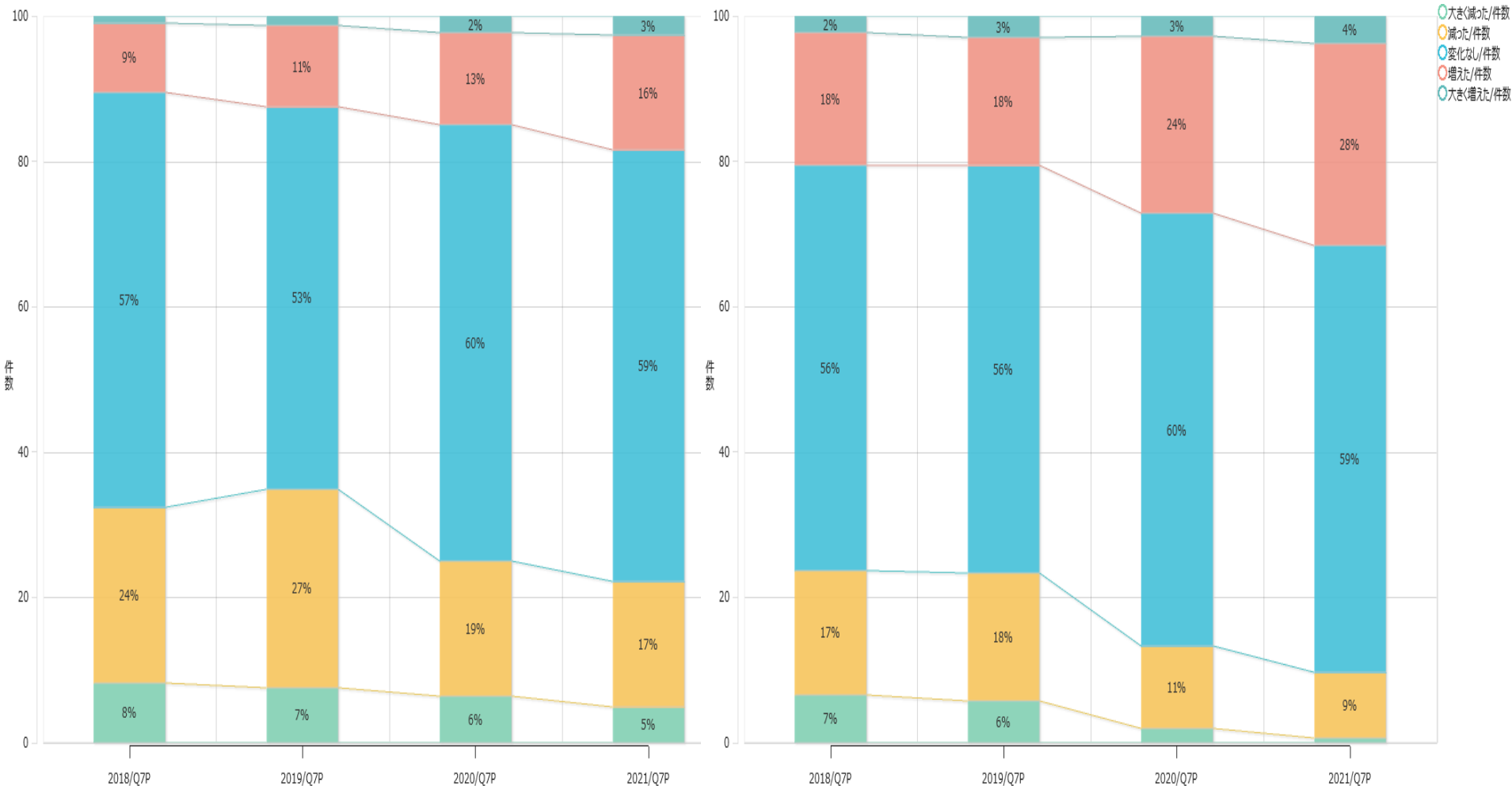


人間生活学部

【コメント】

コロナ前の2018、2019年調査結果では、学部間に差が見られ文学部の方が「大きく増えた」「増えた」と回答する割合が多かったが、2020、2021年調査ではその差がほとんど見られなくなった。

# 4-16. 数理的な能力 【Q7-P】



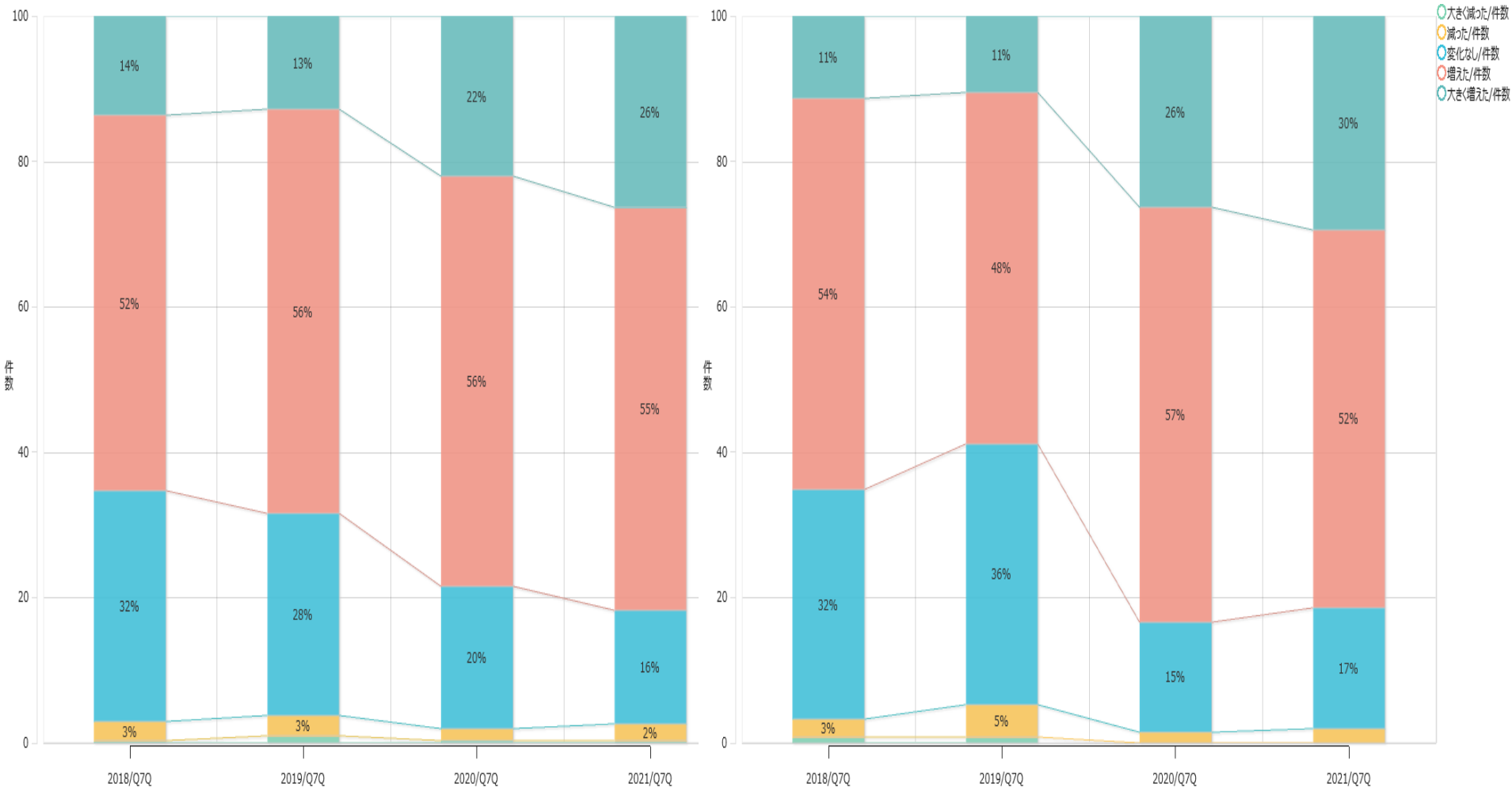
【コメント】

文学部

人間生活学部

両学部ともに、「大さく増えた」「増えた」の割合に年々増加傾向が見られる。非対面授業が多かった2020、2021年では教職員から対面でのサポートを受ける機会が少なく、授業等における諸課題について自身で処理する機会が多く、答えを導きだすための思考力が身についたと考えたと推測される。

# 4-17. コンピュータの操作能力 【Q7-Q】



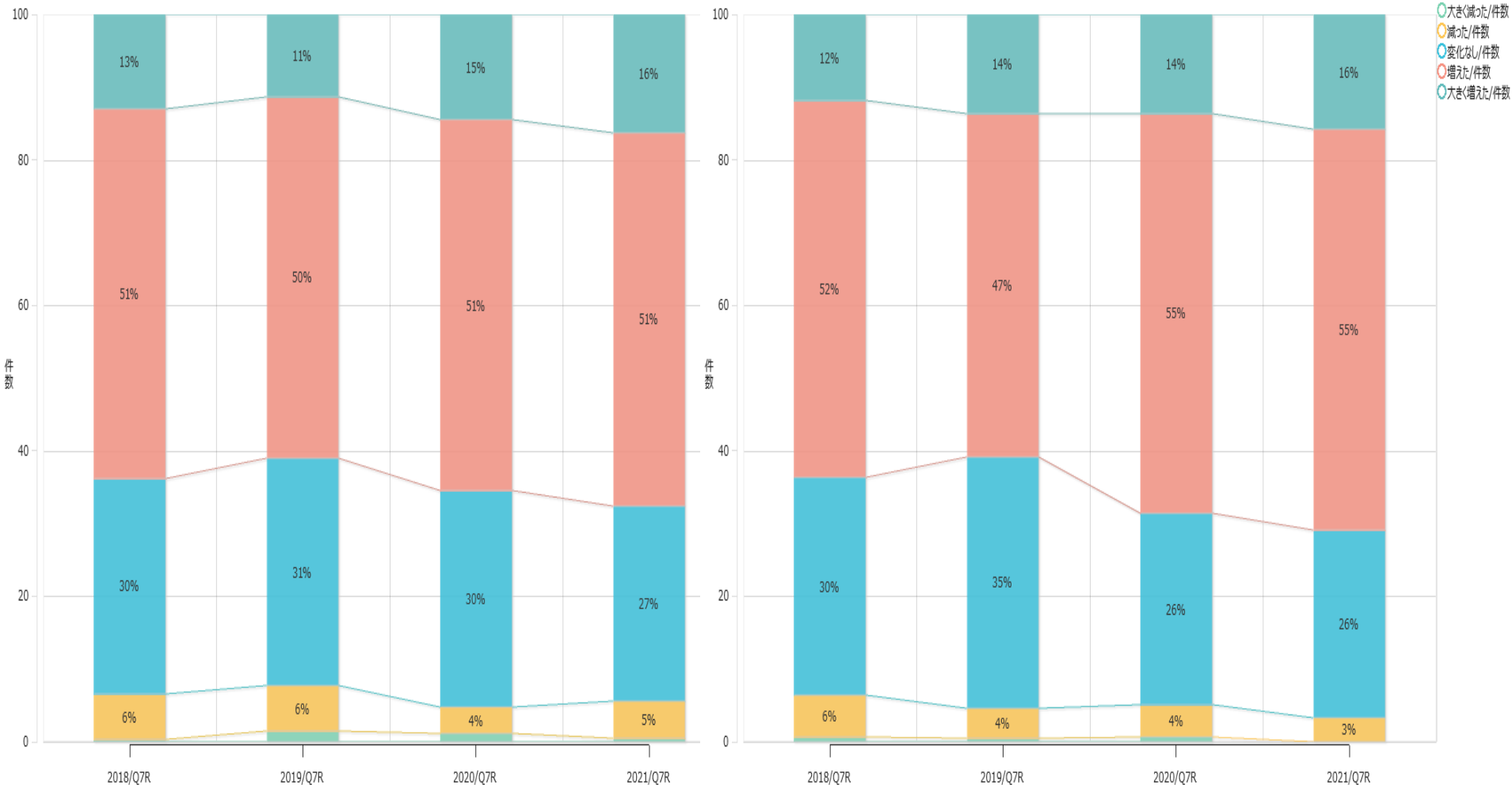
## 【コメント】 文学部

## 人間生活学部

両学部ともに、2020、2021年における「大きく増えた」「増えた」の割合がコロナ前の2018、2019年と比較して増加傾向にある。非対面授業が増えたことやLMSの導入により、コンピューターを使用したの授業や課題が増えた影響であることが示唆される。

# 4-18. 時間を効果的に利用する能力

【Q7-R】



【コメント】

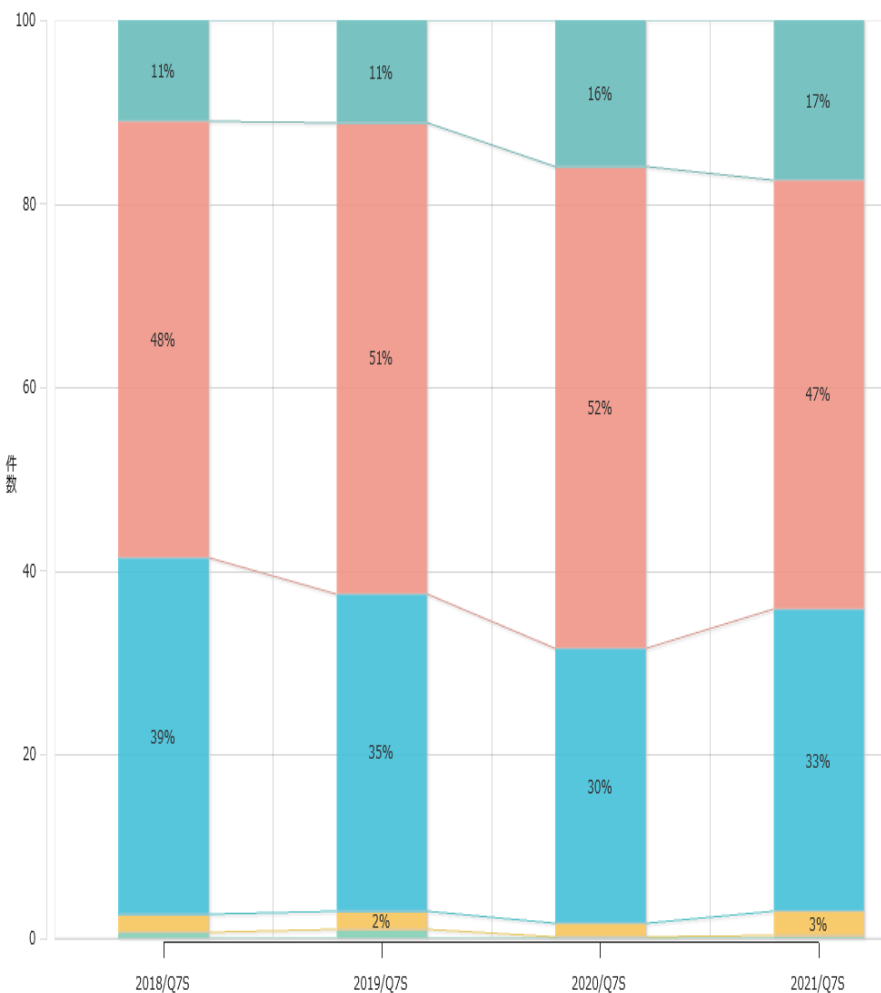
文学部

人間生活学部

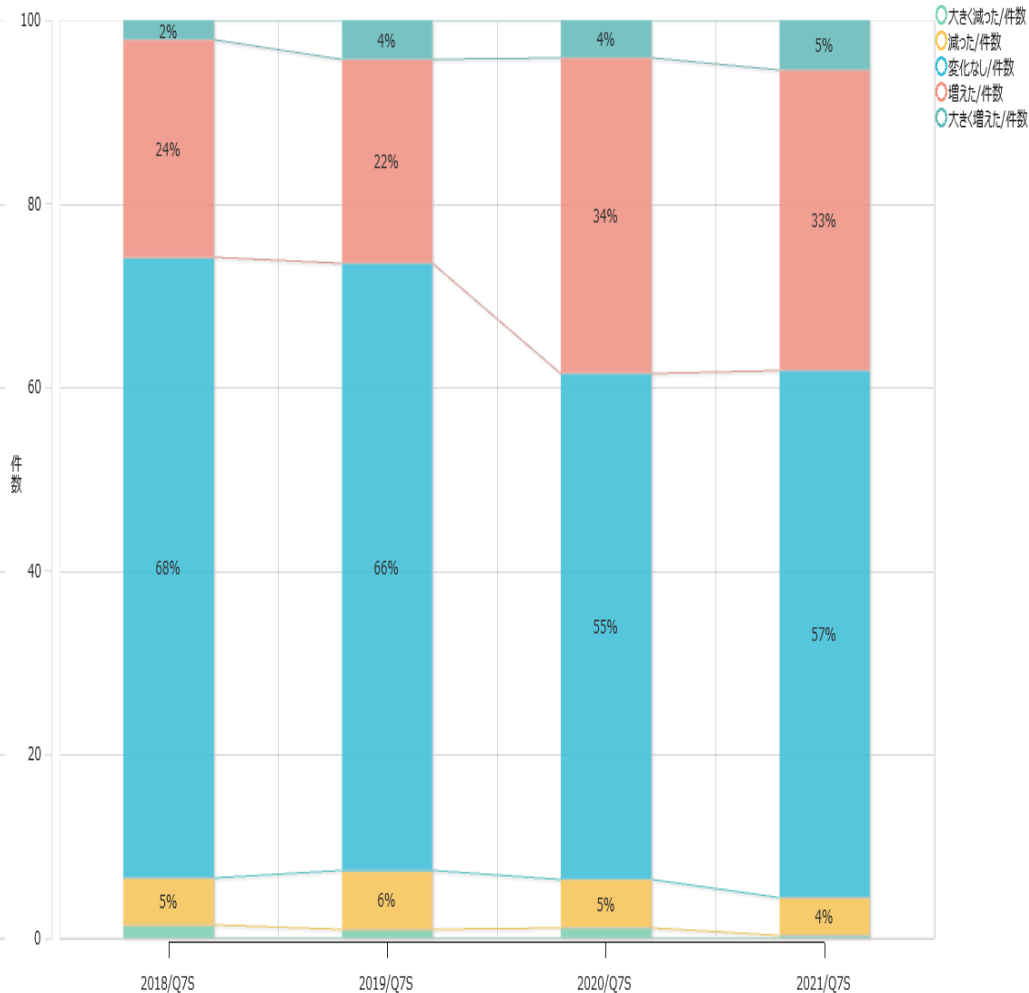
「大大きく増えた」「増えた」と回答した割合、経年比較いずれも両学部で大きな変化はなかった。このことから、本調査結果からは時間を効果的に利用する能力への対面（2018, 2019年）、非対面授業（2020, 2021年）による影響は見られなかった。

# 4-19. グローバルな問題の理解

【Q7-S】



## 文学部

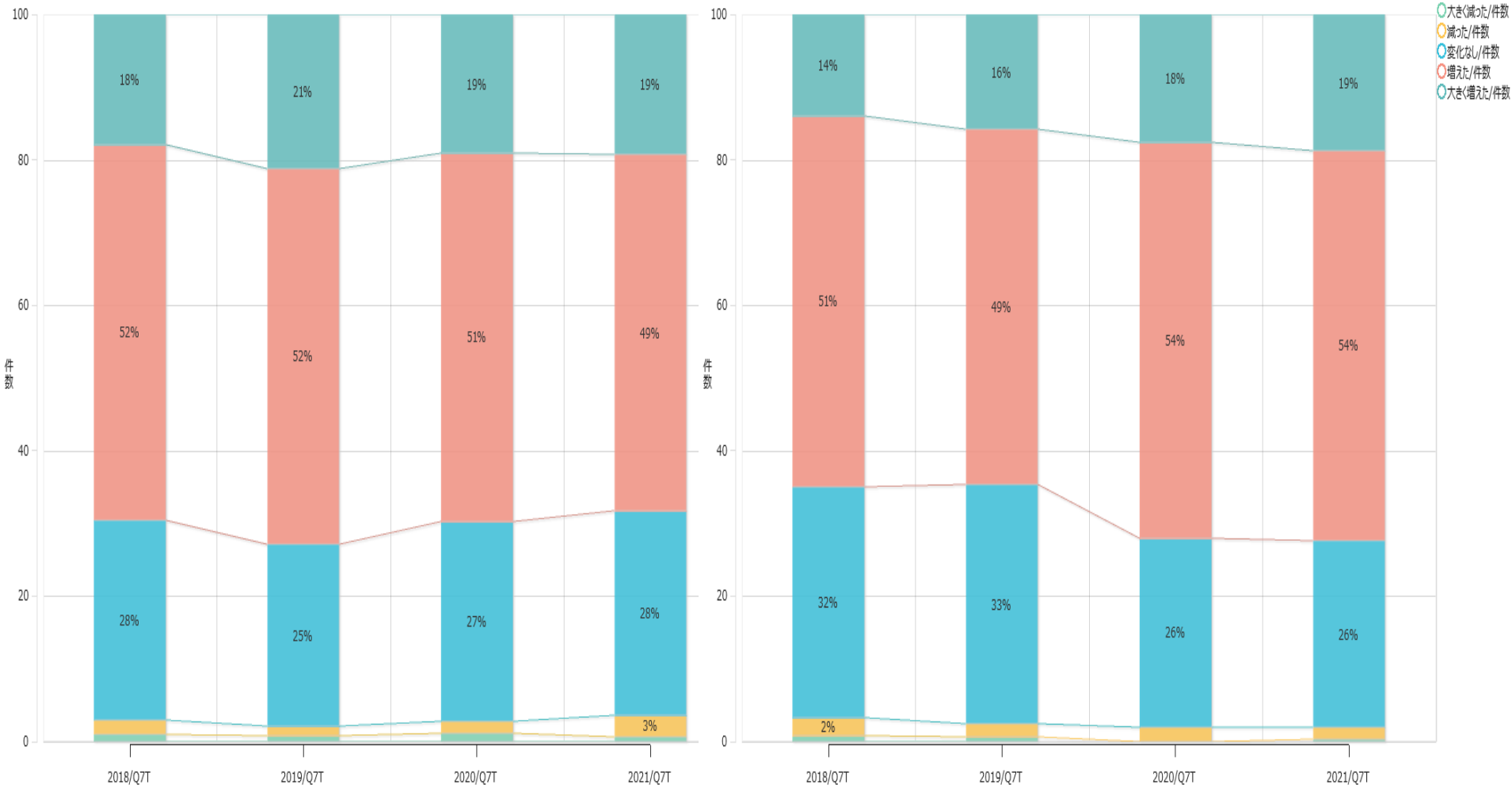


## 人間生活学部

### 【コメント】

いずれの年度においても文学部の方が高いという特徴が見られる。人間生活学部においては2020、2021年における「大きく増えた」「増えた」の割合がコロナ前の2018、2019年と比較して増加傾向にある。

# 4-20. 卒業後に就職するための準備の度合い 【Q7-T】



## 【コメント】 文学部

## 人間生活学部

「大きく増えた」「増えた」と回答した割合、経年比較いずれも両学部で大きな変化はなかった。このことから、本調査結果からは卒業後に就職するための準備の度合いへの対面（2018, 2019年）、非対面授業（2020, 2021年）による影響は見られなかった。

今回、コロナ前の2018、2019年とコロナ禍における対応として非対面授業を取り入れた2020、2021年との間で変化が見られた項目を中心に、要因として考えられることをコメントとして付したが、本調査における「能力の変化」は各個人の主観的な評価であることや、同じ対象集団による経時的な変化についての比較ではないことなどから、結果についての解釈は容易ではない。たとえば「専門分野や学科の知識」「リーダーシップの能力」「人間関係を構築する能力」「コミュニケーションの能力」などに関しては、非対面授業を取り入れた2020、2021年において、それ以前の結果とは大きな差が見られなかったものの、これらの能力が非対面授業でも十分身につくものであると判断することは難しいといえる。また、人間生活学部において増加が見られた「異文化の人々に関する知識」「異文化の人々と協力する能力」なども何らかのバイアスが生じていると考えられ、文学部の2021年調査において「大きく増えた」、「増えた」と回答した割合が減少している結果の方がより真実に近い可能性が考えられる。今後は、試験等の成績評価その他、客観的に測定可能な評価指標を含めて検討することが必要である。

## 5. 教育への満足度

**Q. あなたは、本学の教育内容・環境にどれくらい満足していますか。**

5-1. 専門教育あるいは所属学科の授業

5-2. 2年次生または3年次生を対象としたゼミ（演習）などの教育内容

5-3. 授業の全体的な質

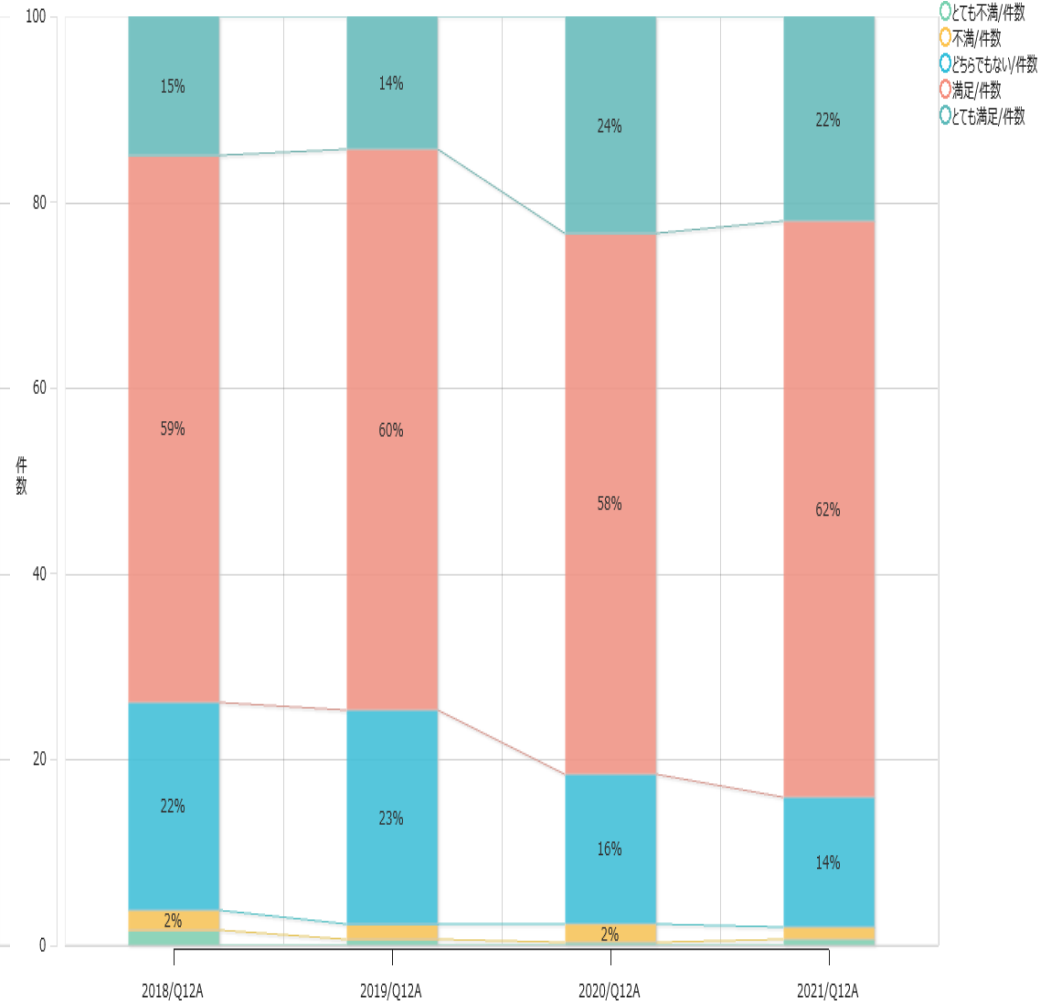
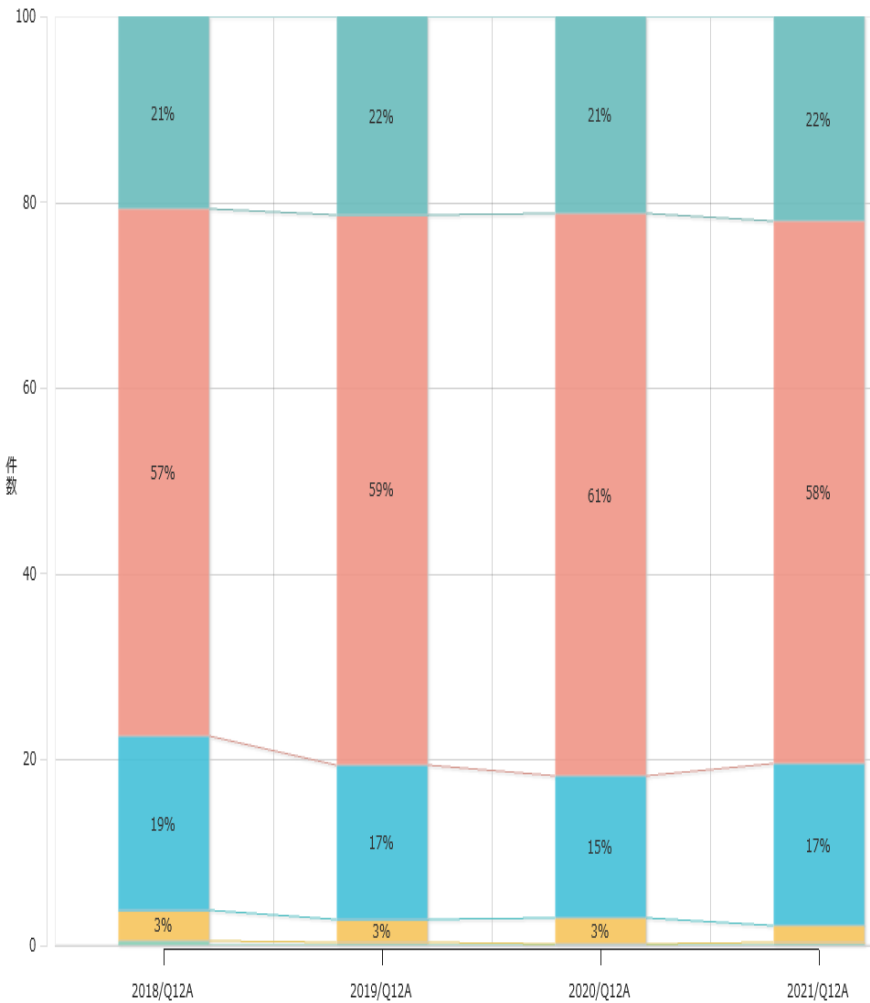
5-4. 教員と話をする機会

5-5. 多様な考え方を認め合う雰囲気



# 5-1. 専門教育あるいは所属学科の授業

[Q12-A]



【コメント】

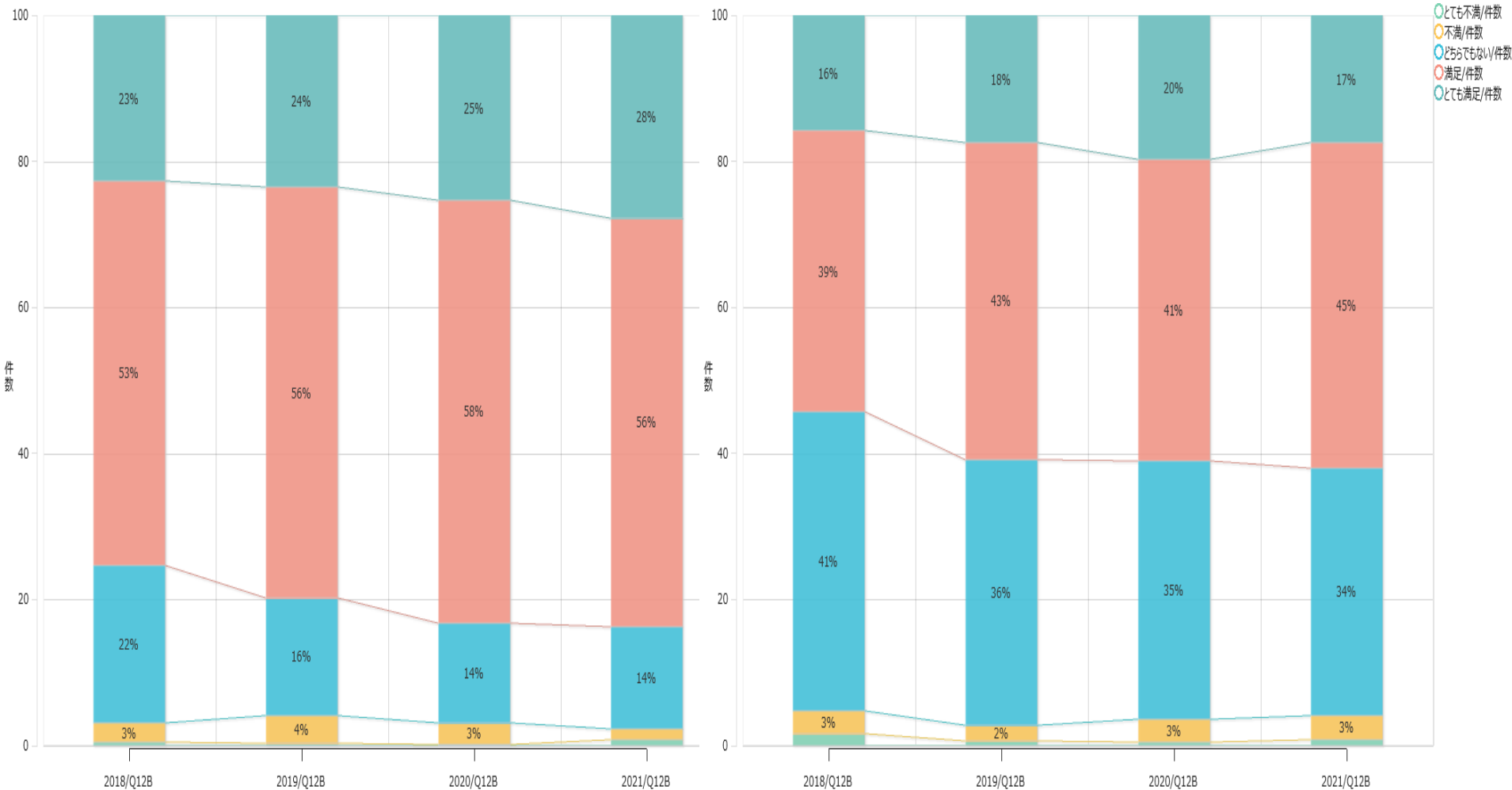
文学部

人間生活学部

「とても満足」と「満足」を合わせた割合について、文学部は毎年80%前後を維持しており、人間生活学部は過去最高の84%（2018年度比10ポイント増加）となった。IRコンソーシアム加盟大学全体の平均では約65%となっているため、両学部ともに学生の満足度が非常に高いことがわかる。今後も80%台の満足度を継続しつつ、内訳において「とても満足」の割合を増やしていくことが望ましい。

## 5-2. 2年次または3年次を対象としたゼミ（演習）などの教育内容

【Q12-B】



【コメント】

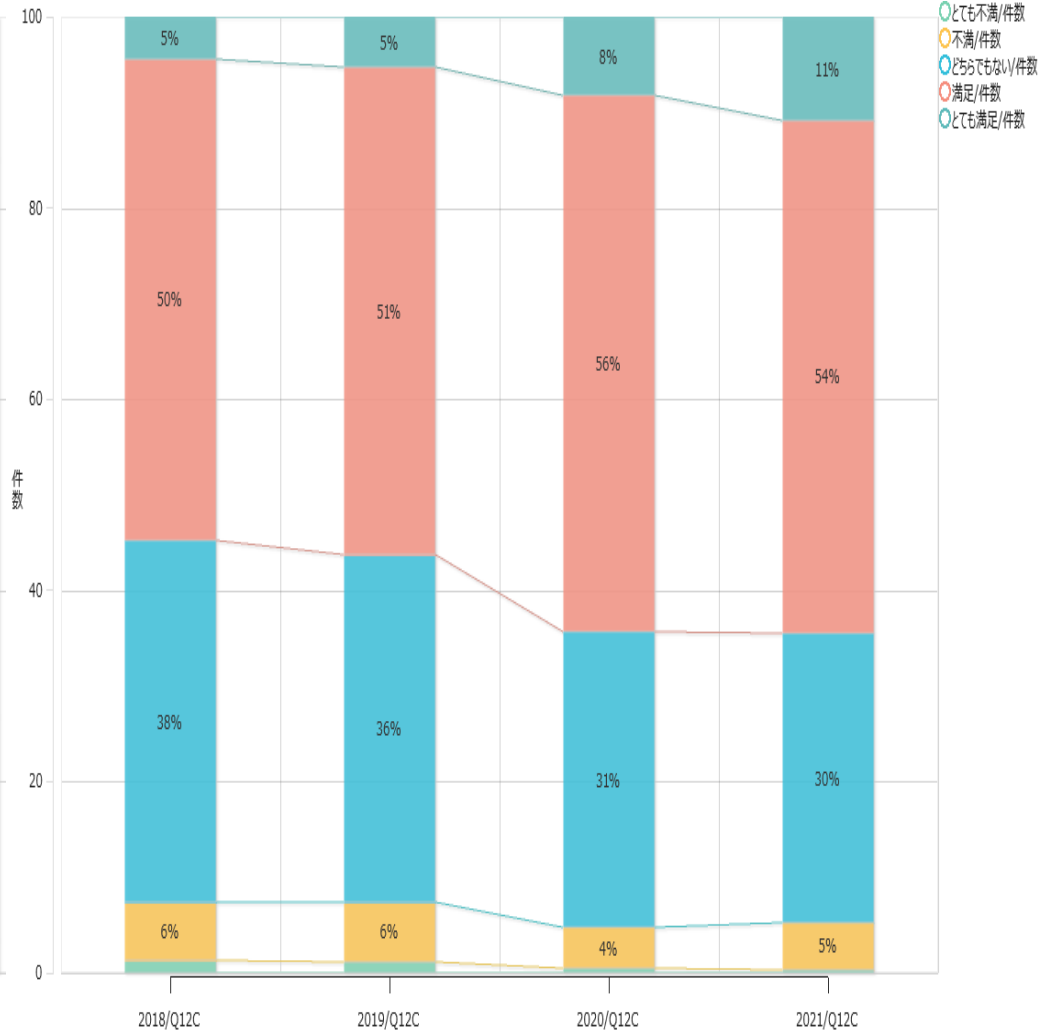
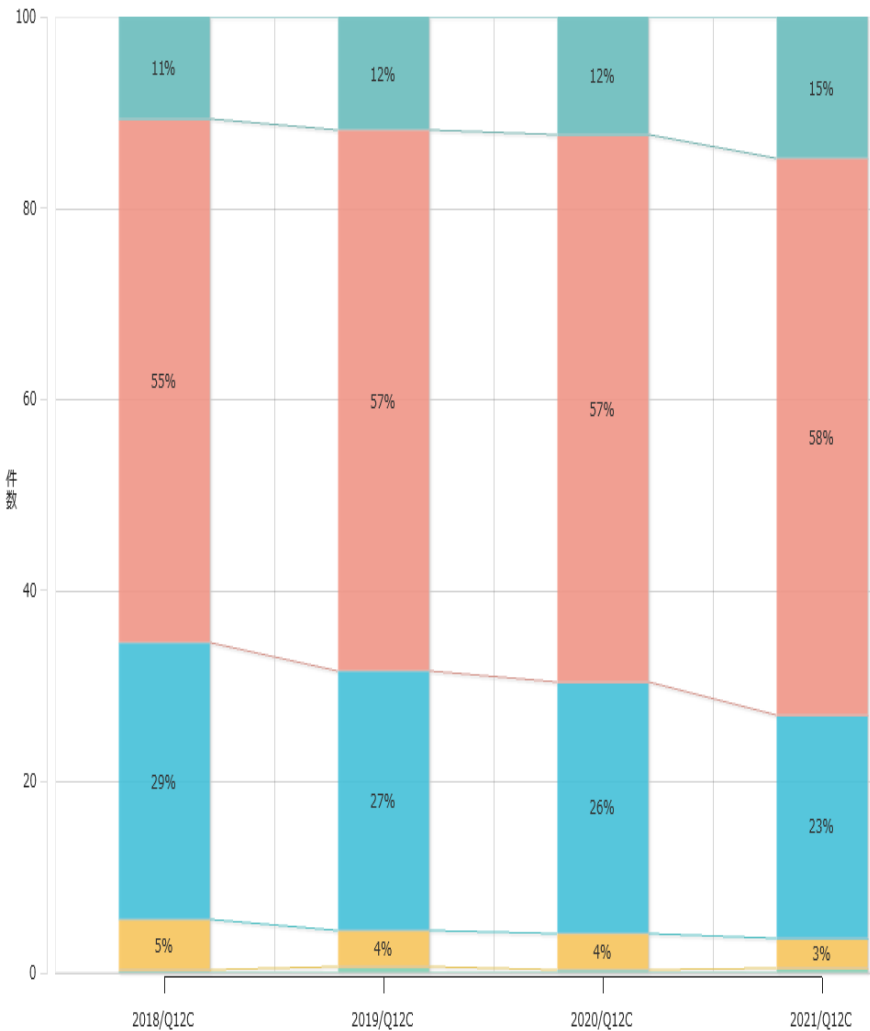
文学部

人間生活学部

過去4年間の変化をみると、両学部ともに「とても満足」と「満足」を合わせた割合が年々増加し、文学部は80%台、人間生活学部は60%台で満足度を維持している。学部間において20ポイント近く差があるが、文学部以上に対面授業が望まれている人間生活学部においては、コロナ禍による非対面授業の影響も大きいのではないかと考えられる。

# 5-3. 授業の全体的な質

【Q12-C】

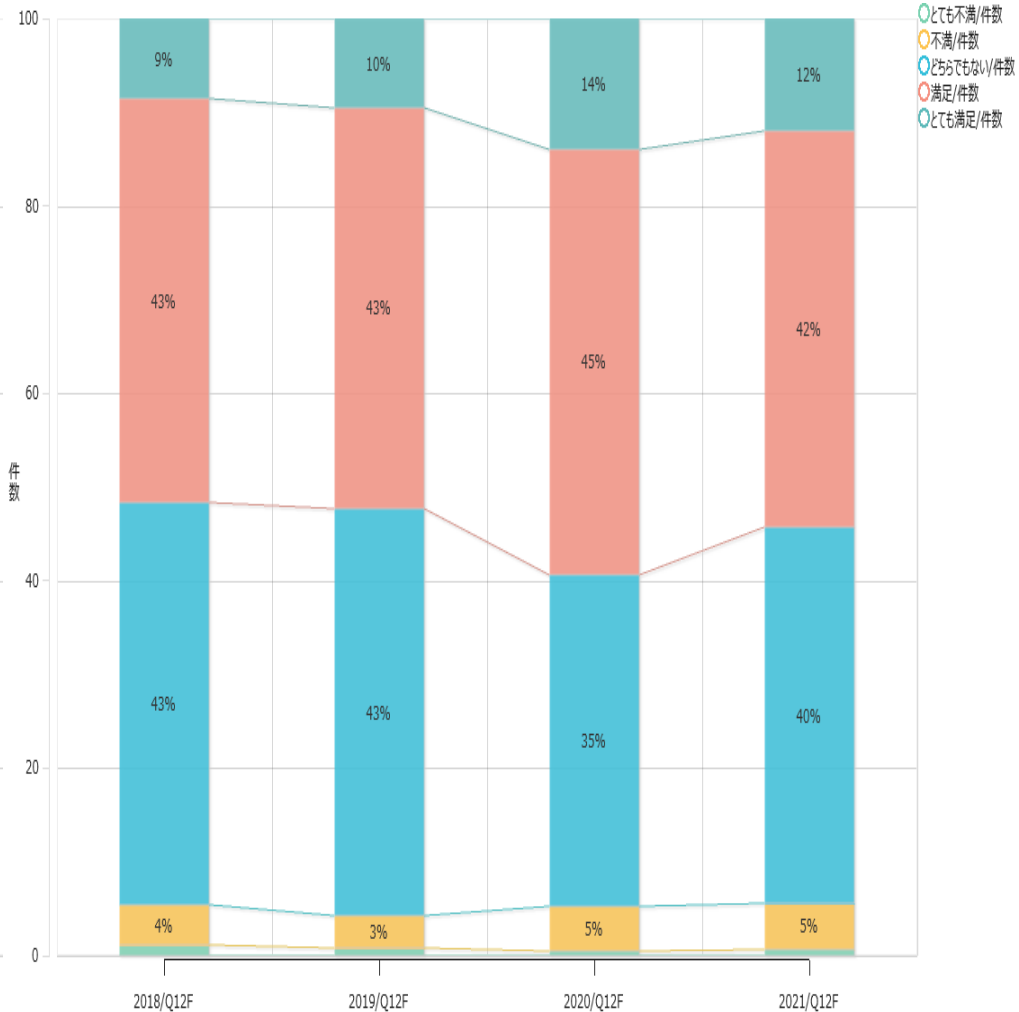
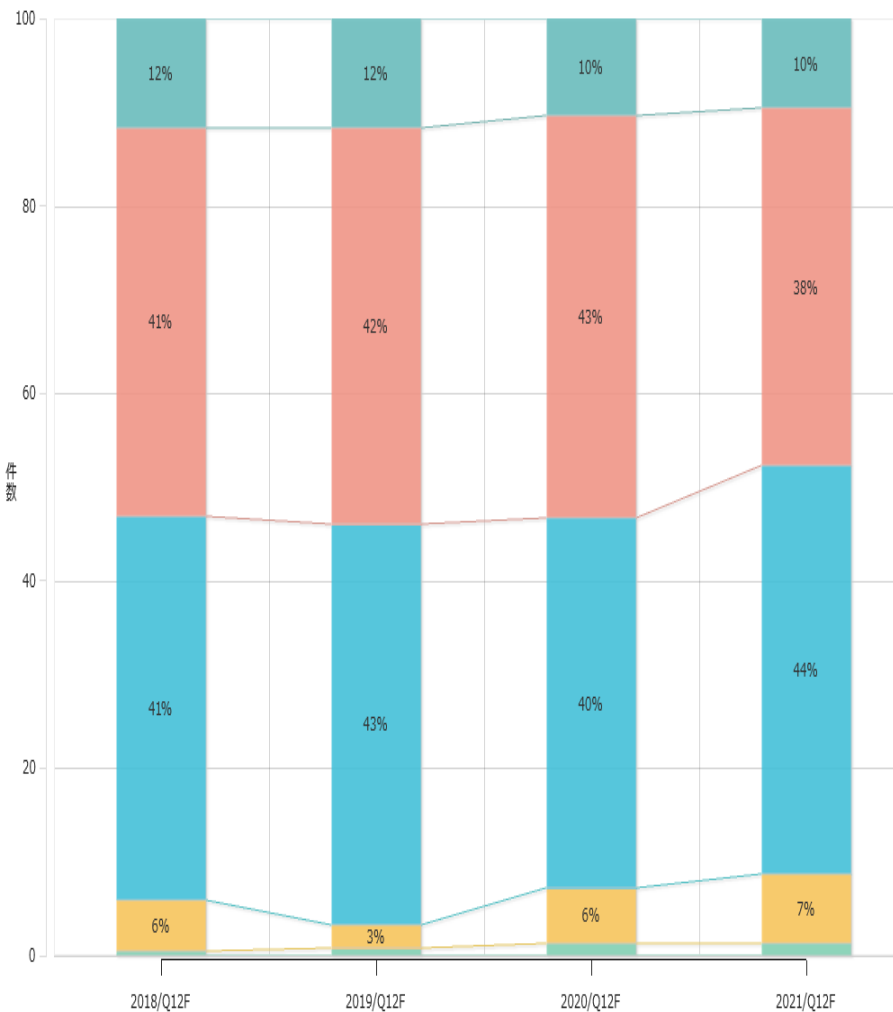


## 【コメント】 文学部

## 人間生活学部

文学部では「とても満足」も「満足」も年々増加しており、2021年度では合わせた割合が73%となった。人間生活学部では「満足」が2ポイント減少となっているが、「とても満足」が年々増加しており、合わせた割合が65%となった。今後は「どちらでもない」と回答する学生を減らすための工夫が必要であると思われる。

# 5-4. 教員と話をする機会 【Q12-F】



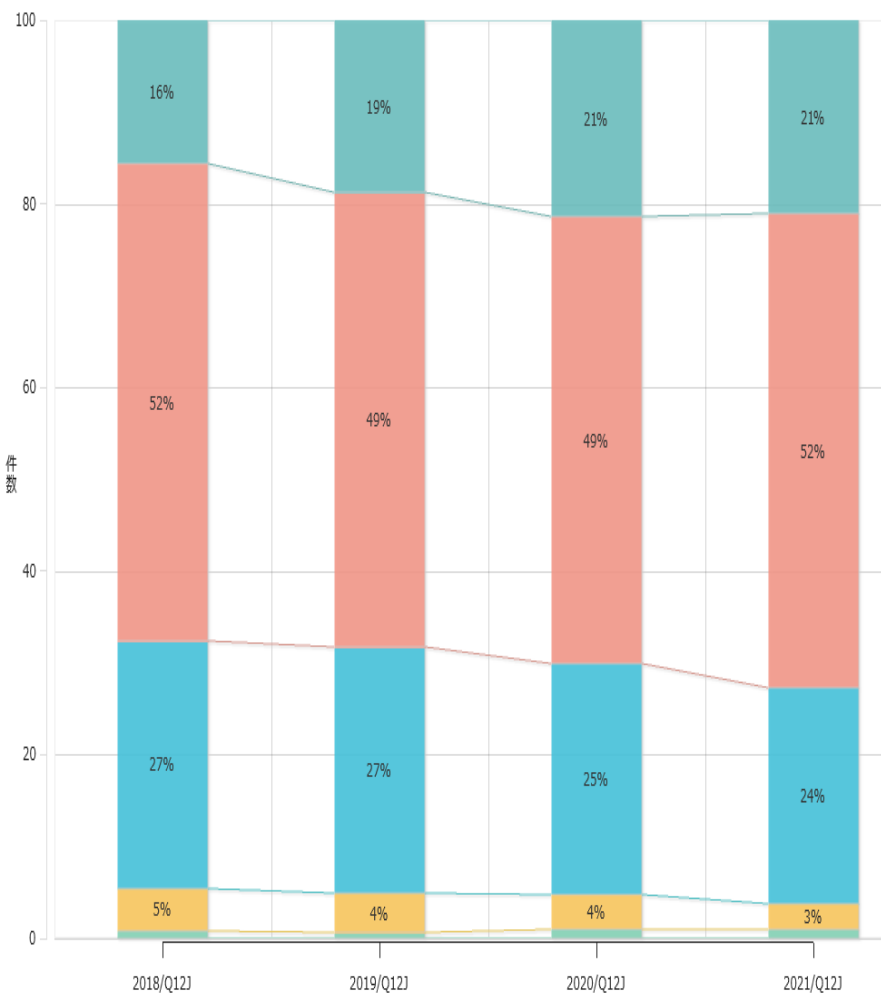
【コメント】 **文学部**

**人間生活学部**

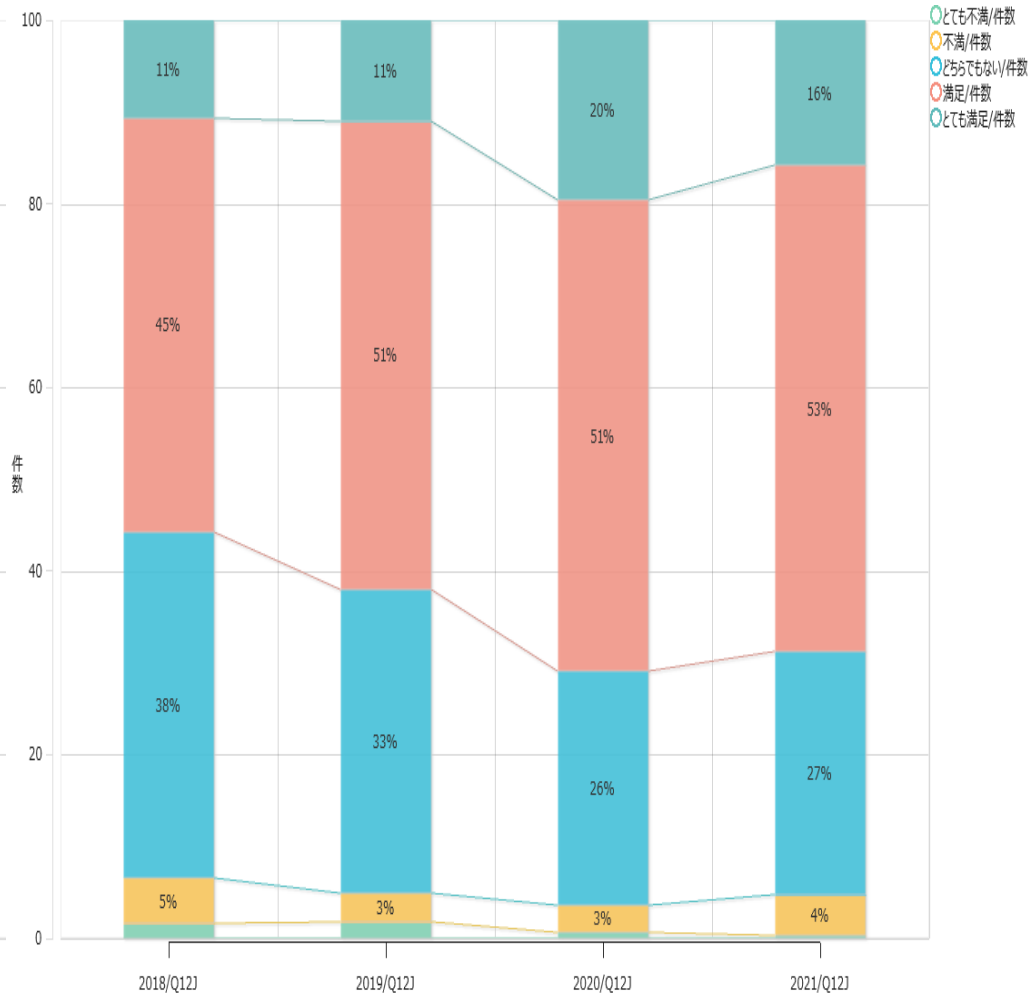
両学部ともに2018年度・2019年度では割合の変化がほぼ見られず、2020年度以降に変化があることがわかる。これは、コロナの影響による外的要因が大きいものと考えられる。

## 5-5. 多様な考え方を認め合う雰囲気

【Q12-J】



文学部



人間生活学部

### 【コメント】

「とても満足」と「満足」を合わせた割合について、2018年度から比べると文学部は5ポイント増加の73%、人間生活学部は13ポイント増加の69%となっている。IRコンソーシアム加盟大学平均は約54%のため、本学における学生の満足度が高いことが伺える。

2021年度では文学部の「2年次または3年次を対象としたゼミ（演習）など」「授業の全体的な質」「多様な考え方を認め合う雰囲気」、人間生活学部の「専門教育あるいは所属学科の授業」「2年次または3年次を対象としたゼミ（演習）など」「授業の全体的な質」における満足度が前年度よりも高いという結果だった。

過去4年間における調査結果の比較では、全質問のうち3-4を除いて「とても満足」と「満足」を合わせた回答の占める割合が増加した。また、微減となった3-4「教員と話をする機会」については、コロナ禍による非対面授業への移行といったような要因が影響していると考えられる。

「IRコンソーシアム加盟大学における基礎集計※1」との比較では、本学における学生の教育への満足度が加盟大学全体の平均を全質問において5ポイント以上上回っており、特に文学部では「2年次または3年次を対象としたゼミ（演習）など」が、人間生活学部では「多様な考えを認め合う雰囲気」の満足度が高いという結果だった。

コロナ禍においても、質の高い授業が提供できていることは、各教職員による日々の努力・工夫の結果であると考えられる。今後も授業内容の見直しやFD研修等で教育の質の更なる向上を図り、ディプロマ・ポリシー達成に向けた取り組みが期待される。

※1 [https://irnw.jp/images/%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E9%9B%86%E8%A8%882021\\_%E5%AD%A6%E8%AA%BFHP%E7%94%A8.pdf](https://irnw.jp/images/%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E9%9B%86%E8%A8%882021_%E5%AD%A6%E8%AA%BFHP%E7%94%A8.pdf)

## 6. 設備・制度への満足度

**Q. あなたは本学の設備や学生支援制度にどの程度満足していますか。**

**6-1. 図書館の設備（蔵書やレファレンスサービス）**

**6-2. コンピュータの施設や設備**

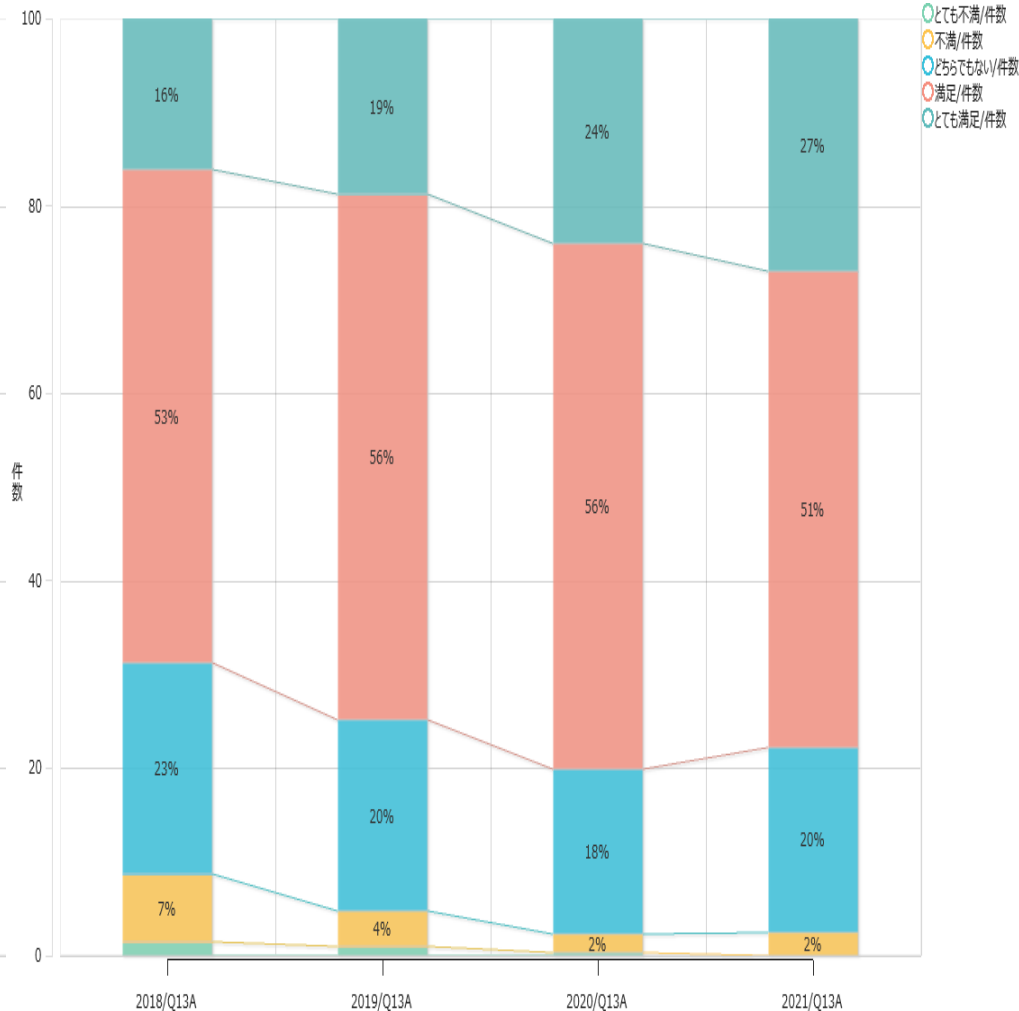
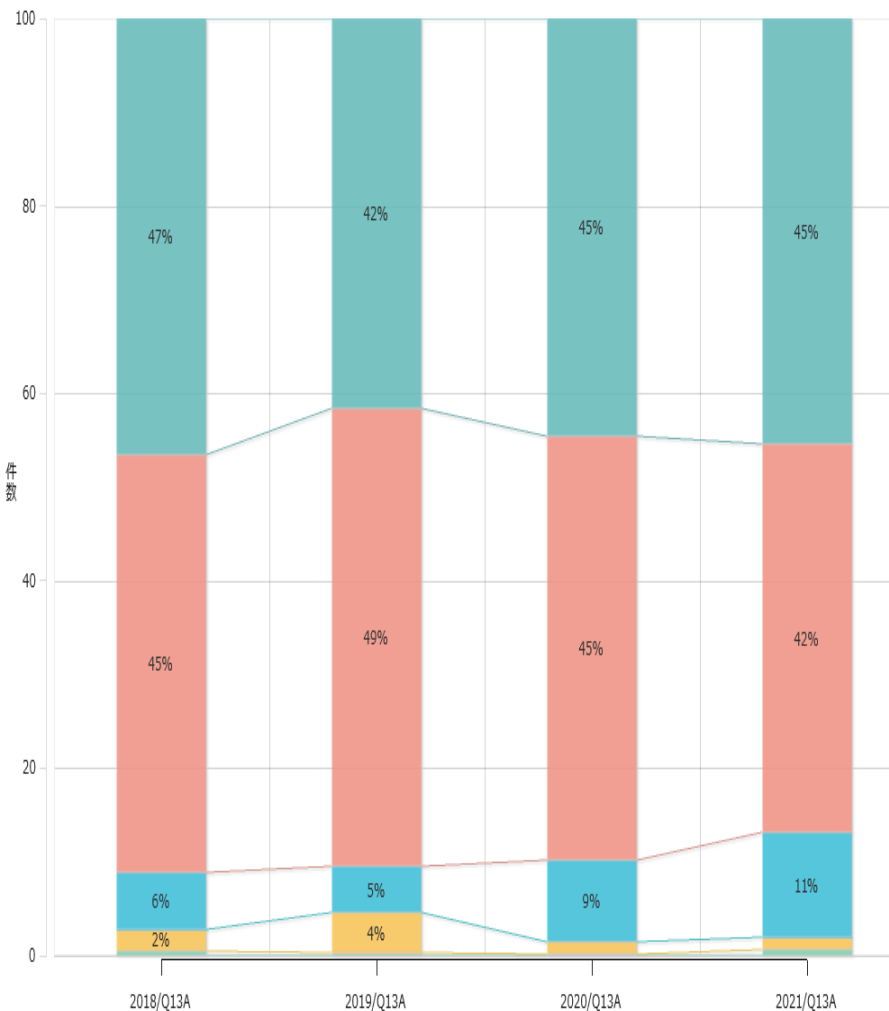
**6-3. 奨学金などの学費援助の制度**

**6-4. 健康・保健サービス（心身の健康に関わる問題についての診療や相談）**

**6-5. キャリアカウンセリング（就職や進学に関する相談）**

# 6-1. 図書館の設備（蔵書やレファレンスサービス）

[Q13-A]



## 【コメント】 文学部

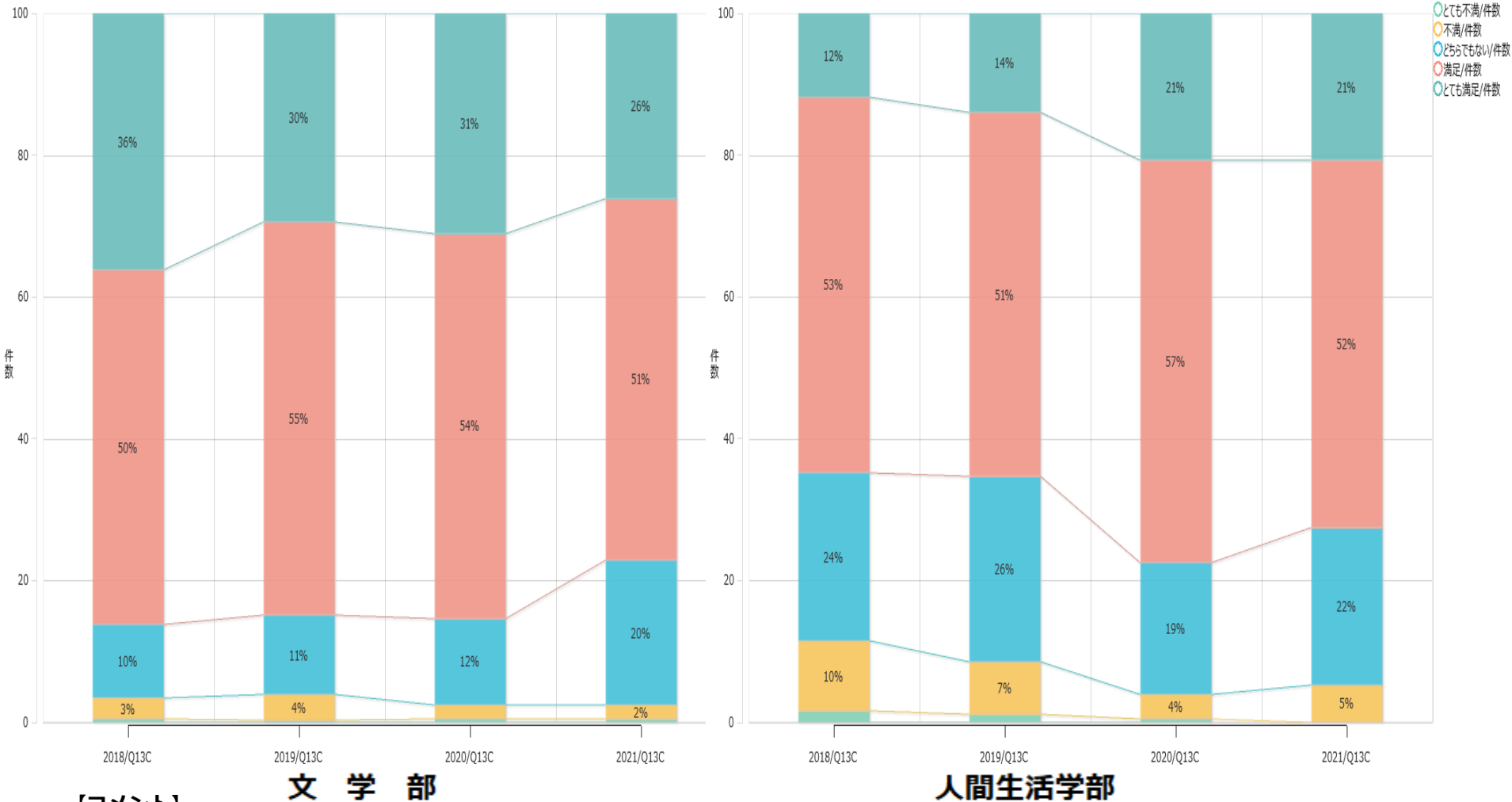
## 人間生活学部

2021年度も非対面授業期間は両図書館で送料図書館負担の郵送貸出、メールでのレファレンス受付、他大学資料の取り寄せ、資料貸借の費用を図書館が引き続き負担し学生へのサービスを継続した。図書館内の環境も感染対策を実施し、除菌ボックス、館内換気、座席の間引き、ラーニング・commonsやアクティブ・ラーニング・スペースの個別学習スペースとしての開放など一部施設の利用制限を緩和した。ただ季節を問わず換気をしているため館内温度の調節に苦労した。



# 6-2. コンピュータの施設や設備

[Q13-C]

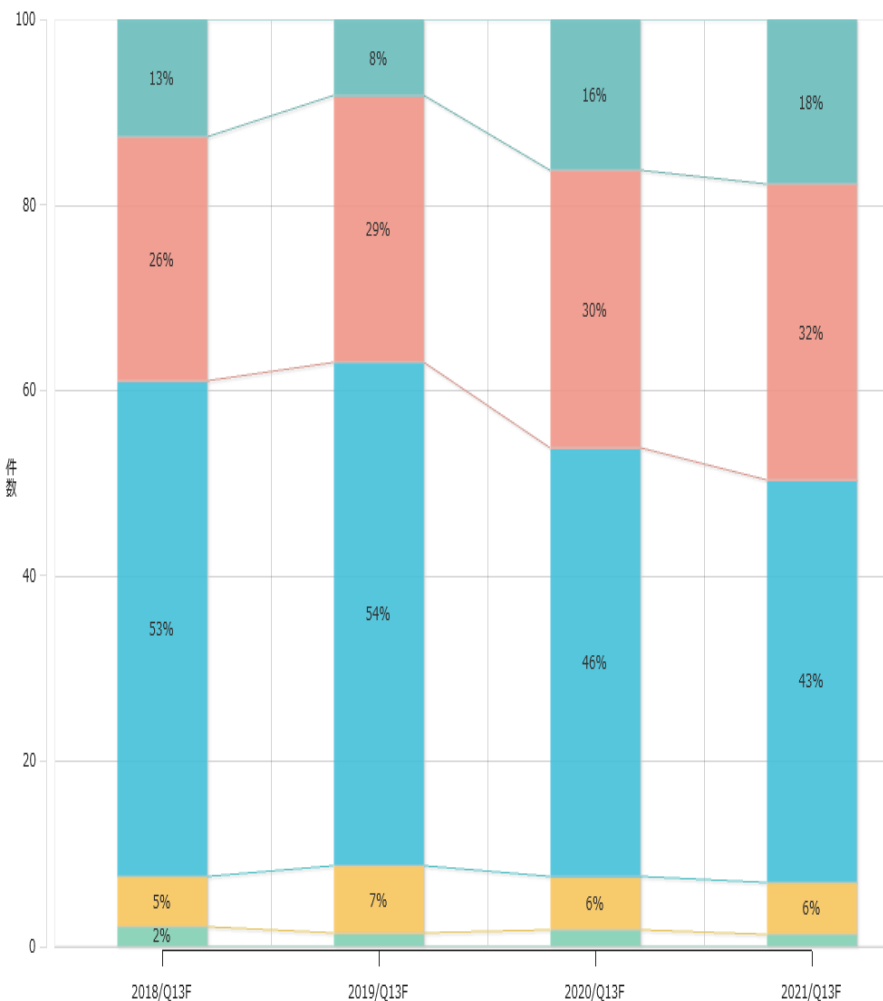


**【コメント】**

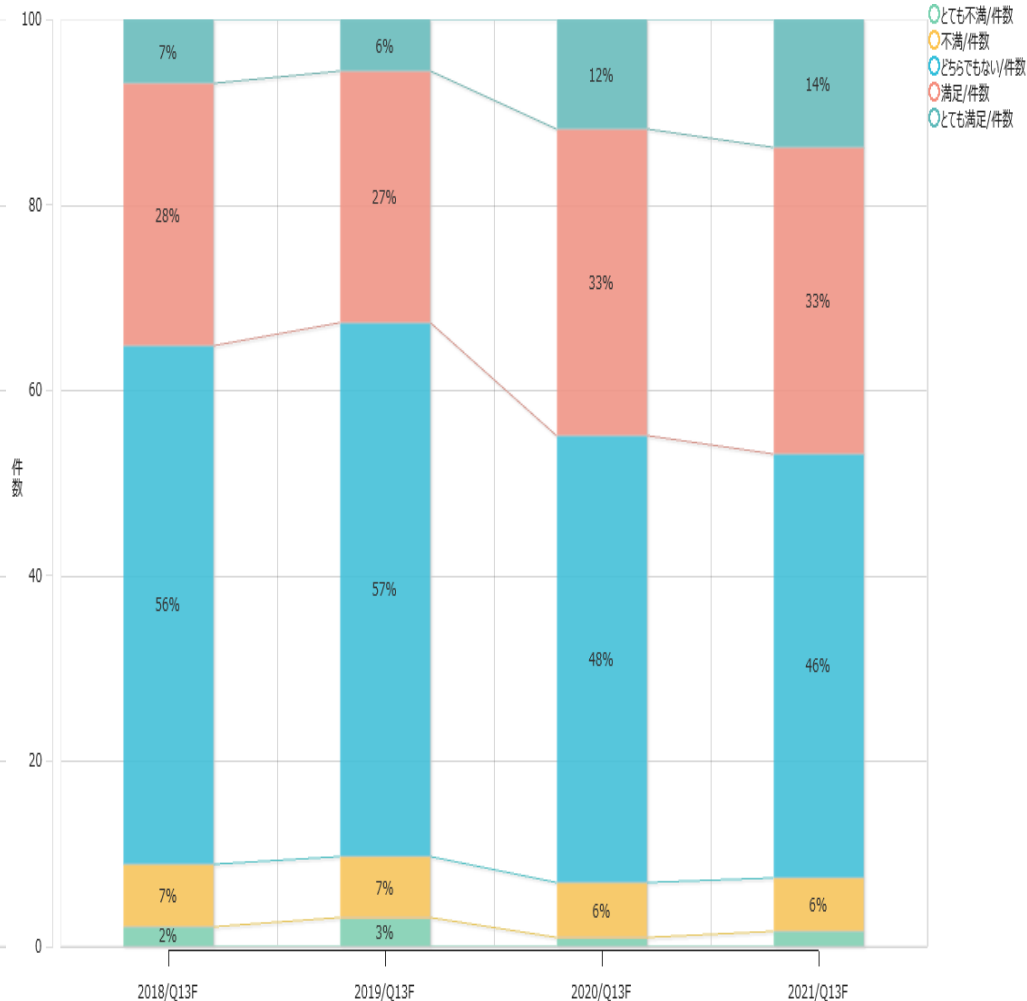
両学部ともに昨年度に比べ満足度がやや下がっている。人間生活学部はコロナ禍前の水準以上を保っているが文学部では調査開始以降でもっとも低い。パソコン教室以外の自習室、図書館のパソコンの老朽化が起因しているのか、それともこの程度の設備は普通と感じているのかは定かではない。また、学生が自身のパソコンを持ち込んで来る人数も増えており、学生が大学のパソコンを利用しない傾向に進んでいるのも事実である。小中学校ではGIGAスクールが進み、大学のIT環境についても従来型を見直し学生と時代のニーズに合った設備環境を進めて行かなければならない。

## 6-3. 奨学金などの学費援助の制度

【Q13-F】



文学部



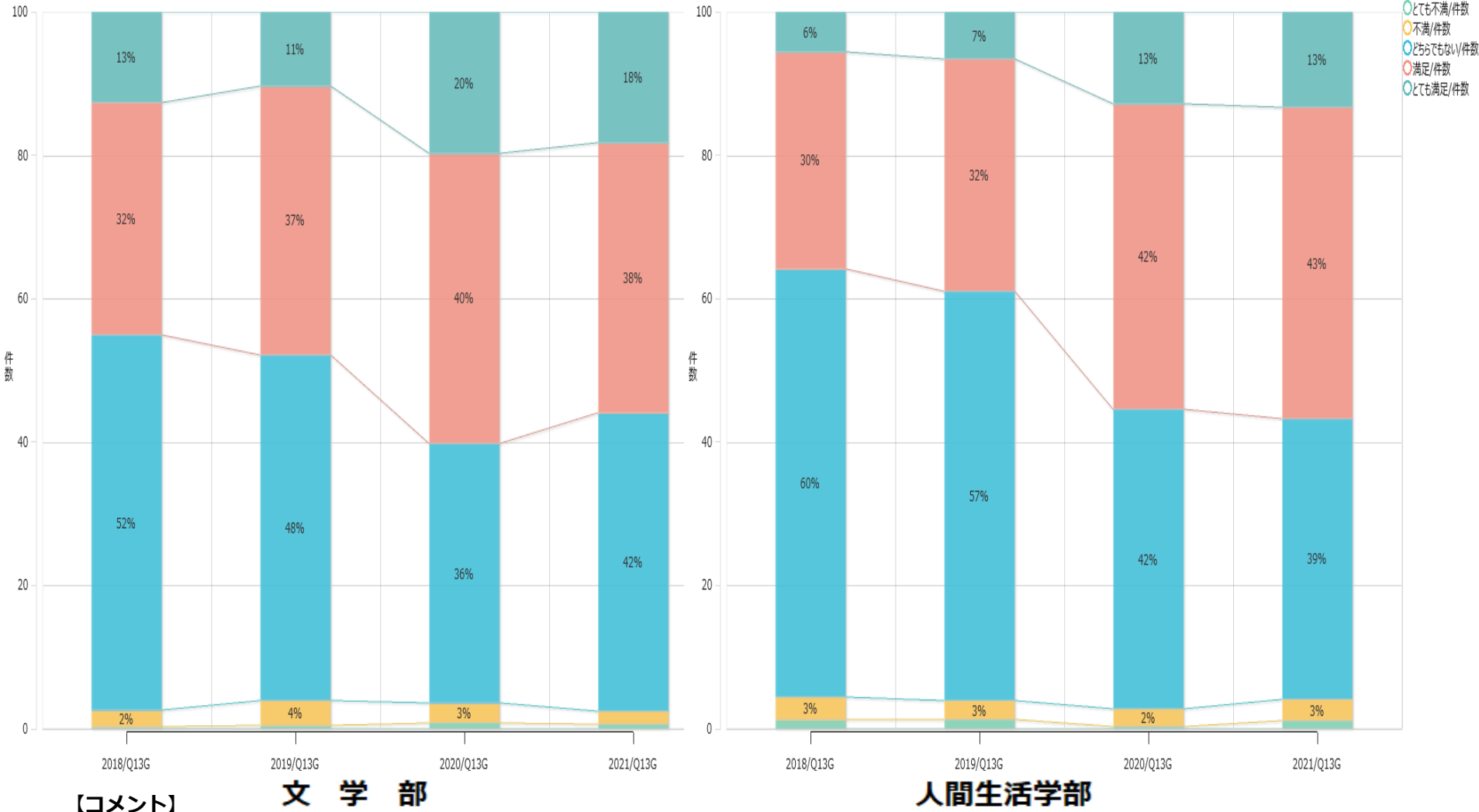
人間生活学部

【コメント】

両学部とも満足度が若干上昇している。2021年度は対面による奨学金の募集説明会を開催し、2020年度から開始した高等教育の修学支援新制度をより周知することができ、広く浸透できたことが要因と考えられる。

# 6-4. 健康・保健サービス（心身の健康に関わる問題についての診療や相談）

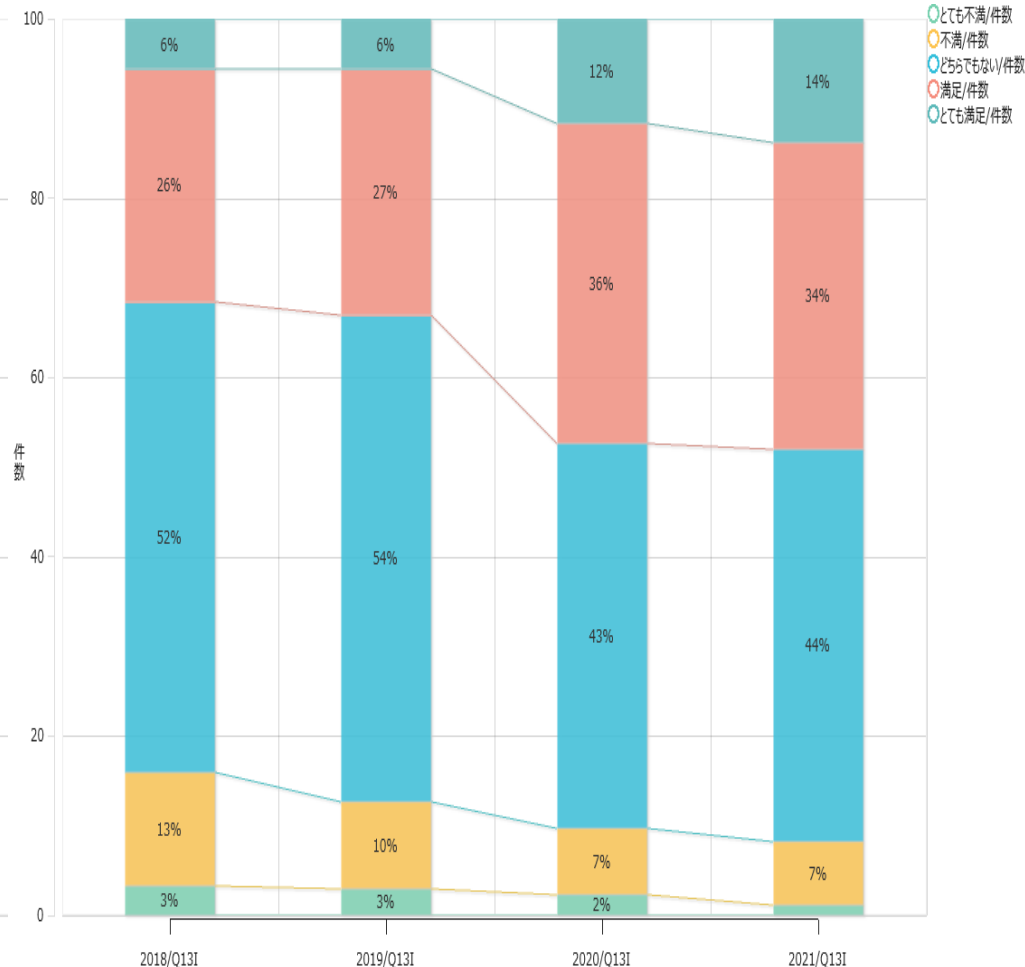
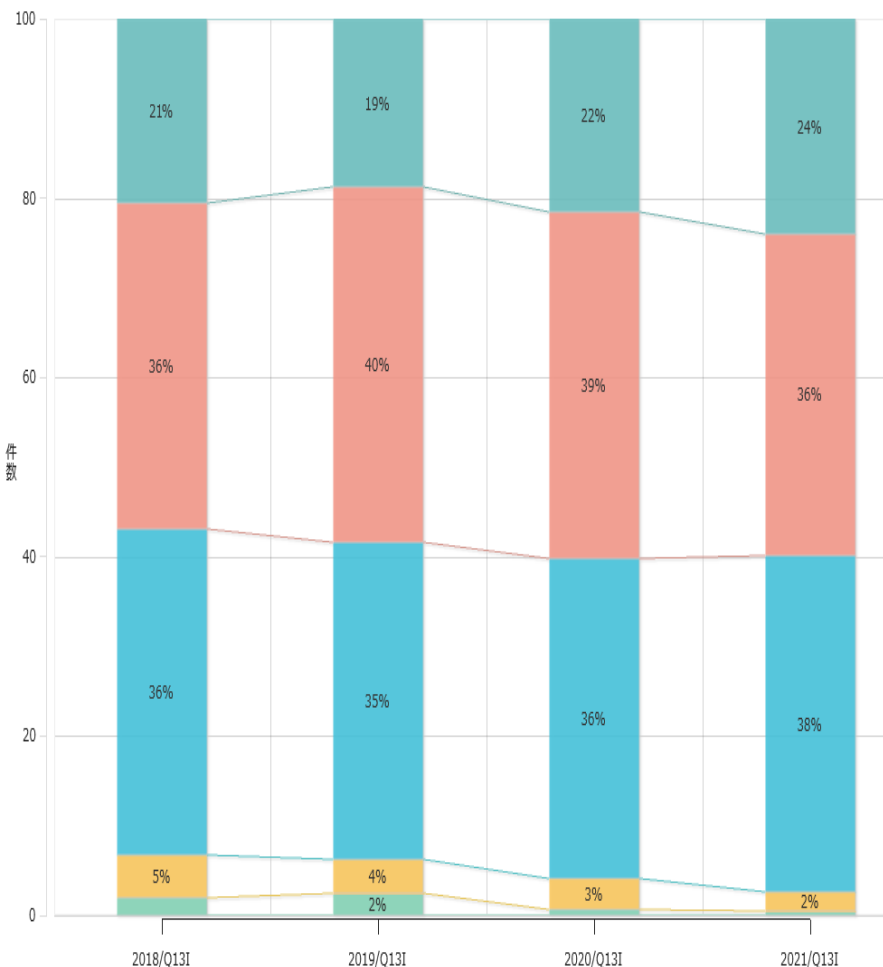
【Q13-G】



両校舎とも、昨年度とほぼ変わらない結果である。コロナ禍で特例欠席の電話対応や、カウンセリング予約件数が増加した。満足度に関しては今年度だけでは判断できないため、来年度以降の評価とする。  
学生相談室、保健センターでは今後とも、教職員との連携を行いながら、個々に応じたケアの実践を行っていききたい。

# 6-5. キャリアカウンセリング（就職や進学に関する相談）

[Q13-I]



【コメント】

文学部

人間生活学部

前年度同様、両学部共に I R コンソーシアム加盟大学全体平均（評価：「満足」以上）39.8%を上回る結果となったが、各学部の前年度比較ではほぼ横ばい。コロナ禍対応として開始したZoomによる就職支援講座や個別面談が定着し、利便性も含め一定の評価を得ていると考えられる。就職支援全体の在り方としてアフターコロナでも対面と非対面のハイブリッド式が求められている。一方で、キャリア面談の利用者数が伸び悩みの傾向もあり、今後、学生との接点を増やすことが課題と考える。

コロナ禍2年目の2021年度として、昨年と同等の傾向と捉えられる。

また、コロナ禍以前と比べ、この2年間は学生に対するサービスや制度に関して大きく満足度が上昇している。

これは、大学として従来型の対面サービスの質を低下させない工夫と、学生を支援する制度が強化された面が大きな成果を上げたと考えられる。特にオンラインサービスを活用した様々な事柄が必然的に大学の業務や教育、学生サービスを大きく変え、コロナ禍以前より高い満足度を得る結果と言えるのではないだろうか。

対面が戻りつつ中でもオンラインサービスと併用し、満足度の高い学生サービスの維持に努めなければならない。